

鬼の居る世界で 【雲柱】 八雲結

sirius

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

余命少ない少年が鬼滅の刃の世界に異世界憑依する話。

一つの体に二つの心

少女（少年）は互いに協力し鬼を倒す為、奔走する。

その力は二つの呼吸を使いこなし、新たな呼吸を生み出すまでに至るのであった。

誤字脱字は気付き次第修正しています。何か気付いた所がありましたら。感想まで

目次

第01話	始まり	1
第02話	精神世界	10
第03話	闘い	14
第04話	決闘	22
第05話	前夜	25
第06話	決着	30
第07話	育手	37
第08話	それぞれの呼吸	44
第09話	最終選別	52
第10話	腕鬼	59
第11話	刀の色	66
第12話	休養	73
第13話	疑惑	78
第14話	鬼と人	85
第15話	下弦の壱	91
第16話	雲の呼吸	98
第17話	願望	105
第18話	敗北	111
第19話	死の先に	115
第20話	欠月	121
第21話	蝶屋敷	125
第22話	思い	130
第23話	柱合会議	136
第24話	柱合会議2	144

## 第01話 始まり

ピツ…ピツ…

病室の中で今日も心電図の音が一定のリズムを刻む。

目に移る天井は無機質な程白い。これが自分の一日に見る景色の全てだというのだから相変わらさずため息しかでない。

目を横にやれば机に花瓶が一つ。名前は知らないが鮮やかな色をした花が数本生けてある。

唯一この部屋で自然を感じる事ができるそれは母が自分の為に日頃から置いてあるものだ。意識を失って一人で目が覚めてもこれを通し、確かな親の存在、暖かみを感じた。

思えばいつからだろう。歩くのを特別な事だと感じたのは、普通の人の生活がいかに幸せで恵まれた物だと気付いたのは。

力をいっぱいに入れて右腕を動かす。

微かに持ち上がり見えたのは枯れ木のように細く、色白で管の着いた腕だった。

物心着いた時に覚えてた違和感は年々強くなり、小学校に入学する頃には確信に変わっていた。

衰える身体、衰弱する肉体、病名も原因も分からない。医者は頭を悩ませ、両親は私を抱き、泣いた。

私は幼いながらも一つの状況を突き付けられた。

「自分はもう助からない、後数年の命なのだ」と

己の身体だ。言われれば「やっぱり」と思う自分もいる。

しかし、それでも納得する訳にはいかなかった。両親より先に死ぬ以上の親不孝は無いし、まだやりたい事だつて山程ある。山にも海にも全然行けてない。美味しい物だつてまだ食べ足りない。友達と遊べてもいない。好きな人だつて出会っていない。それに…

まだ自分の生きる意味すら見つけていない

だから一分一秒でも長く生き、助かる道を探す。

その為に多くの時間、労力、感情を費やした。効くか分からない苦

く辛い薬だつて飲んだし、リハビリだつて沢山した。怪しい民間療法も試したし、宗教紛いの事だつて触れた。

親に多くの苦労を金をかけさせてしまった。

謝つても両親は精一杯の笑顔をつくり自分に心配をかけまいとする。心が痛いばかりでお礼を返す手段が無いのがむず痒い。

だが結果は変わることは無かった。

寝たきりになってどれくらい月日が流れただろうか。

最近は意識がある時間の方が少なく、夢を視ているような穏やかで臃気な感覚が多い。諦める積もりは毛頭無いがそんな強い感情すら霧掛かり、薄い意識の向こうへと消えていってしまう。

そんなとき顔に優しい風を感じて私は目を覚ます。

だから初めその姿を見たときは夢だと思つた。臃気な意識が生んだ仮初の現実、真相心理の可視化。

この世の者と思えない銀髪の美しい女性、白い布を衣服とし露出少なく覆っている。

僅かに見える素肌、すらりと伸びる手足は絹のようにきめ細かく、傷一つ見当たらない。瞳の色は金色たおやかに、しかし確実に意思のある瞳でこちらを伺っている。

そして最も特徴的なのは彼女の背中に生える二対の羽、頭部で輝く光の輪。

天使だ。女性の天使がベッドの脇で身を屈めこちらを見つめている。

「ッ……」

口を開き話そうとするが空気が僅かに漏れただけに留まる。彼女の綺麗さに見惚れ、自らがもう話す事が出来ない事実を一瞬忘れてしまっていた。

迎えが来てしまったのだろうか。彼女は見た目通りの天使で先が短い自分を迎えに来たのだろうか。

だとするならもう少し待ってもらいたい。

後数ヶ月で妹が産まれる、顔を見るまで死にたくない。

せめてこんな誰もいない場所では無く、両親の胸の中で逝きたい。

だかしかし：

やはり自分は何も成す事も出来ず中途半端な所で死ぬのか…。

頬に涙が伝う。何とかして彼女に死を先伸ばしにして貰わなくてはならない。否定の意思を伝えなければ、口が開かなければ身振り手振りで駄目なら視線でも念でも送らないと。

そんな事を思っていたら彼女が手で制す仕草を行い、私の涙を拭いた。その只の動作一つ一つが精練されていて美しく、それまでの焦りも忘れ、魅入ってしまう。

「残念ながら時間の変更は出来ません。このままだと後一時間二十八分三十七秒後 貴方は眠るように息を引き取ります。医者は気付き連絡しますが両親は間に合いません。」

丁寧に聞き取り易い声で優しく感情を込めて話すそれは死の宣告意外の何物でも無かった。神に通ずるのか結末も既に決まっているらしい。しかし何故今私の所に来たのだろうか？心の整理を着ける為？他の者の前にもこうして現れるのだろうか？

「疑問は最もです。本来は死に近い者の前にもこうして私が現れる事はありません。私が現れた理由は貴方に一つの選択をしてもらう。その為に現れたのです」

選択…？？そう考える自分に相槌を打つ彼女。此方の思考は読めるらしい。言葉は必要なさそうだ。しかし、選択とは何だろうまさか天国、地獄という訳でもあるまい。

「天国、地獄はありません。それらの概念は人間が生み出したものに過ぎません。肉体が滅んだ後の魂は有るべき所に行き、浄化され、また一から赤子として始まります。この世界においてはそう決められています。そういう意味なら人間の考えた輪廻転生、これは合つてると言えますね。」

「他の天使が過去に人に洩らしたのでしょうか？」と顎に手をあて考え込む彼女。そんな仕草がやけに人らしい。

「すいません、話が反れました。手短にいきます。貴方は平行世界と言う物をご存知ですか？」

平行世界。物語等でよくある此処とは違う世界。

でもある意味近く、そこではその世界でこの世界の人が違う環境で過ごしているってやつだったろうか？

「大体は同じですね。説明が省けて助かります。そうですね、この世界の様に生きる人達はこの時間、この次元のみだけではありません。数えるのも観測するのも不可能な程、幾億那由多の世界が広がりその世界にそれぞれ専属の神、天使が存在するとされています。」

規模が大きくて現実感が無い。神は八百万所では無いということだろうか。言葉一つに抑揚があり、身振り手振りで話す彼女は今まで考えていた天使像とは大きく違っていた。姿形は人外のそれだが中は身は人と変わらないように見える。

「その世界一つ一つが平行世界であり、どの世界でも同じにあたる人が必ず存在します。これは神の起源、世界がどれも元は同じだったという意見や世界の巡りは違いこそすれ同じ結論に向かって進んでいくからというものがあります。」

例えば貴方で言うところの世界にも貴方にあたる者が存在します。姿形、遺伝子、性別、思想、全てが同じではありませんが非常に似通った者になります。」

自分も八百万いるってことだろうか？

違う世界の自分は元気でやってるかも知れない。暖かい家族に囲まれ緩やかに過ごす、そんな自分を思うととても羨ましく感じた。

「私達は全ての世界を観測できる訳ではない無く、条件はこの世界に似通ったものに限ります。勿論私達天使や神はこの世界のみであり、他の世界には他の神や天使がいます。挨拶等の干渉が出来るのは殆ど似通った極一部の世界に限られます。近い世界の神は互いに世界のあり方を見比べ異常が無いかを確かめるのが通例となります。」

神が行ってる事は意外と人に近い気がした。同じ会社の系列で異常がないかを確かめ、天使を使い調整を行う。こんな感じだろうか？

「ある時その異常に気が付きました。この世界と非常に似通う世界の一つ、その世界が僅か数百年で干渉が出来なくなる程の変化を起こしていたのです。それまでいたその世界の神と天使は存在が不明となり、世界は成されるがままとなっています。調べた所、人の生死のや

り取りが異常な程増加している事のみが確認出来ました。」

天使は真剣な面持ちに変わり「これから私が来た本題です」と静かに言った。

「世界の変化は悪い事ではありませんがこれは些か異常です。崩れ綻んだ世界はそれだけで周囲と世界に悪影響を与える。場合によっては世界そのものを消し去らねばならない。故に私達は強硬策に出る事にしました。即ちその世界に対しての直接干渉による修正です。本来はその世界の神が行う事ですが今回は最も世界が近い私達が行う事になりました。」

恐らくこれからが自身に関わる本題。原因不明の病気で寝たきりになった自分に天使が現れた本当の意味。しかし、既に話は文字通り別世界で自分に関わる所は無いと感じる。

彼女は自分の手に手を重ね、顔を陰らす。まるでこれから話す事を躊躇うように、申し訳無いと感じているように、そんな表情を浮かべ、そして決意したかの様に話を続けた。

「干渉は私達天使が手を出せない領域まで来ています。出来る事はこの世界の者の魂に力を乗せ、向こうの世界においての異世界同一体である体に憑依させての二次的干渉にしかありません。その者で修正可能ならば修復し、無理でも死後魂はこちらに帰る。向こうの世界の状態を聞き、手の施し様がなければ数多の神と協力し、その世界を消し去る…これが一連の手筈となっています。そしてその役目を担ったのが」

貴方です。と天使は言った。

「向こうの世界の貴方は今危機的状況に陥っていて此方の干渉がなければじき死ぬ事になります。精神世界に置いて話は試みましたが酷く心を閉ざし会話になりません。私達はそれを諦めと断定し、此方の魂の上書きに問題無いと判断致しました。他の候補者は修正可能な段階まで存在を確認できませんので貴方の判断を持って結論とします。」

頭が痺れる。彼女は天使は何を言っているのか…

「貴方を選択して貰うのは一つ、この世界での生存を諦め新たな世界

で新たな肉体に魂を宿し生きるか、この世界で残り数時間の命を全うするか、です。」

それは判断するには余りにも大きく、決断するには余りにも残酷な選択だった。



冗談はやめろ！

二度三度反芻し、出た意思は強い否定だった。

別の世界で自分だった者の身体を乗っ取って生きる？

その者の感情は、精神は何処へ行く？それにその世界の本当の両親は？知人は？成り換わって生きろというのか？

そんなもの耐えきれぬ訳が無い。その世界の両親はその自分を愛している。それが例え命に関わっていたとしてもその後に残るのは自分という異分子ではない。

自分にしてもそうだ。例え命が僅かでもここに辿り着くまでの思い、決意があった。それを生きれるからといってこの世界の自分の身体を見捨て、誰かの身体で生きる？そんな選択を迫る事自体が自分を育てあげてくれた両親に対して、今までこの病と闘ってきた自分に対しての冒涇でしかない。例え世界の命運が左右されようが選べない選択だ。

憤慨する自分に対して彼女は俯く。曰く精神の上塗りは実例が無くどうなるか分からないとのこと。双方の記憶を持つ可能性も自分の記憶のみの場合もあると。

「すいません、貴方の言う通りです。世界が消える等という話自体、貴方に迫る事でも、ましては選ばせる等してはならなかった。」

しかし、と続くその顔には深い悲しみが現れていた。

「それでも貴方に頼らざるを得なかった。私はこの世界に生きる全ての者の心に耳を傾け、途方もない時の流れを過ごして来ました。人が生まれ、成長し、育み、死ぬ。そしていつしかその連綿と続く命の流

れが美しい、愛しいと私は感じていました。母が子を愛する様に私もまた人類全ての者を愛しています。」

その金の瞳からは涙が零れ、慟哭が響く

「あの世界から溢れる感情は、恐怖、怒りで満ちています。干渉が薄くなった今でさえそれは強く私に響いている。私は何としてでもあの世界を救いたい。この問いが選択では無くもはや私の一方的なお願いであることは分かっています。しかし、それを重々承知の上もう一度考えて下さい。」

暫しの沈黙の後、私は冷えてきた頭で当初抱えていた疑問を問うことにする。

第一向こうの自分に起きている危機的状況って？死ぬってどうして？そもそもそんな状況で生きる事を諦めている段階で普通じゃない。一体何が。

「その世界の貴方の両親は僅か前…亡くなりました。母は子を身籠っており、時代柄もあり実質彼の親族は全て居なくなりました。」

言い辛そうにそれと…と続ける

「亡くなる前に両親に感じたものは激しい恐怖、絶望、痛みです。理由は分かりませんが確実に向こうの世界の異変と関わっている事は確かです。」

言葉を失くす。向こうの母も妊娠していたという事実。

そしてそれが何らかの理由で失われたという怒り。その世界の自分の心境を考えるだけでも心が痛い。だがしかし、それが自分に代わった所で何か出来るとは思えない。

「貴方が世界を渡る際、此方から祝福を授けようと考えています。向こうのへ干渉は出来ませんが現段階の貴方へなら渡せる。世界の理を歪める程ではありませんが並大抵の事は耐え凌げると考えています。具体的には全体的な身体の強化、精神面の向上、第六感等です。」なるほど。どの程度かは不明だがそれなら困ることは無さそうに感じる。

思えば幼い時から私は何かを成し遂げたいと強く考えてきた、今にして思えばそれは何でも良かったかも知れない。迷子の子を助ける

とかお年寄りの荷物を代わりに持つとかそんな些細なこと。弱く非力な身体だがきつと出来る事があると。高い薬を消費し、両親に助けられ、金銭、心身に負担を掛け続けるのは嫌だとずつと思っていた。だがそれすらもこの現実には許してくれなかった。

そして今にして舞い降りた機会は聞いてみれば世界の命運を分けるものときた。本当に最後の最後命の灯火が切れる間際に…。

両親は自分が死んでも大丈夫だろうか？両親には妹と新しく家族三人で幸せに暮らして貰いたい、過去の事など忘れて。

向こうの世界の両親にはそんな機会すら奪われた。向こうの世界の自分の気持ちも少しは分かった気がした。きつと己の力不足を呪ったに違いない。どうしようもない現実に打ちのめされ、前が見えなくなる程に。

向こうの世界の自分も、それを思う両親もきつと助けを求めている。それが自分が横入りする形であったとしてもそれは変わらないだろう。

既に気持ちは固まっていた。この世界の自分にできる事と言えば両親に気持ちの整理を着けて貰うことだけだ。

(条件を飲む代わりに条件が二つ。一つ目は自分が向こうの世界へ行っても両親が来るまで肉体を永らえさせて欲しい。二つ目は自分が亡き後も家族三人幸せに暮らして欲しい。)

以上の二つ。神と近い貴方なら可能なはずだ。

「わかりました。…本当にありがとうございます。」

涙を一筋流し、謝る天使。

今考えれば初めからこの選択を選ばせてる事に葛藤したいと感じる。その仕草も涙も心からの者だろう。本当に人が好きなんだと改めて感じた。

此方もすまない…。一時は憤慨してしまった。貴方も天使という立场上仕方なかったのでしょうか。

いえ、とその後続ける彼女。自分の頭に優しく触れた。

「私は貴方をずつと見ていましたよ。厳しい状況の中、希望を信じ、ひた向きに前に進み続ける姿はとても眩しく、美しいものでした。力不

足にも助ける事は出来ず、こんな形でしか会う事は出来ませんでした。私は常に貴方の側に居た。今にして思います。この出会いは偶然では無い、必然であると。両親には神の啓示を持つてお伝えします。きつと間に合うでしょう。その後についても大丈夫。今回の事で先程神から一部干渉を許されたので今後病や事故、金銭面についても悩む事はありません。」

出来る事は全てやった。次の世界で彼の思いを受け継ぎ精一杯生伸びる。力とやらを駆使し、多くの人々を救う手助けをする。

それから十数分気持ちの整理をし、その時を決めるのを天使はずっと待つてくれた。

「それではこれから貴方を向こうの世界へ送ります。痛みはありません。僅かに浮遊感を感じるかもしれませんが一瞬で収まるでしょう。彼方の世界へ行ったら速やかに行動に移して下さい。与えた力を使えば窮地を脱出出来る筈です。」

思えば十四年という月日はあっという間だった。大半は病室での生活だったがまだ動けた時両親と遊んだ思い出は今でも鮮やかに胸に残っている。

(父さん、母さん自分は本当に幸せでした。どうかお元気で)

気がつけば頬を涙が伝っていた。涙は長い闘病で枯れ果てたと感じていたが…。

「それではどうか気をつけて、神の御加護があらんことを」

そう言い、自分の額に口づけをする彼女。顔が真っ赤になるのを感じる。

フツ…

全身に風を感じたそれは直ぐに浮遊感へと代わった。

これがこの世界での最後となる。瞬間目を横に向ける。そこにあるのは唯一母を感じる見舞いの花。

あの花の名前は何だろうか。母に聞きそびれたな。

そんな思考を最後に自分の意識は暗転したのだった。

## 第02話 精神世界

少女は己の無力を呪う。

何事もない平和な日常は一匹の鬼により崩れ去った。

父は抵抗するもその歯牙によって五体を引き裂かれ、腹の子だけはと懇願する母の叫びも鬼にとっては絶好の余興でしか無かった。

目の前で父が、母が食べられていく。

村の外れに立つこの家の周辺に人気は無く、助けは期待出来ない。いや、来た所で目の前の化物をどうにできるとも思えなかった。

人並みを大きく超えた背丈。浅黒く、肌とも思えないそれは岩、もしくは鉄を連想させ、筋肉はその動きに合わせ脈動し、隆起している。血に染まった爪や牙は鋭く、獣より殺傷に特化しているのだろう。血走った目には最早理性の欠片すら伺えない。

助けないと、逃げないと。

そんな事が頭を過るが身体が動かない。少女は自分が鬼の恐怖に屈してしまっている事を身体で理解した。

こうしている間にも両親だったものはバキボキと聞くに耐えない異音を立てながら鬼に喰われていく。

これが鬼。人を喰らう怪物。

人間はなんて無力なのだろう。鬼を前に人は脆く、精神を犯され、穏やかな生活さえ許してくれない。

そして私はなんて愚かなのだろうか。

助ける事もできず私はそれを見ながら両親の骨が固く、少しでも時間が延び、自分が食べられるのが遅れればと考えてしまった。

自分の考えの恐ろしさ、醜さに吐き気が出る。

最早先は無い。今の自分に出来る事はもう何も無い。

諦めが、後悔が全身を支配する。脱力感が全身を襲い、視界を黒く染め上げた。

(お父さん、お母さん…。ごめんさい。)

少女が最後に見たものは両親を食べ尽くし、此方に手を伸ばす鬼の

姿だった。

◇

此処は何処だろう？

水面にも似た地面を歩いて暫く経つ。

地平線の彼方まで続くそれは広大な世界を思わせた。

空は雲がかかり太陽の光は僅かしか零れていない。何処かどんよりと思わせる世界で妙に息だけが苦しく感じた。

異世界に飛ばされたと思っただけだけど此処は何処か違う。

現実感が薄い世界を見渡し、自分はそう結論する。少し歩けば何か分かるだろうか？

足を止め全体を良く観察する。とある方向がやけに暗く、心に響いてくる気がした。その方向に暫く歩くと見えてきたのは着物を着た少女の姿。顔は確認出来ない。膝を丸め、俯いている。

「ッ……」

肩に手を掛けた瞬間。思わず飛び退く。接触した瞬間、電流にも似た衝撃が流れ膨大な記憶が頭を過ったからだ。

「ふざけんじゃねえ!!!」

何だ、何なんだあれは!!自分の愚かに嫌気が差す。彼女を通して流れたものは自分の想像を優に越えてくるものであった。鬼：鬼だど！それにあの見た目、あの凶行ッ……!

彼女を通して見たものは耐え難い地獄だった。両親の姿は此方の世界とは違っていたがそれでもあの光景は一個人として許す訳にはいかなかった。

「あの世界から溢れる感情は、恐怖、怒りで満ちています。」

天使の言葉が頭を過る。まさかこれが原因なのか、こんな地獄がこの世界の至る所で行われているというのか。

自分の出来る範囲を大きく超えている。祝福とやらがどの程度かは分からないがああ鬼を何とか出来る程なのか？だがこれで何も出来ず終わる事になればもう一人の自分もこの世界も終わる事になる。

ツ：そうだ！もう一人の自分は？

この世界での自分が女性である事には驚いたが後回しだ。恐らく此処は精神の世界。現実の流れはどの程度か分からないが危機的状況なのは事実。何とかしなければ！

身体を大きく揺らすと彼女は力無く崩れ、うつ伏せとなった。力を入れ、仰向けにして起こす。瞼は閉じぐったりとしていた。

「…おい！起きろお前!!」

叫ぶと薄ら瞼を開けこちらを見る彼女。頬に涙の後が残っている。

ここに来て改めて彼女が自分の異世界同位体なのだと理解した。性別こそ違いが顔の細かい部位が、雰囲気は良く似ている。

「貴方は…別の世界の私…?」

歯切れの悪い口調で話す彼女。元気は無く、瞳はまだ虚ろだ。だが自分が彼女を感じた様に彼女もまた自分を感じたのだろう。

「そうだ！今すぐ起きて逃げろ。鬼はまだ目の前にいる!」

祝福のお陰で身体能力は上がってるはず。まだ逃げ切れるかも知れない。彼女の知識では鬼は日の光に弱いらしいがまだ夜中だ。闇の中で逃走になるが地形に詳しい彼女なら逃げ切れる可能性がある。

しかし、彼女は現実を思い出した瞬間。小さく悲鳴を上げ顔を俯かせる。

「私…怖くて何も出来なかった。目の前で両親が喰われていくのを見ている事しか出来なかった。それなのに私あんなことを…」

悲痛に歪ませる彼女を見てたじろぐ。確かにあの場にいたのが自分だったら立場は逆だったかも知れない。しかし、ここで引く訳にはいかない。引いたら彼女は確実に死ぬ。この世界の人達もどうなるかは分からない。それに私は天使の思いを受け継いでるそれに…

「お前は両親の思いを無視するのか！あの時ごと切れる瞬間まで叫んだ親の姿を思い出せ!!」

そうだ。彼女の両親は命尽きるその時まで彼女の無事を願っていた。だから自分達の身体を犠牲にしても時間を稼ごと足掻き続けた。全ては娘の命の為に…。

はつとした彼女の肩を掴み上げ目線を合わせる。怯えていた目は親を思い出したのか幾らかマシになっていた。

「…でもどうしたら。既に鬼は目の前に。逃げ切れる保証もない。」  
「諦めるな！その為に自分が来た。一人で無理でも二人なら出来る。力を貸してくれ！」

やり方は本能で理解した。向かい合い、掌を合わす。こんな時だが彼女の手は小さく改めて女の子なんだなと思った。

二つの記憶が重なる際、天使はどうなるか分からないと言ったが今なら分かる。これはきつと二人の意思によつて決まるのでは無いだろうか。合い争えば必然と精神の奪い合いになる。恐らく自我が強い者は敗者の意識、記憶といった物も奪い合い一つになるのだろう。だが自分達は共存を望んでいる。知識、記憶、魂が混ざり合い一つになつていくのを感じる。

「お父さん、お母さんごめんなさい。私もう一度頑張ってみる。お願いもう一人の私。力を貸して！」

「任せろ!!二人で生き残るんだ！」

一人よりも二人の方が強い。これは事実だ。なら精神なら？魂ならどうだろう？

答えは聞くまでもない。

空が晴れ、広大な青空が現れる。どんよりとしていた空気は清浄なものとなり。足元の水面は綺麗に空を反射させる。

空が晴れ後二人が立っていた場所には一人の少女がいた。そしてその瞳には広大な空と共に決意の色を強く宿していた。

## 第03話 闘い

その日その鬼は大層機嫌が良かった。いや、むしろ絶好調と言つても良いかも知れない。

偶々訪れた場所には人氣が無い所に一軒家ときて、苦もなく獲物にありつく事が出来たのだ。男と女は矢鱈と抵抗したがそれも鬼からすれば興が乗るといふもので少しずつ味わいながら食べる事が出来た。しかし、本当の楽しみはこれからだ。

家屋の隅で力無く蹲る娘。下級であるこの鬼でも嗅覚を擦る程の芳しい匂い。彼女は稀血と呼ばれる人の中でも希少な血を持つ人間だったのだ。

稀血を喰えばその力は人間五十、百を喰った数に匹敵する。下級の鬼でも稀血を喰えば飛躍的な能力の向上が期待出来る。鬼の機嫌も良くなるのも当然であつた。しかもその娘は無抵抗ときている。

鬼は男と女を食い漁りながら娘をどう食べるかを考え恍惚な表情を浮かべる。少しずつ千切つて生きながら食べるか、いつそ頭から一気にいくか。それは考えるだけで鬼の心を踊らせた。

そんな事を考えながらも数分で男と女を食べ尽くし、浮き足立ちながら娘へと足を運ぶ、目の前に来ても娘は反応が無かつたが身体の一部でも嚙れば心地良い悲鳴を聞かせてくれるはず、鬼は顔に喜色の色を浮かべながらぐつぐつと喉を鳴らせ獲物へと手を伸ばした。

どの人間も全ての抵抗は無意味。鬼にとって何ら脅威では無い。そう思っていた。この瞬間までは。

ドンツ！という音と共に膝が地につけられた。

伸ばした筈の右手が砕け、骨の一部が地面にめり込んでいる。

遅れて激痛が走り、それは鬼の顔を悲痛に歪めさせた。

(ガッ…!?!。一体何が?)

正面で拳を振り下ろしている娘を見て全ての原因はこの人間にあ

ると分かり鬼は怒気を露にする。

「お前がやったのがああああ」

八つ裂きにしてやると只の人間が己に傷を負わせた異常性も考えず娘の腹を引き裂こうと本能のまま鬼は残った左手を娘へと伸ばす。しかし既にその行動は遅かった。

娘は目線より下がった鬼の頭部を全力で蹴り上げる。それは鬼の頬の皮膚を引き裂くに留まらず、凄まじい脚力により首の髄の骨を碎き、首の肉を千切り取り足を振り切り切るに至った。

つまり鬼の頭部を蹴り跳ばしたのである。

鬼の頭は家屋の壁に二、三回打ち付けられ、角を欠けさせながら玄関付近の土間に転がるに至った。

鬼は特定条件でしか死なない。例えそれが首だけになろうとも条件を満たさなければ時間稼ぎにしなければならない。

だが確実に痛みはある。鬼は痛みで喚きながらも目線で娘を探し、怨嗟の言葉を喚き散らす。殺す、絶対に殺すと叫びながらも身体を首へと近付け身体の修復を図ろうとする。

この人間を超えた絶対的な再生力が人間が鬼に勝てないと言われる所以であった。しかし、それが今回は仇となる。

鬼がまた娘を見つけた時は既に草鞋を履き逃走する間際であった。喚き散らす鬼を見下ろし、何とも言えない顔をした後、今度は全力で足を振りかぶる。

「ぐぎがああああ!!!」

全力の蹴りでまた家屋の中を打ち付けられる鬼。

十分後ようやく身体に顔が着いた時には顔が原型無いほど歪んでしまっていた。再生はしたが顔は何時までも鈍い痛みを放っている。

「ごろぞ、ごろぞでやるう」

稀血の匂いは強く残る。あれだけの香りだ。間違える訳が無い。

鬼のは稀血を今度こそ己の物にする為、匂いがする森の中へと突き進んでいった。



(全く信じられない…鬼の頭を蹴飛ばすなんて。)

驚く彼女の言葉を頭の片隅に置き、彼女の誘導の元、森の中を走り抜ける。夜は深く森の中は闇に包まれているがそれでもこの目は昼間の様に見通し、走る事が出来た。先程は無我夢中であったがこうして走っている時でさえ、自分の身体が特異なものであるように感じる。

山道を苦もなく走る脚力、何時までも限界が来ない心肺機能。それは前の生活で得たくても得られなかったものだ。僅かに心が動くが今は命が掛かっている。落ち着き慎重にいこう。

しかし先程の鬼はあのままでも良かったのだろうか？首だけの状態であるのならば釜で煮るなり、擦り潰すなり、川に流すなりすれば良かったのではなからうか。

(う…。あんた物騒な事を考えるね。それも有効かも知れないけど絶対じゃない。下半身も無事だったし、鬼の中では人の常識を超えた術を使う個体も居るって聞いたことがある。逃走で正解の筈よ)

なるほど。ならば今のようにあのまま放り、こうして日が出るまで森の中を逃げ回るのは得策と言える。

(でも私普通の人間よ。鬼を蹴りとばす力なんて持ち合わせていない。貴方一体何をしたの？それにこの速さ…)

先程の光景が頭を過る。今でもあの鬼の顔を思い出すだけでも身体がすくむ。初めの一撃は命が掛かっているかもあって無我夢中だった。それがあの威力。蹴り跳ばした時だって全力では無かった。どうやらあの天使は予想以上の力をくれたらしい。

(天使。貴方の記憶の中で見た…。やっぱり本当だったのね。じゃあ、向こうの世界の出来事も?)

ああ、そうだ。自分は向こうの世界で死んで。今こうして此処にいる。

彼女の動揺を感じる。精神が二つだと互いの内面も通じ合うものがあるらしい。しばらくして彼女は答えた。

（ありがたい。貴方が此処に居なければ私は殺されていた。両親が死んでも守ろうとしたものを私自ら手放す所だった。最後まで戦うべきだった。気付かせてくれてこうして機会をくれた貴方には感謝してるわ。）

御礼は二人助かるまで無しだ。分岐だ、次の道は？

（突き当たりを右。道なりを真っ直ぐ！村までは遠いけどこの方向なら日が早くに出るよ。）

了解。じゃあこのまま…ッ!?

瞬間右の茂みから何かを感じ。全力で飛び退く、一瞬前まで自分が居た所に鋭い爪が走り過ぎていった。

第六感。これがなければ先程で確実に死んでいた。身体機能が高くてもあれを喰らって無事では済まさせまい。

（鬼…でもなんでこんな…。早すぎる）

どうやら鬼の強さを見誤っていたようだ。速さでは負けている、先程は油断もあり先手を取れたが力でもこちらが有利かは分からない。

闘うしかない。速さで負ける以上逃げるのは得策じゃない。もう一度首を跳ばし、日の出まで時間を稼ぐ。

（うん。それしかない…）

けどお前は見なくても良い。裏で隠れてろ。親の仇だが、見るのは辛いだろ。

息を飲むのを感じる。彼女はずっと恐怖と闘ってきた。命すら諦めてたのを思えば良くやったと言える。自分だけを主にして彼女は休むべきだ。

しかし、帰ってくるのは否定の意味だった。

（勿論怖い…怖いよ。震えて動けなく成る程、こうしているのだから貴方に助けて貰っているから。でもそれじゃ今後も鬼に怯えて生きる事になる。それじゃ命を賭して守ってくれた両親に胸を張って生きていけない。お願い最後まで見届けさせて。）

強い決意。なら否定はしない。この話は終わりだ、これからは命が

掛かっている一瞬の油断も許されない。

二人でなんとしても生き残るぞ!!

自分の言葉に強い意思を持って返す彼女。もう、鬼の恐怖に怯える事は無いだろう。

一心同体。自分の失敗は彼女の死でもある。何もしてでも勝たなければならぬ。

「人間がどれ程足掻けるかその身体で理解しろ! 糞野郎!!」

鬼に向かって雄叫びを上げながら前進する。

これから真正銘人間と鬼にとの一騎討ちであった。

◇

何だ。何なんだこれは!?

鬼は顔には色濃く動揺が現れる。

鬼にとつては今日は最高の日であった筈だった。片手間に人間を三人貪る事ができ、一人は幸運にも稀血だ。力も増し、更に楽に人間を喰うことが出来る。もしかしたらあの方にも気に入られ。十二鬼月の仲間入りさえ夢では無かった。

それが蓋を開ければ、ただの娘に手傷を負わさせ、首を飛ばされる始末。

森に逃げたと思えばその速度が尋常では無い。必死の思いで何とか追い付き不意打ちを与えようとしても妙な感の良さで避けられる。だがまだ此処までは良かった。

追い付いたのなら話は簡単、人間は鬼には勝てない。鬼殺隊ならまだしも素手の、ましては人間の小娘に等負ける道理が無い。先程は油断したが今度はそうはいかない。そう鬼は意気込んでいた。

だがどうだろう結果を見ればそれは呆気ないものだった。

腕力、速さ共に勝る筈が鬼の爪は娘の身体に当たりこそすれども妙な固さ、その瞬発性に致命傷を与えない、攻撃は表面の肉を切り裂くのみであった。娘の視線を読み、隙に攻撃をしても何かに反応して

るのか空振る始末。娘の攻撃は確かに人間の繰り出すものにしては脅威だが、あくまでも鬼の再生力の前では無意味だ。

しかし、生意気にも手段はあの手この手と変わっていき、砂による目潰し、急所への攻撃、投石、投木と無視出来ない物になっていく。それに初めのこそ足を震わせていた娘が次第に慣れ、動きに無駄が無くなっていく。

(何故だ!?何故恐れん…!鬼が怖くないのか!?)

これが本当に人間なのか?吹けば飛び、裂けば息絶える筈のそれが何故ワシと対等に闘える?

許さん。人は鬼を恐れなくてはならない。人間は…

「人間は鬼に喰われるべきなんだああああ!!」

激昂した鬼が最後に見たのは己に倒れ掛かる大木の姿。

鬼は動く事も怨嗟の声も上げる事が出来ず、日が昇り消滅するまでの間、その大木の下敷きとなったのであった。



日の光がやけに眩しい。カーテンは開けっ放しなのだろうか…。

嗅ぎ慣れた薬品の臭いが鼻につく。暖かな布団は朝の低下した気温と対象的で何とも心地よい。

今は何時だろう、と思考を巡らせた瞬間。この世界に來た記憶が頭を過る。

「…此処は!?鬼は何処へ!」

確か自分は鬼と闘っていた筈だ。闘いは熾烈を極め、何度も第六感や彼女の忠告で奴の攻撃を避ける事が出来た。こうして生きているのは奇跡以外の何物でも無い。たが此処は何処だろう?…まさか夢じゃないはず。おい!…おい!!

(…んむう。何い?お母さんもう朝?)

良かった現実だ。って寝惚けてる場合じゃない。起きろ!

瞬間彼女の意識が覚醒する。穏やかだったそれは不安になりやが

て悲しみへと変化した。

昨晚の事は現実であり。彼女の両親が亡くなった事は変わる事は無い。本当は向き合う為の時間が必要だ。だがそれはまだ現状が落ち着いてからだ。この世界に対しては自分は疎い。彼女の補助が必要不可欠である。申し訳ないがそれまで彼女には我慢してもらえない。

此処は何処だか分かるか？

（此処は病院かな？…ごめん、私は村しか知らなくてこんな設備がある所は知らない。きつと大きな街の病院とかかな？）

彼女も分からないか。

しかし、これからはどうすれば。実質身寄りも無い身だし、ここで素直に話すべきか…。でもこの世界にとつて鬼がどういったものかも分からない。安易に口にしない方が良いのか…？

何にしても慎重に事を進めなくてはそれに今後の事もあるし。

思想に耽っていて自分は隣に座るその姿を見失っていた。

「心配しなくても鬼は退治されました。此処は蝶屋敷。鬼殺隊の治療所です。どうか落ち着いて下さい。」

声に反応し、身を起こすと全身に激痛が走り、気を失いかける。

そんな自分にこの病院の関係であろう彼女は優しく制止し、痛み止めの液体を自分の口に運んだ。病院でもこういう事はあったが年頃なのでこう若い女性にして貰うと照れてしまう。

「言いたい事、聞きたい事もあると思いますがまずは療養に専念して下さい。全身の裂傷は命に関わる程では無いですが中には深い物もあります。完治まで数ヶ月、一週間は絶対安静にして下さいね。」  
自らを胡蝶カナエという彼女はどうかやらのこの病院の主らしい。

十代半ば程に見えるがこんな立派な所を切り盛りしてるとは凄い人だ。それともこの世界の人はそうなのであるか？それに先程の殺隊鬼という言葉、違う世界故に分からない事もある。

彼女はふと、席を外したかと思うと微笑みながら一つの花瓶を持ってきて自分の近くの机に優しく置いた。偶然かそこには前の世界でよく母が置いてくれた花が咲いていた。

「これは何て花ですか？…前に風邪で寝込んだ時に母が生けてくれたんです。」

彼女は数秒考えた後、「優しいお母さんなんですね」微笑んだ。

「これはガーベラという花です。最近この国に流れた物で今とても人気なんです。ほら、綺麗でしょ？」

そう言い。花を指先でちよんちよんと触り匂いを嗅ぐ彼女。

「どの花にも花言葉と言うものがあって、贈った相手にその気持ちを込めて送るんです。直接言葉にするのも大事ですがこうした物に込めて送る事も大変素敵だと思います。色によつて違いますがそうですね、お見舞いの際のガーベラの花言葉は…。」

以前の記憶を思い出す。それは心配しながらもそれを顔に出さず、花生ける母の姿。

「希望、感謝、めげずに前進。つて所ですね。ツ：!?大事ですか何処か痛みますか？」

自分の涙に気付いたカナエさんが心配し、気遣うが自分は暫く彼女の胸の中で泣く事になってしまった。

今はもう会うことの出来ない母の優しさを改めて強く感じ、そしてそれに答える事の出来ない現実には自分の胸を酷く締め続けた。

## 第04話 決闘

私胡蝶しのぶは最近彼女の話題が尽きない事を疎ましく思っていた。

【八雲結】

療養の為、1ヶ月程前に姉に連れられて来た子である。

歳は私と同じ13らしい。髪は綺麗な黒髪で肩まで伸びている。

背丈は私より少し高いくらいで見た目は可愛らしく、廊下ですれ違った際はきちんとした挨拶を返すしつかりとした子に思えた。

此処では一般の人は療養しない。

来るとすれば鬼の被害にあった者だ。彼女も例に漏れずそのようなであろう、私と姉の様に。

事実それは正しく誰かが話していた会話を聞くに彼女の家族は鬼の被害に遭い、彼女はその若さで独り身となってしまったらしい。

話をしていた隊士に守秘義務について注意すると共に私達同様彼女の家族を襲った鬼達に対し憎悪を募らせた。

姉は「鬼とは仲良くできる」と言うけれどもやはり無理に思える。

鬼は人を喰らう、私も鬼の中にはきつと善良な者もいると信じ会話を試みた事もあったが結果は変わらなかった。理性を失い、本能のまま人を喰らう鬼共。話し合い等通用しないのだ。

だから当初は私達と同じような境遇の彼女には深く同情した。早く立ち直って欲しいと。

ここに来た子は幾つかの選択がある。成長し、独り立ちするまで面倒をみてもらう場合。鬼と闘える者達の力になりたいと、この胡蝶屋敷で看護師として働く場合だ。

前者は至極無難な選択で、後者は鬼に向かう強い意思を持つ者が就く場合が多かった。

最初彼女は後者を選ぶと思っていた。瞳からは強い意思を感じたし、要領も良いと思える。看護師として働くのに問題は無いだろう。しかし現実とは違った。あの強い意思は人の為に向けているもので

は無かったのだ。彼女は第三の選択を選んだ。

つまり、私と姉の様に鬼殺隊として鬼を殺す道である。

だがそれは大変険しく、辛い道のりでもある。事実鬼殺隊の最終選別は困難を極め、目指す者の半分以上が鬼殺隊として隊服に袖を通す事無く戦死する。鬼殺隊になってからも任務は熾烈で常に多くの者が殉職している。昨日まで元気だった者が後日死体で戻ってくる。そんな場面を私は散々見てきた。

同世代である彼女にはそんな道を選ぶ事無く、鬼とは無縁の生活を過ごして欲しいと感じた。普通に生きて、結婚し、家族で幸せに暮らす。そんな生活を、私達の分まで。

胡蝶屋敷の主である姉は柱だ。

彼女の選択については姉が判断する。即ち隊士として闘わせるか否かをだ。私は大いに反対した。自分達も選んだ道であるがこれは悲しい選択だ。鬼殺隊は常に鬼と対峙し、命の保証は無い。復讐であるは憎悪の炎は消える事無く永遠に失った家族を思い、鬼に対する怒りで心を焦がし続ける事になる。同じ境遇を増やさない為と刀を振るう者も居るが鬼の被害全てが無くなる訳ではない。救えない者を見るたび後悔と己の力不足に嘆く事になる。

全く：救えない。

一部の鬼殺隊は何処か病んでいる場合が多い。

そうでなければやっていけないのだろう。それは私達も同じ。鬼を狩るといふことはそういう事だ。だから私は彼女が鬼殺隊を目指す事に賛成出来なかった。

やんわりと反対し、違う道を進める姉の言葉を彼女は一切受け入れなかった。

一体何処からその覚悟は湧いてくるのだろうか。両親を殺され一月も経つ事無くその決断に至ることは私や姉でも不可能だった。

だから狂ってしまった事さえ考えた。両親を殺された直後で鬼に対する怒りで身体を蝕まれてしまったのかと。しかし、私達を見る瞳はいつもの優しくも強い意思を感じるもので変わりはない。彼女は

本心で言っている。

だから彼女にそんな発言をした私は何処か変だったのかもしいない。私達よりいち早く立ち直り崇高な意思を掲げる彼女を曲げなかったのか、その道はそんな安易に選んではならないと忠告し、現実を突き付けたいと思ったのか今では分からない事だ。

姉と彼女の間に割り込んだ私が提案したのは鬼殺の隊士としての素質を見るところという建前の木刀を用いての一对一の決闘であった。

## 第05話 前夜

決闘は後日行われることになった。

人の口に戸は建てられない。

決闘は瞬く間に胡蝶屋敷全体に広まり、一時慌ただしい空気になったが館の主である姉の一言でぴたりと治まった。

見物する事は勿論結果について詮索する事も禁止。不満をいう隊士は一人も居ない、此処の者はその辺りは弁えている。それに理解しているのだ、柱である姉の強さ、その偉大さを。若くして柱に昇り詰めたその力量は伊達じゃない。水の呼吸の流派である花の呼吸を極め、多くの鬼を討ってきた実績は他の柱にも負けておらず、こうして鬼の被害者、怪我人を受け持つ胡蝶敷を築いた功績は歴代の柱の中でも上位に位置するだろう。

私はそんな姉を誇りに思うと同時に心配でもあった。

姉は人一倍お人好しで心優しい。憎むべき鬼を哀れみ、殉職した隊士一人一人に対して涙を流す。人としては魅力的だが鬼殺隊としては致命的だ。

だから私はそんな姉を補助する為にも同様の力を付けなくてはならなかった。無理を言つて柱である姉の継子となり、私もまた花の呼吸を極める為修練に勤しんでいる。まだ鬼の頸を断つまでには至っていないがそれは練度が足りないから。

もつと鍛えなければ…。

姉は私の憧れであり目標だ。いつか肩を並べられるべく今宵も鍛練を行う。

そんな時姉から呼び出しが掛かった。

あの時姉は最後まで彼女と私の決闘に難色を示した。

珍しく意思を曲げない姉に私は思う所もあつたが機会を得たかつた彼女もこれに賛成した為、なし崩し的に決まった。姉は同じ境遇である彼女に同情して止めたかつたのだろうか、私が加減を知らず彼女を傷つけてしまうと思つたのだろうか。

確かに呼吸を使う者と一般人には天と地程の差がある。だが決闘で彼女に呼吸を使うつもりは毛頭無い、第一今まで刀を振るってきた経験が、覚悟がまず違う。ある程度打ち合えばどんなに刀の素人だろうと理解する。自分では勝てないと。だから私は彼女にある程度刀を振るわせ技量で分からせるつもりでいた。

自分は鬼と闘うべく決意したが力が無かったと。

鬼殺隊の世界は別格だと。

それを突き付ければ彼女は諦める。そしてそれは免罪符になる。彼女は自分を責める事も後悔する事も無く、地獄を見る事は無い。

「胡蝶しのぶ入ります。」

許可を得て姉の部屋に入室する。

どうやら書き物をしていたらしい姉は筆を止め私に座る様に促した。

薄暗い部屋の中を蠟燭の小さな灯りが照らしてる。部屋は蠟燭の炎に合わせゆらゆらとその形を変えていた。

「鬼殺隊胡蝶しのぶ。此度は貴方に話があり、この場に来て頂きました。」

普段は聞かない姉の自分に対しての口調に一瞬どきりとする。

姉 は私生活において私を呼ぶ時は名前で呼ぶ、それは決して今の様な冷淡な口調では無いし、正規の手続きも使わない。こうして改め、名の全てを呼ぶ時は特別な場合しかない。

つまり、花柱胡蝶カナエとして一鬼殺隊士である胡蝶しのぶへ話す場合だ。

返事をして頭を垂れる。こちらは一隊士として柱への畏敬を忘れる事はない。

やはり、昼間の事で問題があったのであろうか。そう考える私に柱である姉はゆっくりと語り出した。

「八雲結。彼女が一体どういう経緯で来たか知っていますか？」

内容は予想通り彼女に関してのもの。だが少し様子が変わる。顔を上げると蠟燭に照らされる姉の顔が視界に入る。その顔色には幾つもの感情が隠れている様な気がした。

「家族共々鬼に襲われ瀕死の所を花柱様の部隊が助けたと存じております。」

話は彼女の入院当初に隊士の間で広まっていた。この認識で間違いないはず。姉はその言葉を聞いた後数秒考え、歯切れ悪く話し始めた。

「これは私の部下のごく一部しか知らない事です。最早貴方も無関係では無い。伝えるべきだと判断しました。」

疑問が深まる。一介の柱である姉が箝口令を敷く程の問題を彼女は抱えているとも言うのだろうか。胸がざわりとする。

「貴方は勘違いをしている。実際には彼女の…八雲結の救出に私達は間に合わなかったのです。報告を受け私達はその家族の元に駆けつけた時には既に多くの時間が流れていました。」

良くある話だ。鬼殺隊になってからそんな気の滅入る話を散々と耳にしてきた。

「家には夥しい量の血痕のみが残されていてその血の乾き具合から誰もが生存は絶望的だと感じました。そんな時、隊士の一人が森から何者かが争う音を聞いたのです。日が差し始める中私達が見たものは闘いの痕が残る地で大木の下動く事もできず、日の光で消滅していく鬼と決して軽く無い傷を負い倒れている彼女の姿でした。」

一瞬姉が何を言ってるのか分からなかった。

「ツ…ありえない!!まさか呼吸を?いえ、他に鬼殺隊が居たとか。それにしても一体何故?」

姉に制され、自分が興奮していた事に気付く。だがそれも仕方が無い事だ。強靱な肉体を持つ男性ならいざ知らず、自分と同年齢…しかも何の闘いの心得も無い娘が鬼と対峙して生き残った等到底信じられる話では無い。それに…

「呼吸を使う者なら普段の呼吸にもその片鱗が見られます。この入院期間の間彼女にそれは確認出来なかった。掌も見ましたが刀を振るう者の手ではありませんでした。鬼が日の出前に行動する事はあり得ない、彼らはいつの時も夜の闇が深い丑三つ時での行動が主となる。それはつまり…」

「…その時間から夜明けまでの間、彼女は鬼と闘う手段も武器も無い中一人で渡り合い、勝利したとでも?」

姉は私に視線を合わせ、こくりと頷いた。

「それだけでは無いのです。彼女は入院当初一週間の絶対安静、完治まで数ヶ月の傷を負っていました。彼女が何日で動ける様になったか知っていますか?五日ですよ。一週間で傷は無くなりました。それはもう傷痕も無く綺麗な肌でしたよ。」

「まさか鬼では?という意見を引つ込める。あり得ない。彼女は日の元で普通に歩いている。」

だが彼女に関してあり得ない事が立て続けに起こっている。どうみても普通じゃない。

「こうして御館様へ報告の為、書をしたためているのですが如何せん事が事ですのでどうすれば良いか悩んでいるのです。」

姉の悩みは最もだろう。そう考えると昼間の姉の判断も納得がいった。計り兼ねていたのだ、彼女の力量、その得体知れなさを。

「貴方が嫌われ役を買って出て、彼女に引導を渡そうとしてくれた事には感謝しています。しかし、明日の決闘は何が起こるか分かりません。くれぐれも気を抜く事が無いように、場合によっては呼吸を使う事を柱として許可をします。逆に言えばこれは彼女の正体を知る良い機会。少しでも彼女を喰らい尽かせその全てを晒して欲しい。」

「分かりました…。気をつけます。」

それから少しの話を交え私は部屋を後にした。縁側を自室に向けて歩いてみると空に月が見える。それは下弦の月を越えて二十六夜へと近付いていた。月の面積は小さく夜は深い、それは凡そ一月前のあの日の同じだったのだろう。

話の内容は私の想像を大きく越えていた。八雲結、彼女は何者なのだろうか?

明日になれば分かる事。その秘密白日の元に晒してくれよう。私の力、技量を持ってして。

全ては明日、決闘の場にて明かされる…

握った拳は自分でも気付かない程固く。力強いものだった。

## 第06話 決着

蝶屋敷。此処に来てもうすぐ一月になる。

当初この世界に来てから直ぐの入院に心を重くしたが与えられた力の影響なのか数ヶ月と言われていた傷は瞬く間に治り一週間で日常生活を送る事が出来る様になった。

今は病室から離れ蝶屋敷の一室を貸りて生活させて頂いている。金銭面で心配したが鬼の被害者という事で鬼殺隊の予算から賄って貰えるらしい。鬼を刈る事で今まで助けた者、多くの地主からの協力の上現在の基盤があるとの事。

鬼殺隊。鍛えた技術を持って作られた鬼を滅ぼす刀「日輪刀」を振るい、生身で鬼と渡り合う者達。総勢数百名。

以前の世界で無かったそれは鬼と闘う為、この世界の人が結束した結果と言える。鬼の数は未知数でこの鬼の殲滅を鬼殺隊は目標とする。

自分を助けてくれたカナエさんも鬼殺隊でしかもその中でも柱という重要な役職を任命されているらしい。聞いた話、何でも鬼の被害者の為にその権力を使いこの屋敷を建てたとか。優しい、綺麗、人徳もある完璧超人だ。

だから事後処理として件の件を聴かれた時には本当に焦ったし嘘を吐くのは辛かった。「天使から力を貰って」とか「実は中の人は二人」何て事は口が裂けても言えなかった。言ったら確実にヤバい人だと思われる。

「鬼の動きが鈍くて何とか回避に専念してたら鬼の空振りが木を倒して自らその下敷きになった」なんて今考えても苦し過ぎる言い訳だ。

おまけに傷の治りが予想以上に早くてそれに関してもカナエさんの疑心を深める事になった。「昔からの体質で」と言っただけ絶対良く思われて無い。寧ろ疑われてる気すらする。

なので今現在命の恩人で尊敬している彼女に関わりたくもその境

遇故、距離を開かなくてはならないと言う状況になっていた。

身体の変化に関しては入院してから二週間程で大体自分達がどうなっているか確かめることが出来た。

まず精神に関しては二人、前の世界から来た男の自分と元からこの世界にいた彼女がこの身体に宿っている。記憶に関しては干渉した結果か互いの事を何となく理解してる状態。身体を動かす、話すと云った肉体の主導権はどちらでも握る事ができ二人で話し合いその都度決めていく。

感情とかの表面的なものは相方に伝わるらしいが詳しい意志疎通は頭の中の会話で行う必要がある。大体こんな感じ。生理的に必要な行動や風呂等は彼女が主体で行っているが意識的に男の自分が切れないと間接的に見る羽目になるので最早意味無い、少なからず自分も行っけてもう慣れてきた。彼女は「プライバシーが！わー!!」とか散々頭の中で喚いていたがここ最近は何となく乾いた笑いを浮かべ大人しくなっていた。

肉体に関してはまだまだ不明な点が多い。視力は高い。夜目が効く、傷の治りは早く、力は強い。分かると言えばこれくらいで力に関しても人目に着くのであからさまな事は出来ないでいる、日常生活で箸とかは普通に持てるので加減の程度は問題無さそうではある。

後考えるべき事は今後の事だろうか。

二週間経った日、外出を許された自分達は彼女の家へと足を運んだ。家の中は事後処理により血痕は落ちていたが以前の生活跡がそのまま残っていた。しかし、此処で生活を送っていた家族の姿は何処にも無い。

彼女は家に火を放ち、嘗ての生活に別れを告げた。燃える家を見つめ涙を流した後、鬼殺隊が作った両親の墓に花を添え、祈りを捧げる。実際墓の中に両親は埋まっていない、しかしその深い祈りは確実に両親届いていると自分は思った。

その後何も話す事無く向かえた朝。彼女は自分に対し、鬼殺隊の道に進みたい旨を伝えた。

その考えは以前からあった。聞いた所、蝶屋敷に来た孤児は幾つか

選択支があり、独り立ちするまでお世話になる場合、此処で看護婦として鬼殺隊の援助をする場合。そして鬼殺隊士を目指す道がある。天使と交わした約束と人に害をなす鬼を滅する為に自分は入隊を考えたがこれは彼女の問題でもある為話題を切り出せずにいた。

「私の様な犠牲者が僅かでも少なくなれば良い。」

幸いにもその為の力やサポートしてくれる人はいるしね。と彼女ははにかみながら言った。

蝶屋敷に来て一ヶ月後、鬼殺隊を目指したいと言う自分の話をカナエさんに止められる。事件での自分に対しての疑問もあるだろうがカナエさんからは純粹に心配の色が勝っている様に思えた。

「私と妹のしのぶも幼い時両親を殺された身なのです。」

カナエさんからは先に進む為には間違っていないてもこの道を選ばずを得なかつた経緯、その苦勞、辛さ。鬼殺隊の実情、その死亡率の高さ等柱としての経験を踏まえ言い聞かせる様に話してくれた。

彼女は本当に優しい人だ。自分の事を親身になって考え、彼女の様な後悔ある道を歩ませない様としてくれる。

だが自分は、自分達は一步も引くわけにはいかない。

気付いてしまったからだ。この世界での鬼と言う存在、その危険性、沢山の人々を殺め、運良く生き残った人も一生をその悲しみを抱えて歩く現実。そしてその為の力を、宿命を自分達は持っている。

柱である彼女の許可を得なければ鬼殺隊への道は無いだろう。自分で用いるあらゆる手段を講じ言葉で、目で、態度で彼女に訴えかける。

そんな時彼女の妹であるしのぶさんから示された条件、素質を見定める為と言う名目の決闘は渡りに船だった。二人からの頼みを受けカナエさんはし一呼吸着いた後、渋々と言った様子で承諾してくれた。

決闘は明日行われる。

決闘内容はその場でカナエさんから示された。場所は蝶屋敷の中庭、双方が木刀を持って立ち会い、人体の急所や、過度な怪我を与え

る行為の禁止と言ったものを伝えられた。

(決闘なんてどうしたら…。私刀なんて握った事無い。)

それはこちらも同じだ。第一自分の世界だつて昔ならまだしも現代に刀なんてそうそうある物じゃない。良くて竹刀くらいだ。

力は問題無いと思うが剣技に関してこっちは素人に過ぎない。相手は鬼殺隊の柱であるカナエさんの妹である胡蝶しのぶさん、聞いた所によると継子と言って柱の弟子で直々に指導を受けているらしい。

だから確実に技能は相手が上だ。見様見真似でどうにかなるとは思えない。だがしのぶさんが居なければこうして試される機会すら貰えなかったのだ。何か策を練って認められる必要がある。素質を見る試験だ、必ずしも勝つ必要は無い。自分の有用性、将来の可能性を見せれば良い。その為にも自分も持つ全ての手札を切る。

(とりあえずまだ時間はある。素振りでもしながら考えるか…。)

中庭にて精神を入れ替え、互いに素振りを行う。いまいち刀を扱うのでは無く振り回してる感は否めないが二時間程行えばそれなりにマシになっている気がした。

(こう横なぎで振ればこうくるから…こう返して)

(いや、違うんじゃない?意外と鏢迫り合いながらも…)

……。

(走りながら振るうつてのはどうかな?脚力もそれなりにあるだろうし早いかも…?)

(正面から?鬼相手にしてるしのぶさんからすれば良い的かも知れないんじゃない?)

だー!分かん!!

そもそも刀を扱う人の動きを予想するのが間違ってるんだ。読み合いに持ち込んで勝てる訳無い。自分の事で精一杯だ。

(自分の事で…。あー。確かに。うん、良い事思いついたかも知れない。)

(え、こんなの?…本当か?)

彼女の発言は単純明解。確かに相手の事は考えず自分の事だけ考えれば良いものだった。

それは数手ほど自分の中で考えた効果的な技を相手のタイミングを無視し、できる最速の早さで突き付ける至極単純なもの。

(あー。確かに相手の事をあれこれ考えるよりこの方が効果的だと思うな。自分らしいし)

(はっはっはー。そうでしょ?)

答えは簡単。身体能力に任せた力押しである。



「それでは始めます。双方、礼。」

姉の合図にて相互に礼を行う。

昨日の姉との会話が頭を過る。八雲結、鬼を素手で一晚相手にし続け勝利した少女。修練用の袴を身に纏い、髪を後に束ねる今の姿からは想像もつかない。その境遇には同情するものがあるがそれは私胡蝶しのぶが手を抜く理由にはならなかった。

彼女は得体が知れない。その秘密を晒さねば、そして一定以上の実力を示させなければいけない。いくら両親を殺されたとしてもそんな不確定要素を鬼殺隊は受け入れない。

(さて、どう出るのかしら?)

姉の手が拳がる。これが下がる事が決闘の始まりの合図だった。

手を抜くか、それとも上手く技量を調整するのか、はたまた生き残ったのは偶然で只の気持ちだけの少女か。どれも先は無い。打ち合う私が、見届ける姉がそんな真似を許さない。

一合打ち合えば直ぐに決闘は止められ、彼女の鬼殺隊への道は閉ざされる。当分は監視下に置かれるだろうがそれも数年だ。その後はどうにでもすれば良い。

緊張を解き、木刀を構える。身体の無駄な力を抜き、一見脱力とも

見えるそれはどんな状況でも反応出来る様にする為の手段。

油断は無い、筈だった。

(疾いッ!!)

「始め!」と同時に振り下ろされた手。その瞬間見えたものは鋭い踏み込みと共に正面に構えた木刀に向かって横薙ぎに振るう彼女の姿。背後には砂埃を残し、足元は急激な踏み込みにより地面が捲れ上がっていた。

直ぐ様木刀の剣筋を見極め、受け流そうと木刀を構える。瞬間、木刀を構えていた腕全体に強烈な衝撃が走った。

(ツツ痛!!)

次の瞬間自分の足が宙を浮いている事に気付き愕然とする。確かに私は受け流し易い角度で受けた筈だ。まさかそれ程までの力だと言うのか。横目で見たのは驚く姉の姿。

「くうッツ!!」

姉に恥ずかしい姿を見せられない。直ぐに宙で身体を立て直す。両手は先程の衝撃で痺れているが辛うじて構える事が出来ていた。勝負はまだ続いている。見ると追撃をかけようと自身に向かって木刀を振るう彼女があつた。

花の呼吸 陸の型 渦桃

咄嗟に呼吸を使い、空中で斬撃を放つ。飛び退き、追撃を止めた彼女だがまた直ぐに斬かかってくる。しのぶはそれを少々早計に感じた。

自身に振るわれる三撃、もはや木刀で受ける事は無理と判断し回避に専念する。刀を後に携え回避、彼女の攻撃が空を斬る。

(先程よりも遅い?なら…)

反撃に出ようと木刀を正面に構え直す。瞬間、勢いを取り戻した剣筋が振るわれ、しのぶは焦るが何とかこれをしゃがむ事で避ける。

(随分粗がある…。刀は早く重いけど剣筋は素人、勝負を焦ろうとした理由はこれかしら。)

回避しながらも彼女の攻撃の調子を読む、それは修練にて体得した自身の得意分野であつた。一撃、二撃と躲すつれその精度は上がって

いく。

「くそツツ!!」

今度は彼女が呻く。見ると息は切らしてないものの、表情を苦しめた彼女の姿があった。

(…これならば勝てる!)

しかし、その瞬間踏み出した彼女の斬撃の調子が変わる。今までものとは違う構え、早さで放たれた一撃は肩を掠め私に少なく無い痛みを与えた。

「ツツ!!」

「あ……ごめんなさい!!」

彼女が一瞬たじろぎ謝る。まさか謝ると思つて無かつた私はその言葉に意表を付かれ気が抜けてしまう。

「そこまで!両者後へ!!」

そこに姉の終了の号令がかかり決闘は終了した。

決闘は私の思つても無かつた結果で進み、予想だにしない結末で終わったのであった。

## 第07話 育手

「そこまで！両者後へ!!」

終了を告げる姉の凜とした声が中庭に響く中、私は冷静に先程のやり取りを思い返していた。

先手は彼女に譲るつもりだったとはいえ、始まってみたら終始彼女に圧倒された。

速度、力も共に予想以上。勝負を早めたのは技術で劣る私に長引けば確実に負けると思ったから。その判断も悪くない。しかし、最後のは何だったのだろうか…。攻撃を与えた事に自ら怯む所を見るに木刀で人を傷付ける事に対する負い目を感じたといった所か。

(思えば初めの一撃は私の得物に対してだった。粗があると感じたのは私に対する直接的な攻撃に慣れていなかったから。彼女の本領はあの初撃だ。訓練をして無駄を無くしていけばまだまだ成長の余地はある。)

人は無心では刀を振らない。誰にでもそこに思いが籠る。私の様に鬼に対して復讐心を宿す者もいれば姉の様に憐れみの心を持って振るう者もいる。そして、打ち合いの中、彼女の刀から感じたのは純粹な熱い思いだった。

「私を鬼殺隊に入れて下さい。私の様な者を少しでも減らす、その為に生き残ったこの命を使いたいです。」

姉へ話していた彼女の言葉を思い出す。

(どうやら、心配は杞憂でしたね。)

彼女は悪では無く善だ。確かにその人並外れた力、回復力には疑問点があるがそれが何だと言うのだ。そんなもの現在柱として鬼殺を行っている者達と比べれば埋もれる事実だ。姉も大概だが他の柱達は更に人を越えている。それに疑心など成果で洗い流せる、全ては今後の彼女次第だろう。ならば私達の出来る事は…。

「姉さん。」

一言かければ姉も分かっていたのであろう。姉は一度頷き彼女に

正対する。

「八雲結、貴女を認めます。この決闘において貴女は鬼殺隊を指す上で十分な資質を示した。入隊に関しては試験もあり、今この場で鬼殺隊に入れる訳ではありません。しかし、私花柱胡蝶カナエの名において貴女が鬼殺隊に入る為の助力を惜しまない事を約束致します。」

彼女は姉の言葉を受け万感の思いで「よろしくお願い致します」と頭を下げた。

(私もまた一から修行し直さなければなりませんね。)

八雲結。彼女ははずれ頭角を表す存在だ。私も負けてはいられない、もっと実力を付けなくては。

胡蝶しのぶは強く決意を固める。全ては姉と肩を並べ共にある為に。



(何とか合格貰えた！やったー！)

彼女は喜んでいるが、実際決闘はギリギリだった。しのぶさんが後手に回ってくれたお陰で奇襲は成功したが、彼女の技量は全く追撃を許さなかった。空中で体勢を変え剣技を放つ姿はブレが無く、美しかった。

一体どれだけの鍛練を積みばあそこまでなるのだろうか…。それに攻撃のリズムを読まれるのも早かった。予め彼女と話し合い、入れ替わり、攻撃に変化を付ける公算は成功だったと言える。

でも当てたからって謝るのではないわー。本当に終わったと思った。(べ、別に良いじゃない！結果的に許可も貰えたんだし、それに貴方も攻撃の時、明らかに動きが鈍くなつてたよ。)

…確かに。木刀とは言え人に刀を振るうのがこうも抵抗あることだとは思わなかった。今後は対人練習も考えないといけないな。

決闘の終わりに、しのぶさんに御礼の言葉を伝えた。彼女が居なければこうして機会を与えてくれる事も無かった。

「いえ、私も学ぶ事はありました。こちらこそありがとうございます。」

笑顔でそう言うしのぶさん。手を握り、自分の今後の活躍を祈ってくれた。手は華奢で小さく、これであれ程の速さで刀を振るっていた事に驚く。

姉妹共に本当に凄い人達だった、いつか自分達も追い付けるだろうか…。

今とはかく進み続けるしかない。自分達はまだ鬼殺隊として始まってもないのだ。

カナエさんとは今後について話をした。

鬼殺隊になる為にも自分はずまず育手という人の下で鍛練を積まなければならぬらしい。

鬼殺隊は基本鬼狩り専門で柱も継子でもない限り下の者に刀を教える事は無い。鬼殺隊にすべく教育を行う者、それが育手。育手は数多くいて各人それぞれの場所、それぞれのやり方で鍛練を行う。

そして鍛練の後、鬼殺隊で行われる最終選別に合格すれば晴れて鬼殺隊として認められる。試験は大変厳しく合格するのはほんの一握りの実力ある者達だけで多くの者がその試験で亡くなるという。

後は呼吸について説明された。呼吸は鬼を倒す為に鬼殺隊が身に付ける操身法。鍛えた心肺によつて大量の空気を取り込み、身体能力を一時的に大きく向上できるという。基本の呼吸には大きく分けて「水」「雷」「炎」「岩」「風」の五つの流派があり、それぞれ特性にあった技を扱う。

カナエさんとしてのぶさんが扱うのは「水」から派生させた「花」の呼吸。使っている呼吸を変えたり派生させるのは珍しい事では無いという。特に水の呼吸は技が基礎に沿ったものでカナエさんの様に派生させる者も多いとか。

「貴女には私達と同じ「水」の呼吸の育手を紹介したいと思います。その方が信頼出来る方と言うのもありますが、先程言った通り水の呼吸は基礎に沿った方、多種多様な状況に対応出来るので刀を振るう者の基盤として学んで損はありません。」

自分もそれに応じ、育手の元への出発は三日後となった。案内へは

しのぶさんの鎧鴉が行ってくれるらしい。鎧鴉は鬼殺隊士一人につき一羽着く連絡用の鴉で大変賢く人の言葉を話す。小さな蝶の飾りを着けた鴉は私肩にちよん、と乗り「ヨロシクネ」と言った。黒い羽は美しく、僅かに香水の香りがした。

「それでは気をつけて」

三日後私はカナエさんにしのぶさん、共に入院していた鬼殺隊士、お世話になった看護師の方、仲良くなった幼い子達に見送られた。紹介された育手の元までは人の足で一週間程らしい。着くまでの旅のお金も頂いてたので問題無い。しかし、本当に此処の人達には助けて貰ってばかりだった。

「何から何まで本当にありがとうございました！このご恩は忘れません。」

「貴女のこれからの活躍を心より祈っています。」

微笑むカナエさんに改めて頭を下げる。

今度来たときは一鬼殺隊士として、美味しい物を沢山土産に帰ってこよう。それが自分に出来る精一杯の恩返しだ。

私は皆の姿が見えなくなるまで何回も振り返りながらも手を振り蝶屋敷を後にした。



「育手」である鱗滝左近次は一通の手紙を見直す。

四日前、現花柱である胡蝶カナエの鎧鴉から一通の手紙が送られた。内容については「目ぼしい人材を見付けたのでどうか鬼殺隊士として育てて欲しい」と言うもの。新たに出た迷いの種に彼はため息を吐く。

(当分の所は誰も見るつもりは無かったのだがな…)

彼、鱗滝左近次は育手として確かに優秀だ。元水柱としての豊富な経験、師として私情を捨て、教え子の為に心を鬼にして行うその指導、全てが一級品だった。しかし、それでも彼の教え子の多くは最終選別で戻らなかつた。理由は分からない、選別で残った子は教え子と実力

は差ほど変わらず、寧ろ劣っている年の方が多かった事が更に彼の焦燥の念を募らせた。育手として教え子に過度な感情移入は行わない、彼は歴年の経験で己の心を律する術を得ている。

だが、戻らない子が一人、また一人と増えていく事は確実に彼の心を磨耗させていた。その数が十を越え、彼の経験上最も優れていると感じた教え子が戻らなかつた時、彼は少々疲れてしまっていた。故にこの数年間教え子は取っていない。

それでも育手として退く事が無かつたのは偏に彼の数少ない教え子の活躍に他ならない。彼らは今、亡くなった子達の思いを受け継ぎ鬼殺隊士として命を賭して頑張っている。一線を退き、刀を教える事しか出来ない老人が弱音を吐く訳にはいかない。少しでも鬼を滅するべく優れた隊士を育成するそれが己の指名だ。

蝶屋敷、彼処から此処までは大人の足でも二週間は掛かる。手紙には候補者は齡十四の少女と書かれていたので三週間といった所だろうか。鱗滝は新たな教え子を迎えるべく支度を始める。

二週間もあれば間に合うだろう。そう考える鱗滝は翌日衝撃を受ける事になる。教え子になる予定のその少女は大人が二週間掛かる道を五日で走破してきたのだ。

「胡蝶カナエさんの紹介で参りました、八雲結です。今日からお世話になります。」

疲れを感じさせる事無く、笑顔で話す少女。華奢な外見、その仕草からは特に鍛練を積んだ者にも見えず藍色の着物を着こなすその姿からは何処ぞの街娘といった印象を与えた。

「お主、どうやって此処まで来た？お主が通った道は屋敷から五日かそこらでたどり着ける様な道では無い。」

「体力には自信がありません。初めは普通に歩いて来ようと思ったんですが、宿泊の費用が思ったより高くて…。金銭的には足りたんですけどこんなにも払うんだったら速く来て余った金で茶屋で団子でも食べた方が良くかなと。」

八雲結と名乗る少女は照れながらに話す。口には先程食べたのであろう餡子が付いていて指摘すると彼女は顔を赤くしながら袖で口

を拭った。

：嘘は付いておらん。

鱗滝は彼女が嘘を付いていない事を匂いで理解する。彼は特別に鼻が利いた、それは人の感情にも敏感でその者が今どんな心持ちなのかも知ることが出来る。彼がこうして五体満足で柱を退く事が出来たのもこの力による所が大きかった。

「今は夕方か…。分かった。では今からお前が鬼殺の剣士として相応しいか試す、付いて来い。」

返事を待つ事無く山へと駆ける。これから登る山には多岐に渡る罫が無数に仕掛けてある。それを掻い潜り翌日の夜明けまでに麓の家へ帰って来る。これが彼が与える試練だった。

(…全く信じられん！この場所で息も切らさず付いてくるとは。)

彼は自分の後ろで一定の距離を保ち追走する少女を感じて心底驚く、此処は狭霧山と言って頂上近辺は特別空気が薄くなっており、下手な者では息を切らすとその空気の薄さで失神する。なのに後ろの少女は疲れる様子も無く走っていた。

「お主…今までどの様な生活を送ってきた？」

手紙では一月程前に鬼に両親を殺された所を屋敷に保護されたと書かれている。だが目の前の少女の体力は既に一鬼殺隊士を越えている。まだ胡蝶カナエの継子と言われた方が納得出来るものだ。

「いえ、別に変な事は…。八雲家の長女として畑の手伝いをしていたくらいです。」

「…そうか。」

お主の様な娘が居るかさえ思う。だが嘘は付いてない。彼は長年頼りにしてきた自分の嗅覚を疑う感覚に軽く目眩を覚えたが何とか平常心を取り戻し試験を続けようとする。

「これから試験を始める。今から明日の夜明けまでに山の麓の家へと戻ってくることに。」

彼女の返事を最後に霧に紛れ姿を消す。彼は一刻と起たず家へと帰り囲炉裏に火を付けようとしていた。

…さて今度の子は何刻かかるか。

今までの者は日登る寸前によくやく、といった者が多く、速い者でも半分の時が過ぎる。だが今回の彼女は彼の経験でも例がない。

やがて囲炉裏に火が着き部屋を明るく照らす。そんな時戸を叩く音が部屋に響いた。

八雲結。下山時間二刻。

どうやら今回の迷いの種は相当らしい。

汚れ少ない彼女を見て鱗滝左近次は今日何度目かわからない溜め息を着き、苦笑いを浮かべた。

## 第08話 それぞれの呼吸

育手の方の名は鱗滝さんと言うらしい。見た目は白髪の老人で何故か天狗の面を常に付けている。同じ家で寝食を共にしているが未だに素顔を見たことがない。

鬼殺隊の最終選別は藤襲山で行われるらしく自分が最終選別を受けるかは鱗滝さんが決めると言う。

初めは基礎体力の向上の為、刀を持たされ初日に行った山下りを繰り返した。山には沢山の罠が仕掛けてあつてそれは日を増す事に凶悪な物になっていく。

自分は第六感と強化された身体能力で何とか一度も罠に掛かる事無く降り続け、数えて三日目で山下り終了を言い渡された。今回の試験で彼女と交代で降り、相互で第六感に磨きがかかったのは大きい成果だ。

次は刀の素振り。鱗滝さんの青色の刀を真正面に振る事を繰り返す。刀は折れやすいと最初に言われた。刀は横に弱い、なので刀には力を真つ直ぐ乗せる事、刀を折ったら三日間飯抜きと低めに脅された。振りすぎて腕がもげる：何て事も無かつたので彼女と交代で一日中確める様に刀を振るう。一週間でそれなりの形になり、次の訓練へ。

転がし祭り。これが中々にキツイ、どんな体勢になっても鱗滝さんによって素早く転がされる。

自分は受け身を取って素早く起き上がるのだが全力で力を入れて抵抗しても鱗滝さんは重心の弱所を見つけ確実に転がしてくる。肉体的には大丈夫だが何度も宙を舞い、目の前が回る景色を見せ続けられ重心の大切さを嫌と言うほど体感させられた。

次は先程の訓練に刀を渡され攻撃が許される。自分は刀で真剣なのに鱗滝さんは素手で向かい打つ。だがこれが自分達には難関だった。

「結。お主は相手を傷付ける可能性が少しでもあると攻撃が緩くな

るの。」

正に凶星だった。しのぶさんの決闘でも感じたが自分達は相手を傷付ける事に慣れていない。鬼なら問題無いが人に対してはそうなる。

「お主の見え見えの攻撃等当たるわけなからう。早う振れ。」

常に敵が鬼だけとは限らない。そう言う鱗滝さんは自分が人に対してまともに振れる様になるまで何度も付き合ってくれた。ある程度の技量を積みば人に振るう事も無く無力化出来る、要は手加減の問題なのだと言った。

最後は呼吸法と型の練習だ。何度も吸って吐いてを繰り返す、間違っていれば腹をバンバンと叩かれる。

身体能力では無く技術を要する訓練が一番多くの時間が掛かった。身を持って体験する為、彼女と交互に練習を行い指導を受ける。一月の時間を経てようやく両方を互いに身に付けるまでに至った。

「もう教える事は無い。」

三ヶ月後それは突然言い渡された。後はお前次第、お前が儂の教えた事を昇華できるかどうかと言われある場所まで案内される。

「この岩を斬れたら最終選別に行くのを許可する。砕くのは無しだ。結、お主は無駄に力があるからの、その場合は石の大きさを二倍にしてやり直した。」

そしてそれから鱗滝さんは何も教えてくれなくなった。

岩を切れたら次へ、斬れなければ見込み無しと言うことか。

鱗滝さんから教えられた全集中の呼吸を使えば身体能力が増加し、並大抵の岩なら斬る事が出来るだろう。

刀を構え、それを見上げる。

「しかし……これはなあ。」

目の前には中蓮縄の巻かれた五メートル程の岩の姿。

全集中の呼吸だけでは刀は半ばで止まり、折れる。何となくそう感じた。

これを斬るためには全集中の呼吸だけでは無い、水の呼吸を使用して一撃の元で断つ必要がある。

…結。お前ならこれ出来るか？

(うーん。壱ノ型 水面斬りでギリギリいけるかな。)  
マジか…。

型にかけた時間は互いに同じだが、習得速度、その練度には大きく差があった。使えなくは無。でも今の自分の水の呼吸ではこの岩は斬れないだろう。

彼女ならこの岩を切れる。この場で足踏みする事無く次へ進める。だが自分は？此処で斬れない自分は今後足手まといにしかない。

その後は彼女に恥を忍んで水の呼吸を教えて貰う日が続いた。実際に身体を動かして学ぶ方が覚えは早い、彼女が型を振り、続けて自分も型を放つ。傍から見れば練度が上下した何とも不思議な様相になっているだろう。

一月経っても岩は斬れなかった。

確かに練度は上がったがそれは微々たるもので岩を斬るまでには至らない。

彼女の剣筋は水のように流々としていて速度も一定では無く伸びやかなものだ。自分は彼女の様には出来ない。速度や威力では負けていないが細かい動作になるとどうしても粗くなってしまう。

「… ツクそ！どうして!?!」

今日も岩の前で無心で刀を振るう。教えられた型を身体に刻み付ける為、少しでも効率良く、的確に振るう為。

だがそれでも岩は斬れない。

いつまで振るえば良いのか…。身体はとつくに型を覚えた、でも壁はまだ高く険しい。こんな所で足止めを喰らっている訳にはいかないのに。

「はあああッッ!!」

岩に向かって壱ノ型 水面斬りを放つ。 刀は岩の七割程まで斬れたがそこで止まった。

限界まで努力した。出来る事は全ては行って来たのに結果が付いて来ない。

岩の前で項垂れる自分に声が聞こえたのはそんな時だった。

「筋は良いようだが…ふむ。」

気が付けば岩の上に同い年位の少年が座っていた。少年は此方を一瞥すると流れる様な動きで下まで飛び降りる。

「それにしてもこれだけ大きな岩を用意するとは…。鱗滝さんはよっぽどあんたに期待してると伺える。」

岩に座りながらカラカラと笑う少年。その顔には鱗滝さんと同じように面がある。頬に傷が入った狐の面だ。

「進め、進み続ける。例えば女だろうとお前が目指すのは鬼殺の道、生半可な腕では死ぬだけだ。例えばお前の片割れが出来ようとお前自身が駄目なら必ず綻ぶ。道はお前の考える程甘くは無い。」

獅子色の髪をした少年がこちらを見る。面の向こうの瞳は自分達両方を見てる気がした。

(この人…強いよ。)

分かってる。とにかく鱗滝さんの名を口にしてるが急に気配も無く現れた。刀を持つその佇まいに全く隙が見つけられない。

念の為、刀を何時でも抜刀出来る様にし、全集中の呼吸を始める。

彼は数秒自分を眺めた後、「フン」と鼻を鳴らす。

「喚いてるから喝でも入れてやろうと思っただがその心配は無さそうだ。今回俺は動かん。真菰、後は任せたぞ。」

霧へ進む少年と入れ代わる様にまた同年代位の花柄の着物を着た少女が目の前に現れた。この子も頭に狐の面が着いている。

彼女は自らの名前を真菰と言った。

真菰は水の呼吸について教えてくれると言うので当初は女の結に代わって指導を貰った。一見完成してるかに見えた彼女の型も真菰からすればまだ無駄や癖が付いている所があるらしい。直した彼女の型は確かに見違えてキレが増した様に見える。

「…さて、次は君の番だね。出ておいで」

ギョっとした。先程の少年もそうだったがこの二人は自分達の存在に気付いている。

「…何で俺の存在に気付いたんですか？」

「貴方達が山に来たときから私達は見ていたの。隠そうとしてたみたいだけど分かる人は気付くよ。僅かな癖、剣筋、佇まい。似てる様で貴方達は全く違う。追及はしなかったけどきつと鱗滝さんも分かってたんじゃ無いかな？」

そうだったのか…。ならさぞかし自分達は不思議な存在に見えるに違いない。

真菰が示す通りに水の呼吸を一通り行う。途中に一回アトバイスを受けた意外は最後まで何も言われなかった。

真菰は暫し思い詰める様に考え、そして口を開く。

「貴方は……」



家の戸を誰かが叩く。

彼はその音、匂いで訪問者を理解した。天狗の面を着け、戸を開き、訪れた者と顔を合わせる。

八雲結。人並み外れた力と体力、鋭い感覚と才能を有し、今までの教え子の中で最短で修行を終えた少女。岩の課題は今までのそれでは彼女を測る事は出来ないとし、現段階で水の呼吸を極め、到達できる限り最大の岩を充てた。

彼女の修練用の着物は所々汚れ、頬には泥が着いている。髪は後ろで縛ってはいるがボサボサで最近手入れをしてない事が伺えた。

彼女が俯き、何かを言おうとしてるのを見て、彼は「ああ、またか。」と思う。

この課題をこなせず鬼殺隊への道を諦める者は少なからず居る。だが、それでも良いと彼は思った。

岩を斬れないならば鬼は斬れない。むぎむぎ教え子を死地へ送るくらいなら、嫌われてでも現実を突き付け、普通の日常生活に戻した方が良い。

彼女は抜き出た者を持っていたが彼女が決断したならば彼は止めないつもりだった。

彼女は意を決した様に彼に心中を伝えた。

「自分に…違う流派の育手を紹介して下さい!!」



「貴方は…貴方には特別変な所は見られなかった。教えの通りに動いて実践してる。型も綺麗だね。これで岩を斬れないと言うことは貴方自身に問題がある。」

問題とは…。と考える自分に彼女は続けた。

「刀の才能はある。でもそう、言うならば水の呼吸は貴方向きでは無いね。変則的な歩法で変幻自在に攻撃する水の呼吸よりは止まった状態で素早く攻撃する炎や雷の呼吸の方が貴方向きに思える。」

確かに思っていた。もつと真っ直ぐ、速く、強くと。

しかし、だからといって異を言えない。水の呼吸にも良い点は沢山あつてこれで十分戦えると思っていた。

「自分はどうしたら？ 鱗滝さんは水の呼吸だ。他の呼吸には他の育手の元へ行かなければならない。折角ここまで面倒見て貰ったのに。」

「貴方の流派は自分に向いていません。」なんて理由で他の流派には行けない。心配する自分に彼女は微笑む。

「大丈夫。鱗滝さんは貴方が真剣に悩んで決めた事なら許す。受け入れる。それに鱗滝さんの教えが残らない訳では無い。貴方達の中にそれは残っている。幸いにも彼女は水の呼吸が向いているしね。」

だから…と、彼女は言う。

「鱗滝さんはそんな事では怒らないよ。いつも私達の事を考えてくれる。だから私達鱗滝さんが大好きなんだ。」

この選択は今まで積み上げて来たものを一度置いて、他の物を一から積み始める行為だ。また新たな育手の元で一から。

それは大変な事だ。でも選ばれなければ行けない。

じゃないともう一人の自分に正面から向き合えない。共に戦えない。

(大丈夫。私は待ってる。一緒に最後の訓練乗り越えよう!)  
…おう。

「まずは鱗滝さんに謝らないと、だな。」

進め、進み続けろ。少年にもそう言われた。

過酷、困難。そんな事は分かっている。自分が目指すのは鬼殺隊だ。その為の道にはもう踏み出している。



半年後、岩の前に私は鱗滝さんと居た。

もう一人の私である彼はとある呼吸の育手の元で半年間基礎から鍛え直した。その道は大変だったけど確実に前へ進んだ。

今日は修行の成果を鱗滝さんに見せる時。

失敗は許されない。学んだ全てを用いてこの岩を斬る。

呼吸を整える。深く、強い呼吸はそれだけで力を生む。心を落ち着

かせ次の瞬間に全てを捧げる。

「行きます!」

全集中!!

ヒュウウウ!

《水の呼吸 壱ノ型 水面斬り》

通り抜け様に両腕を用いての横一線。手応えあり。

…でもまだまだ!

水の呼吸の足捌き。一瞬で踵を返し、再度岩へ向かう。

(この時を待っていた…。)

もう一人の私である彼と入れ代わる。その間は訓練を重ね、戦闘に問題無い程に短縮されている。

これから振るうは雷光、速度は神速。水の呼吸と同じ、五つの流派その一つ。

「行きますッ!!」

シイイイイ!

《雷の呼吸 壱ノ型 霹靂一閃》

すれ違い様に縦に一線。落雷と聞き間違える様な音が広場に響き渡る。

結果は見なくても身体で理解した。

直ぐ様呼吸の切り替えによって生じた反動を減らすべく、回復の呼吸を行う。

荒い呼吸を続けながら自分は鱗滝さんを見る。

鱗滝さんの背に隠れる様にある岩は縦と横に綺麗に両断されていた。

鱗滝さんは岩の断面を見た後、自分の頭に手を乗せ。

「合格だ。【二人】共良く頑張った」

と優しく言った。

## 第09話 最終選別

育手である桑島慈悟郎は先日まで居た少女を思い出す。

同じ育手である鱗滝左近次から手紙が来たときは何事かと思つたが雷の呼吸を学びたいと言う彼女の熱心さに折れ。つつい教鞭を振るってしまった。

彼女はどんな事にも真剣で、教えた事は貪欲に吸収していった。その成長振りがつい面白く、他人の教え子でありながら惜しげもなく型を伝授してしまった。

久し振りに気骨ある若者だった。

最近と同じ流派である、育手の監督に専念していたが、久し振りに自分自身が教えるのも良いかも知れない。

志望者を待つのでは無く有望な人材を探してみるのも面白い。

旅を試してみるのはどうだろうか。最近は家に籠りがちであった。まだ身体が動く内に旅を楽しみながら才ある若者を探す。

我ながら名案だ。

では支度をしよう。まずは北か、南か。

いや、やはりどちらでも良い。着の身着のまま気の向くままに、旅とはそうあるべきだ。

主発は明日にしよう、実に楽しみだ。

桑島慈悟郎、我妻善逸と出会う一年前の出来事である。



岩を斬った日、鱗滝さんは自分達に何も追及する事は無かった。

二つの呼吸を使う意味、仕草や態度がちぐはぐな自分達。思えば聴きたい事は沢山あった筈だ。

鱗滝さんは気にした様子も無く、自分に最終課題を達成したお祝いと最終選別の厄祓いを兼ねて赤飯を炊いてくれた。

食事は以前の世界を考えると質素な物だったが、一つ一つ鱗滝さんが手間を惜しまず作った食事は大変温かく、嬉しい気持ちで満たされる。

食事後伸びた髪を切り整える鱗滝さんに自分は何とも言えない気持ちになりポツリポツリと自分達の事を打ち明ける。

全ては話せず表面的な部分のみだったが鱗滝さんは静かに耳を傾け「そうか。」と最後に一言呟いた。

自分の中では壮大な告白だったが意外と反応が薄い鱗滝さん。やはり、真菰の言う通り自分達には気付いていたのかも知れない。

そう言えば真菰と彼は何処に住んでいるんだろう。鱗滝さんの教え子だとは思うけれど…。

鱗滝さんに尋ねると髪を切る手が止まる。自分は二人に最終課題の時に世話になった事、真菰が鱗滝さんを好いてる事を話した。

お面を着けているので鱗滝さんが今どんな顔をしているのかは分からない。でも途中から自分の肩に手を置く鱗滝さんの手が震えている事に気付き、自然と話の音量が尻狭みになる。

話の最後に「二人は元気だったか？」と鱗滝さんが尋ねた。

自分が答えると鱗滝さんは嬉しい様な悲しそうな声色で「そうか。」と言う。

結局二人の事は聞けなかった。

それから鱗滝さんはお面をくれた。名を「厄除の面」という。悪い事から身を守ってくれるようだ。真ん中を境に左右非対称な顔が彫られている面は成る程良く自分達を模していた。

鱗滝さんは藤襲山で行われる最終選別が一週間後なので移動を考えると明日にはもう発たねばならない事、明日も早いのもう寝る様にと言われ、その日を終えた。

早朝、水場にて身体を清め、藍色の着物に手を通す。腰には鱗滝さんから借りた日輪刀を携え、頭に貰った面を斜めにかけた。

気のせいか着物丈が合わない気がする、少し身長が伸びたかも知れない。この身体になってから測って無いが今の彼女は大体百五十台

後半くらいだろう。前の自分が百六十そこらだから視線にも違和感が無い。

(嬉しいけど、私的にはこれで止まって欲しいかな。)

(女性は小さくってやつ？多少大きい方が健康的で良いんじゃないかな。この世界は時代柄、比較的皆小さいけど俺の世界は大きい女性も結構居たよ。)

(それでも駄目。…食べるの減らそうかな。)

それこそ駄目だ。鬼殺隊は身体が資本、沢山食べて沢山動かないと。そう考えると健康的な生活してるな、睡眠も早いし背も伸びる訳だ。

うう…。と嘆く彼女を無視して身体を見る。姿見は無いがこうして見ると結構良い感じじゃないかな。刀も様になってきてるし。

「うむ、似合っているぞ、結。」

後ろから鱗滝さんに褒められる。

「ありがとうございます、鱗滝さん。」

(馬子にも衣装と言うしな、それに多少なりとも彼女は整った顔立ちだ。まあまあだな、まあまあ。)

(うるさいなあ…全くもう。)

「…もう出る時間だな。結、教えられる事は全て教えた。後はお主次第だ。」

「はい、本当にお世話になりました。」

一礼し、家を後にする。手を振ると鱗滝さんも手を振り返す。時間になると一瞬の事、だが高い視力が「それ」を見た。

(…ちよと代わるね。)

彼女は直ぐ様来た道に戻り、鱗滝さんの手を握る。

「そうだ！無事に帰ったら鱗滝さんのお面の下の素顔見せて下さい。」

彼女は彼女と自分の鱗滝さんの顔の予想やお土産の事等、取り留めの無い話をしている。

(……全く。)

恐らくこんな日を鱗滝さんは何回も行って来たのではなからうか。

そしてその内の何人かは帰ってくる事は無かった。

あの瞬間見たものが正しければ鱗滝さんが自分達に振り返すその手は震えていた。

彼女はその後も話を続けた。少しで終わるかに見えた話は彼女の終始一方的なもので話を続け、鱗滝さんが流石に出発を促す半刻の間続けた。

「行つてきますー！」

彼女に振り返す鱗滝さん。その手に震えは無い。

(女子の話が長いのは本当らしい…。)

(もう… うるさいなあ！)

藤襲山までの道のりは交代で進んだが自分の歩みは驚く程軽やかなものだった。

この世界での存在が彼女で良かったと改めて感じた日であった。



夜の藤襲山。鬼殺隊の最終選別の場。

(うわぁ…綺麗だね。)

(そうだな。こんなには沢山咲いてると絶景だ。)

現場の麓から山道まで藤の花が咲き乱れ月の光に照らされている。鬼は藤の花の持つ独特な香りを嫌うと言う。だがこれだけの量、人為的で無い筈が無い。

(鬼から何かを守っているか。その反対か。)

(…どうということ?)

(行けば分かる。)

山道を登り終わると自分と同じ様に刀を携える同年代の男女が二十人程待機していて中央にはこの場に不相応な着物を着た幼い少女が二人立っている。此所が試験会場らしい。

(可愛い子達。双子かな?)

多分な。自分は人形みたいで余り好きでは無い。七五三の日本人形が幼い時から苦手なものもあるかも知れないけど。

定められた時間になると二人の少女が話を始める。どうやら此処

の担当者らしい。鬼殺隊の有力者の娘だろうか。

曰く、この藤襲山には生け捕りにした鬼が閉じ込められている。この藤の花の柵の中で一週間生き抜く事が最終選別合格の条件だ。

一週間生き抜く。つまり鬼を倒す必要は無いと言うことだ。

鬼は夜活動を始める。日中は日当たりの良い所で休息を取り、夜は身を守る為の立ち回りが求められるという事。

(とりあえず今日は朝日が登るまでが勝負だね。)

開始を言い渡されると自分達選別受験者は藤の花の柵を越えて山の中へと散り散りとなる。

山道を数分歩くと周囲に幾つもの人ならざる者の気配。

(作戦通りいくぞ。結、準備は良いか?)

(大丈夫。任せて。)

身体の主導権が私に代わる。

作戦は至極単純だ。様々な条件に対応出来る水の呼吸の使い手である私が主に戦い、不測の事態になった時は雷の呼吸の使い手である彼が前に出る。彼は水の呼吸も使えるが私の呼吸よりは威力が劣るらしく、今回は補助的にしか使わないらしい。

急な呼吸の入替えは身体に負担が掛かる。前回の異なる呼吸からどれだけ時間が流れ、身体を準備出来たかにもよるが一回の戦闘において問題無く交代出来るのは現段階では一回が限度だった。

「久し振りの人肉だあ!!」

「若い女。それにこの匂いは!?!」

目の前に二体の鬼が現れる。

(落ち着け、今のお前ならいける。)

そうだ、大丈夫。彼に守られていた以前の私とは違うんだ。落ち着いて型を繰り返せ。

全集中!!

《水の呼吸 肆ノ型 打ち潮》

振るうその数、数閃。

二体の鬼は狙い通り、その頸と攻撃に用いていた手を失い、力無く崩れ灰となって消えた。

(良くやった、結。)

うん！斬れた、鬼に勝てた。鍛錬は無駄じゃ無い。確実に実力は身に付いている。

その後も鬼は現れ続け、六人目を斬った所で初日の朝を迎えた。

(お疲れ、結。後は俺が見る、休んでいてくれ。)

ありがと、後はお願いね。

命のやり取りは一晩しか経って無いものの私に少なく無い疲労感を残していた。彼の言葉に甘え、身体を彼に譲り、意識を休ませる。

日中とは言え、周囲に鬼が隠れるこの山で意識を完全に手放すのは危険が付きまとう。身体はその回復力も強化され多少睡眠を欠く位は問題無いが精神面は別だ。

だから日中は身体を休ませながらも彼に周囲を警戒して貰い、私は安心して精神を休める事が出来た。

そんな日を何日も繰り返して、私達は無事に最後の晩まで生き延びていた。途中、何度か他の候補者達の危ない場面に遭遇したが私達が問題無く対処出来る範囲内だったので可能な限り助け続け、その度他の候補者達に下山を促した。

能力不足だったとは言え、彼等も私達と同じ様に帰りを待つ育手の方がいるのだ。皆まだ若い、命があればまたやり直せる。死んだら此処で終わりなのだ。

そうして今日までに斬った鬼、その数は三十程になっていた。

何回か話を試みたが鬼はまともに取り合う事は無かった。人と同じ言葉を使うがその関係性は隔絶している。鱗滝さんから基本的な事は聞いていたが未だに鬼が一体何なのか私達は測りかねていた。

「ぎゃああああ!!」

突然上がる誰かの悲鳴で私の全身はびくん、と跳ねる。

近い距離だ。今急げば間に合うかも知れない。

向かう事を彼も肯定し、私達は声の主まで駆ける。

今までの鬼の歯応えの無さに私達は疑問を感じていた。鱗滝さんの教え子の多くはこの最終選別で戻らぬ身となっている。

だが私達は兎も角、あの鱗滝さんの指導を受けて、この程度の鬼にやられるとは思えない。そんな力量ならばまず鱗滝さんは最終選別へ向かう許可さえ出さないのだ。

だからきつと彼等が戻らない理由がある筈。そう思っただけで今まで夜を駆けて来た。

声の主まで駆けると何者かが宙に浮いているのが見える。

「ツツツツ!!」

月の影に隠れていたそれは目を凝らすと、最終選別の受験者の一人。

その人は首元を何者かに握り潰され絶命していた。

握る手は驚く程長く、薄青白い、手は暗い森へと続いている。

「また来たな。俺の可愛い狐が。」

ズルツ。と言う不快な音と共に姿を現れしたそれは私に声を掛ける。

月光に照らされてた姿は大きく、全身が無数の腕で覆われていた。

## 第10話 腕鬼

基本的に鬼の強さは人を喰った数だ。

沢山食べる程力は増し、肉体を変化させ妖しき術を使う者も出てくると言う。

初めて出会った鬼でさえ、この様な醜悪な見た目はしていなかった。

「戦いの経験が増えればお主でもその鬼が何人喰ったのか分かる様になるだろう。」

鱗滝さんの言葉が頭を過る。

「…その姿。貴方今までに何人喰って来たの？」

喉から出た声は私でも驚く程冷たいものだった。

「ヒヒツ…。ガキ共五十人は喰ったなあ。」

五十人。ギリリ、と刀を握る手に力が入る。

(…結。気をつけろ、少なくとも今までの闘った鬼の中ではこの鬼は最強だ。)

分かっている。でも聞かなきゃいけない事があるから。

「貴方この狐の面に見覚えがあるの？」

この鬼は此処にいる他の鬼と一線を画している。

本来この選別で闘う鬼達は人を一人か二人喰らった者しか居ないと言う。

だが此処で喰ったのなら話は変わる。恐らくこの選別を担当する鬼殺隊はこの鬼の存在を知らない。この選別試験が行われる度に少しずつこの鬼は力を着けていったのだろう。

「鱗滝の弟子だろ。お前を殺せば十四人目だ。」

「そう…。」

疑問が確信に変わる。鱗滝さんの名前が出てくる事は意外だったが最早どうでも良い事だ。

彼と真菰の存在がどういうものであったかも今なら分かる。

最早言葉は必要無い。兄妹弟子十三人を殺めた事、鱗滝さんを悲し

ませた事、許しはしない。培った力で目の前の鬼を屠るのみ。

誰をどう喰った等抜かしている鬼は隙だらけだった。

接近して型を放つ。

全集中！

《水の呼吸 肆ノ型 打ち潮》

鬼の身体に纏わり付く様に伸びていたその全ての腕を斬り捨てる。

「ツツ!? ク、クソガアア!!」

弱点である首が露出する。再生までの時間は与えない。

《水の呼吸 壱ノ型 水面斬り》

「ツツツツ!!」

刀を振るう瞬間、横から気配を感じ、頭を下げる。狐の面を削られながらも私は辛うじて飛び退いた。

其処には見知らぬ第三の鬼の姿。

「…鬼が群れるなんて聞いて無い。」

気が付けば周囲の木々の合間に鬼は複数人居て、攻撃の機会を伺っている。

「基本はな。初日からお前の動向は見させて貰った、確かに強さは対したもんだがそれだけだ。お前が希血である事を言ったらコイツらは喜んで話に乗ったぜ。そののやつは右手、そいつは左足を喰う手筈になってる。これも確実にお前を喰らう為だ。」

鬼達にはやけた笑いを浮かべ近づいてくる。

心は冷静に、呼吸を乱さないように…。

目の前の鬼に対する怒りを、この状況に対する恐怖を抑える。

「何人居ようが関係無いよ。貴方を許しはしない、貴方達も見つけたからには斬らせて貰う。」

確かにこの複数の鬼達は脅威だがそれぞれが別の個だ。連携があるわけでは無い、腕の鬼に注意を向けながら確固撃破が最も効率が良い。

《水の呼吸 参ノ型 流流舞い》

素早い足運びで回避と攻撃の両立が出来る参の型で次々と近場の鬼を斬り伏せてゆく。

腕の鬼は此方に腕を伸ばしてくるが木々の合間に入り込み、そのリーチを生かせない間合いを取り続ける。

「ツツチ。お前ら向こうへ行つたぞー！」

木々を巧みに使い、鬼の数を確実に減らしていく。

それぞれが単独で攻めてくる為、それほど厄介では無い。

力は強いがそれだけだ、掴ませず、頸若しくは四肢を斬り捨てて行き、鬼の数は腕鬼以外二人となった。

「もらった!!」と腕鬼が叫ぶ。

此方に気取られない様に地面を進めて来たらしく。複数の腕が

地面から伸びる。瞬間に数本を斬るが残った一本の腕に脚を掴まれる。力は強いがへし折られる程では無い、この程度なら私は耐えられる。

隙を見た二匹の鬼が同時に攻めてくる。

問題は無い、むしろ今こそが好機だ。

あの腕鬼は腕を伸ばす範囲に限界があり、今までに見た所。地面に伸ばした物で出し切っている、距離もあり今は完全に油断している。

腕を戻す前に素早く懐に入り、頸を断てば良いだけ。

その為の方法はある。

「任せたよー！」

「おうー！」

《雷の呼吸 式ノ型 稲魂》

既に入れ代わっていた自分は五連の斬撃により、二匹の鬼の頸と脚を掴む腕を斬り捨てた。

「馬鹿なツー！その技、鱗滝の弟子では無いのか!？」

当然使う型が変わった事に驚く腕鬼。

その位置は既にこの型の間合いに入っている。

《雷の呼吸 壱ノ型 霹靂一閃》

霹靂一閃の踏み込みは轟音と共に周囲の空気を震わせ、辺りの木々に茂る葉が一斉に落葉する。

落ちる葉を顔に浴びながら腕鬼は自分の頸が断たれた事に遅れて気付いた様だった。

首を失った身体はその部分から炭とも灰とも言えない物となり、ロボロと崩れ、やがて完全に消滅する。

首の部分は目だけ此方に向けながらも口が斬られた様で話す事が出来ないでいた。

「お前の事は許さない、だが死後は別だ。有るべき場所に行き生まれ変われ。これは見てきた自分が言うんだ、保障する。だから今度は正しく人として生きてくれ。」

腕鬼は静かに目を閉じ、その瞳は身体が消えるまで再び開くことは無かった。

(…なんとか勝った。これで良かった筈だ。)

他の鱗滝さんの弟子達もこれで救われる。後の魂は鱗滝さんの元へ戻るのだろう。自分も少し間違えれば彼等と共にあった。

パキリ、と音がして刀を見ると手元からひび割れ刀身が地面へと落下した。

(…危なかったね。)

(全くだな。)

冷や汗が額を伝う。後僅かでも戦いが長引いていたら、敵が堅かったら、自分の腕が悪かったら…。

結果は逆だったかも知れない。

鱗滝さんの刀にお礼を言いながら刀身を拾い、柄と共に鞘に入れ、布で巻きつける。

東の空は僅かに白み始め、七日目の朝を迎えようとしていた。



「おかえりなさいませ。」

「おめでとうございます。ご無事で何よりです。」

試験当初に居た二人の少女が俺を迎える。相変わらずこの二人からは感情が見えず気味が悪い。

周囲を見渡すと俺以外に十数人の人が待機していた。

その多くの者は服が汚れ、身体の一部を怪我し、立っているのもやっとの様子。

俺も例外では無い。一週間という期間は精神を磨り減らすのには十分な時間であり、日が出る日中ですら鬼が周囲に居る緊張感で満足な睡眠を取る事が出来なかった。

一週間で鬼と遭遇したのは三回。初めの二回は長い死闘の末倒す事が出来たが最後の一回で本来俺は死んでいる筈だった。

刀を手放し、鬼の爪が喉元に届く瞬間一人の少女が俺を救ってくれたのだ。その動きは淀みなく、同じ選別試験を受ける者とは思えない程力量が隔絶していた。

あの藍色の着物着た彼女はどうなっただろうか？

あの腕だ、鬼にやられるとは思えない。だが周囲を見渡しても彼女は居ない。

近くに居た同じ背格好の男に聞いてみる。

すると驚くべき事に彼も彼女に助けられたらしい。

「もしかして藍色の着物の女か？」

どうやら俺達の話聞いていたらしい一人の男。

その言葉を聞いた全員が注目する。

その瞬間誰もが同じ事を考えていることを俺は全員表情から理解してしまった。

(助けられたのは俺だけじゃ無い…?)

誰かが言った。

本来この試験はこんな人数が生き残れるものでは無い。

此処に居ない数人は彼女に辞退を進められ試験を諦めた者であり、実際に死んだ者は片手で数える程度と言うこと。

話を聞きながら俺は頭痛にも似たようなものを感じた。

そんな事が可能なのか？夜の山で視界さえ覚束ないのに一人所か十数人の者を助けながら鬼を刈るなんて…。

(そんな人間じゃない…)

藤の花の柵が開き、一人また帰って来る。

その者を最後に柵には鍵が掛けられた。つまりこの一人が最終選別最後の生き残りであるということの意味している。

日陰から現れたのは一人の少女。

「…うっ。」

それを見た誰かが僅かに呻く。だがその一人だけでは無い、多くの者がその姿を見て、動揺を隠せないでいた。

二人の少女に迎えられた彼女は身体の至る所に返り血を纏っている。見ている限り彼女に怪我らしい怪我は無い。つまりあれは全身が鬼の返り血であると言うことだ。

事実今この時にも朝日に晒され少しずつ血は消えていく。どす黒くなっていた着物はまたたく間に鮮やかな藍色を映した。

彼女が歩いて来ると既に居る者達は彼女から避ける様に周囲に散って行く。

彼女も原因が自分にあるのは分かっているらしく。気恥ずかしそうに「…あー。」と声をあげた。

「それではお話をさせて頂きます。」

二人の少女の話が始まった。

これから鬼殺隊士としての隊服を支給する為に体の寸法を測り、その後階級を刻むらしい。

階級は十段階あり上から甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸と続く。

「今現在皆様は一番下の癸でございませす。ですが八雲結様。」

「私？」と首を傾げたのは件の彼女だった。

「八雲様はこの選別試験において四十二体の鬼を討伐致しました。これは今までの試験では例がありません。今回の件に関してお館様より特例が下り、八雲様には己の階級が与えられます。」

「…嘘だろ。」「四十二…。」「信じられない。」

その桁違いの数に辺りがざわつくが二人の少女が一度手を叩くと水を打ったように静まりかえる。

彼女はよく分からない様子で礼をしていた。

刀は今日原材料となる玉鋼を選び、刀が出来るまでは十日から十五日程度の日数を要することのこと。

「それでは今から鎧鴉をつけさせて頂きます。」

俺達の上空を多くの鴉が舞いながら近付いてくる。中でも一際大

きな鴉が一番に彼女の肩にちよん、と乗る。

少女の肩に鴉を乗つける図は思う所があるが。肩の鴉を撫で、微笑む彼女は不思議と絵になっていた。

「鏝鴉は主に連絡用の鴉でございませう。」

「次に刀を造る鋼を選んで下さいませ。鬼を滅殺し、己の身を守る刀の鋼は御自分で選ぶのです。」

人数が多いだけに机には大小様々な鋼が置かれている。

そして誰もが彼女に一番を譲っていた。

彼女は周りに頭を下げながら鋼に近付くと、閃いた様に二人にこそこそと何かを話す。

「ええ、よろしいですよ。」

それから彼女は真剣な面持ちで二つの鋼を選び、次の採寸の為に去って行った。

何から何まで規格外であった彼女。きつと話に聞く柱と言う人達は彼女の様な者達がなるのであろう。

この時の俺はそう思い、それは数年後現実となる。

鬼との戦いが劇化したこの世代。生き残った者達に最も貢献した人物は誰かと聞けば多くの者が彼女の名を挙げる。

俺は数年で自分の力の限界を感じ、一線を退いたので彼女の噂を聞けども後にも先にも共に会ったのはこの一度きりだ。

だが俺は自信を持って誇らしげに話すのだ。

「俺は選別試験時から彼女「八雲結」を知っていてその素質に気付いていた」と。

## 第11話 刀の色

「今回は十五人も生き残ったのかい。うん、予想以上だ。中間報告でもしよとは思ったけど彼女はとても優秀な様だね。八雲結、君はどんな剣士になるのかな。」

産屋敷耀哉は屋敷にて鎧鴉からの返答を受け、その内容に柔らかに微笑んだ。

その試験内容から毎年合格人数は少数にまで絞られるが中間報告にて例年と比べて多くの候補者が残っている事実を知り、事情を聞けば其処には一人の少女が関わっていた。

彼女が最後まで残り、それに似合った成果を出せば相応の階級を授ける。そう考えた彼だがその判断は正しかったと思えた。

彼女は恐らく人角の人物で埋もれる人材では無い。

選別試験後に隊士に与えられる階級は最も下の癸だ。下の階級では色々と不都合も出るだろう。

だからある程度の立場がある階級で伸び伸びと動いた方が彼女にとって都合が良い筈だ。

現在の主力となる柱達も入隊当初から突出した物を持っていたが、その階級故に踏み止まる時期もあった。今後はその様な事が無い様に新人育成も考える必要がある。

もしかしたら彼女も彼等に準ずる活躍をするかも知れない。

予想では今後、鬼との戦いはより一層熾烈を極める。

その為にも有望な隊士の力は一人でも手を借りておきたい。

「彼女の成長が楽しみだね。」

連絡を寄越した鎧鴉を優しく撫でると肯定するようにその鴉は喉を鳴らした。

次第に見えなくなる視界。寿命も後何年も無いだろう。

今己の出来る最善策を最短で行わなくてはならない。

そして何としても私の代でこの連鎖を終わらせるのだ。

彼はこれからの戦いに思考を巡らす。

全ては鬼舞辻無惨を倒す為に。



着物は戦闘の際の破れや汚れで泣く泣く捨てる事になった。

服が無いので仕方無く試験終了時に貰った隊服を着て帰路に着く。採寸もびったりで通気性も素晴らしく大変着心地が良いのだがこの様な服を着た事が無い事と、鬼殺隊に入った実感が混ざり少々恥ずかしい。

「八雲結、無事に戻りました。」

照れながらも合格を伝えると鱗滝さんに私は泣きながら抱き締められた。

「…よく生きて戻った!!」

十三人。腕鬼が言った事を思い出す。

試験から家に戻ってくる筈の教え子達を待ち続け、少なくともその内十三人は戻って来なかった。

選別試験の間の鱗滝さんの心境は私には分からない。

帰る予定の日を過ぎても帰らない子達。

遅れて来る事を願いながらも内心諦めざるをえない現状。

それはきつと想像以上に辛い。

私は帰れなかった子達の方まで抱き合い。

「ただいま戻りました。」とその言葉を繰り返した。

その後鱗滝さんは約束通り素顔を見せてくれた。

素顔の下は私達の思い通りの優しい顔立ちだった。

鱗滝さんが言うには鬼殺隊の時に鬼にからかわれた名残だと。

もう外しても良いのではと思ったが断固として外すつもりはないらしい。

私達に見せた後はまた直ぐに面をつけ直してしまった。

その後何故隊服で帰って来たか理由を聞かれ「着る服が無い。」と素直に答えると鱗滝さんは何とも言えない声色で「お前と言う奴は…。」と苦笑いを浮かべていた。

鱗滝さんの刀を折った事に関しては「お前が生きて帰って来たのだからそれで十分だ。」と怒られる事は無かった。

選別試験も乗り越えた事で師弟の関係が厳格な物では無くなった。私達は鬼殺隊の刀が届くまでの日々を穏やかに過ごした。

何時までもそんな格好でいるわけにはいかない。と言う理由で鱗滝さんから新たな着物を頂いた。私の好きな藍色で鱗滝さん力作の粋な刺繍が入っている。

私は物心着いた時には祖父、祖母が居なかつたので鱗滝さんと居るとこんな感じなのかな、と思う。

失った家族の悲しみも鱗滝さんと居れば安らいだ。

この数日は本当に幸せだった。

まるで私達が本当の家族の様にも感じた。

この生活は長くは続かない。分かつてる。

私は鬼殺隊として覚悟を決め踏み出した。私の様な鬼の被害者を少しでも減らすために培った力で刀を振るうのだ。

鱗滝さんも育手としての仕事がある。私が巢立つのを届けたらまた次の教え子を受け持つかも知れない。

仮初めだとしてもこの生活は幸せだった。

鱗滝さんと共にした日々は本物でかけがえの無いものだ。

たがら戦える。今後の私の力になる。

これからの日々がどれだけ辛かろうと帰る場所が在ることはそれだけで私に安心感を与えてくれた。

十五日の日は覚悟を固めるには丁度良い期間だった。

そして最後の日の今日は門出を飾るには実に良い天気だ。

十五日後。風鈴の音と共に一人の男性が訪ねて来た。

「俺は鋼鐵塚という者だ。八雲結の刀を打ったせて貰った。」

無数の風鈴を付けた唐笠を被り、ひよつとこの面を着けた姿は何とも風変わりだった。

「八雲結です、よろしければ中へ。」

「お茶でも…」と言う私の声は聞こえないのか鋼鐵塚さんはその場で刀の入った木箱を下ろし説明を始める。

(…駄目だこの人。お前の話全く聞いて無いぞ。)  
彼でさえ流石にこの人の前では引き気味な様子だった。  
鋼鐵塚さんは私の返答も気にせず刀の説明を続ける。

曰く、刀の原料の砂鉄と鉍石は太陽に近い山で取れる物で日の光を  
吸収する鉄を使っているらしい。

「さあさあ刀を抜いてみな。日輪刀は別名色変わりの刀と言っ  
てな。持ち主によって色が変わりのさ。」

へえ、知らなかった。鱗滝さんから借りた刀が青色だったのもそ  
ういう理由があつたのかな。

「色によつて何か違いでもあるんですか?」

鱗滝さんが答える。

「日輪刀の色はその者の資質を表している。基本五流派にはそれぞ  
れの色があり、染まる色でその者がどの呼吸に適しているか判断する  
目安となる。それぞれの色は

炎の呼吸 赤色

水の呼吸 青色

風の呼吸 緑色

岩の呼吸 灰色

雷の呼吸 黄色

という具合だ。

純粋な単色以外にも他の色が出る事もある。

その場合はこの五色に似通つた色が資質となる。

資質と違う呼吸を扱う場合はその型は極める事が出来ないと言わ  
れておる。」

「成る程、ありがとうございます。」

始めに聞いて良かった。二つの呼吸を使う私達はそれぞれ違う発  
色をするかも知れない。

「刀は注文通り出来ていますか?」

「当たり前よ。注文通り《二本》お前さんが以前使っていた物より少  
し長めと短めのを打たせて貰つたぜ。」

そう、私は最終選別の鋼選びの時に二つを選ばせて貰い、長さの調

節もお願いした。

短めのは私の水の呼吸用、取り回しがしやすく小回りが訊くように短めに。

長いのは彼の雷の呼吸用、威力と範囲を求めて長めに。

以前と比べ長さが急に変わると苦労するので僅かな変化に止めたが使い心地を確かめてゆくゆくは再度調節するつもりだ。

「では…。」

短めの刀を握る。

柄を持った刀は下の方から刀身が鮮やかな藍色に染まる。

「…綺麗な藍色。」

「そうだろう、そうだろう！何せ俺が打った刀だ。綺麗じゃない筈がない!!」

高笑いする鋼鐵塚さんに背中をバシバシと叩かれる。痛い。

「良かったな鱗滝。こりゃあ見事な藍色だ、水の呼吸の適正ありだぜ。」

「そうだな。」と静かに答える鱗滝さん。面で顔は見えないが何処と無く嬉しそうに見える。

(それじゃ次は自分の番だな…。)

入れ代わり長めの刀を持つ。刀身は柄から目映い程の白銀に変わり、遅れて金の輪の模様が連なる様に複数現れた。

(…凄い綺麗。)

「ツツ…!!」

「…。」

色の変化に二人は言葉を失い、完全に変わるまで見続ける。

「…驚いた。一人で複数の色が出た事にもびっくりだが、こんな色俺は見たことが無い。鱗滝こいつは一体何者だ？」

「自慢の教え子じゃ。類い希なる才を有しておる、少々特別な事情もあってな。色はその辺りから来ているのであろう。」

鋼鐵塚さんはまじまじと自分の刀を見て納得した後、刀の取り扱い、整備要領について丁寧に教えてくれた。

「大事に扱い、腕も上がれば刃こぼれ一つ無く、鬼を刈り続ける事が

出来る。だが…」

彼の纏う空気が変わる。今までの子供じみた態度は消えて、殺気にも似た異様なものが漂う。

「決して！決して！！俺の刀の刀を折るな、良いな？」

「…分かりました。」

素直に従っておこう。何か色々ヤバいかもこの人。

格好といい、態度といい、鬼殺隊の鍛冶士は皆こうなのか？

それとも自分の担当だけなのか…。

「帰つタ、帰つタヨ」

庭から羽音と共に一羽の鴉が窓枠に止まる。

鴉にしては大きめの体軀で鎧鴉としての教育がされており大変賢く人の言葉を話す。

(…カー助だ。)

「カー助か。」

カーカー鳴くからカー助。

珍しく二人の意見が合い、名付けで戦いは起きなかつた。

「命令ガキマシタ。東ノ方角、町二向カウ。鬼の目撃情報。」

どうやらこれが初任務の様だ。

刀二つを腰に構え、旅支度を整える。

「それでは行つてきます。鱗滝さん、鋼鐵塚さん本当にありがとうございました。」

「刀を大事にしてくれよ。くれぐれも…」

「体を大事にな。初任務、くれぐれも気を付けるのだぞ。」

正反対の二人を背にカー助の差す東へと向かう。

これが自分達の初任務だ。

既に現地では嘗ての自分達の様子に鬼の脅威に苦しむ人が居るかも知れない。

あの時カナエさんやしのぶさん達に救われた様に今度は自分達を救う番だ。

出来る事はまだ少ないが確実に一つ一つ階段を登り強くなろう。

それはきつとこの国だけで無く世界そのものを救う事にも繋がる。

(…ようやくだね。)

「ああ、これからだ。」

太陽が差す中、東へと進む。

鬼殺隊士としての道のりが漸く始まった。

## 第12話 休養

鬼殺隊の仕事は意外と地味。というのがこの数カ月任務について思った素直な感想だ。

鬼殺隊。その数およそ数百名。古くから存在しているらしく鬼を狩る為今日も誰かが刀を振るっている。

この組織を率いている長が誰なのかは一般隊士には分からず階級の高い一部の者のみ謁見を許されるという。

政府非公認の部隊らしく公に活動する事は良しとはされておらず行動の際には常に制限が伴った。

例えば鬼を屠る為の日輪刀はこの時代の一般人が帯刀を許されない事から警察に捕まる対象となる。

鬼を殺す事だつて端から見れば殺人と変わらない。

鬼の認知度は度々起こる事件の割には驚く程に低く、大衆の前での鬼殺は周囲を巻き込むだけで無く自分自身すら危うくなる危険性を秘めている。

必然的に個人での鬼の搜索は難しく、聞き取りで鬼なんて単語を出した時には奇怪な目を向けられ通報される恐れがあるので必然的に慎重に為らざるを得ず、変わった事、不審な事を聞いて回る探偵の様な事をする必要があった。

鬼の出没情報は鬼殺隊の組織上級者が収集し、鎧鴉を通じてそれぞれの力量に合った隊士、部隊へと振り分けられる。たがこれは確実に無く一般隊士は謂わば斥候の様な扱いだ。並みの鬼と見積り送った隊士達が上位の鬼と遭遇し全滅したなんて話をこの期間に幾度となく耳にした。

並の鬼なら数人を、上位の鬼なら部隊を、十二鬼月に名を連ねる鬼ならば鬼殺隊の最高位の階級である柱の人達が赴くという。

お世話になった蝶屋敷の主であるカナエさんはその柱の一人であり、この話を聞いた時は驚くと共に彼女の様に尊敬を集め、徳の高い人ならばその位に居ても可笑しく無いと変な納得を感じた。

ちなみに自分は選別試験にて己の階級を頂き、数ヶ月間の任務功績で丙まで階級が上がっている。

この短期間でここまで階級を上げた者は例が無いらしく、名前までは広まって無いものの噂が立っていた。照れくさい反面自分の力は努力だけで培ったものでは無いので少々複雑な気持ちだ。

鬼殺隊の任務について説明したいと思う。

先程話した通り鬼の出没情報は上が整理し、それぞれの隊士に力量毎に振り分け鎧烏を通じ命令を下達する。

だが、個人に対してだけでなく討伐の可能性を上げる為、その近辺に存在する複数の隊士に命令が下る。

鬼を討伐した時の階級、報奨金等の恩恵は一部の共闘を除き倒した者のみ与えられるので必然的に早い者勝ちの構図となってしまうている。

基本は鬼を滅ぼし人々が笑い合う世界にすることを理想とする鬼殺隊、誰かが鬼を倒した事を己の様に喜び次の任務に向かう者も居るが中には討伐報酬を得たいが為、規律違反ギリギリの事を行う輩も少なからず存在した。隊士間の虚偽情報の共有、妨害、下の階級が受けた任務の横取り等、e t c . . .

今の所自分は受けた事は無いが同じ隊員間でも気を抜くことが出来ないのは少々問題だと感じる。

鬼殺隊の給与は驚く程に高く自分の初めの己の階級でも数年貯めれば生涯生きていくだけの金が貰えた。任務の為に衣食住に困らない配慮と命を掛けての鬼殺への報酬なのだろう。

金目当てで鬼殺隊に入った者も居ると言うが問題を起こしているのはその辺りの人種なのかも知れない。

自分は授けられた能力を生かし、任務を受けてから数刻で現地へと疾走し、五感、第六感、鬼が好んで狙うという稀血という自分の特性等全てを用いて鬼を討伐してきた。

一般には無茶とも思えるこの手段、月に平均一体の鬼殺隊士の討伐数を考えればこの短期間の自分の討伐数は十数体に上り、我ながら異

例と言われるのは納得な気がした。

鬼の強さはピンキりで自分の尺度の幅も狭く、どの程度が並みレベルなのかもまだ定まっていない。以前命令を受け倒したもので上級の鬼がおり、部隊を組んで挑む命令だったが人に害をなそうと行動しており現場の判断で単独戦闘を行い討伐した。近距離で高威力の血鬼術を扱い、少々手間取った記憶がある。

血鬼術を使う鬼は少ないが使う者は当然並の鬼より実力が勝り、搦め手や能力によるゴリ押しもまかり通る恐れがある。だからある程度力を持つ鬼に対しては能力持ちと仮定し、常に慎重に対応し、感覚を鋭くし無駄な反撃を喰らわぬよう確実に討伐してきた。

鬼は基本人を喰った数で力を増していき必然的に年数を生きた鬼程強く若い鬼は弱い。

一見して鬼が何年生きたか分からないと思うかも知れないが自分は人の姿からどれだけ離れているかが一つの尺度では無いかと感じた。

鬼としての年数が重むにつれ人だった時のものを忘れていき、次第にそれは姿に影響し、やがて言葉すら忘れていく、勿論個体による差もあるが余程特異な個体意外はこの例に当てはまると言えるだろう。

以前人としての姿が残る鬼の何体かに対話を持ちかけた事がある。もしかしたら人間としての自我や感情が残っており、争いを避ける事や何かしらの情報を聞き出せるのではないかと。

だが結果は望ましいものでは無く、今後他の鬼との対話も絶望的と思われるものだった。鬼と変わる過程で元の人格にも大きく影響を及ぼしてしまうのかどの鬼も攻撃的になっており、会話が成立せず殆どの鬼が人の殺傷に飢えていた。殺さず捉えた所で鬼が心を開く事など無く、残念だがこの方向からのアプローチは期待出来ない。

天使の言葉を思い出す。この世界に起きているこの鬼という異変、最悪世界そのものが無に帰す恐れがあり、何としてでも解決しなくてはならない。

だがこうして日々鬼殺隊士が鬼を狩り続けても鬼は増え続けその

勢いは留まる事を知らない。

十二鬼月という上級を越えた鬼を倒せば解決するのだろうか？倒してもまた他の鬼がその位に着くだけではないのか？

時折言い表せない不安が身体を渦巻き押し潰されそうになる。力を貰ったとはいえ、この広大な世界に広がる鬼達の前では矮小な存在でしかない。こうしている間にも人が鬼に襲われている恐れがある。

(うじうじ考えて無いで早く次の町へ行こ。次の町は聞いた所によると美味しい事で有名な団子屋があるらしいよ。最近では忙しくて寄る事も出来なかったから餡団子いっぱい食べようね。)

自分はみたらしの方が…と言う言葉を押し込める。

彼女は恐らく自分を気遣ったのだろう。考えだけでも自分達の繋がりには彼女も何かしらのものを感じ取ったのも知れない。

今の自分は数日おきに出身地方内を転々と旅している。

任務で得た金は路銀や美味しい店巡り、装備等に使い、普段は鏝鴉の連絡を待ちながら自分の足で聞き取りを行っていた。

最近では立て続けに鬼を狩る日々だったので暫くはこの町で休養するのも良いかも知れない。

藤の花の家紋の家という鬼殺隊に命を救われた一族が住み隊員ならば無料で休息できる場所があるのだが自分は余り使っていない。善意からくる心ばかりのもてなしが自分は逆に気を張ってしまう。こちらにも鬼殺隊として接しなければならぬので任務前の非常時、鬼殺前の宿がどうしても必要な時に利用させて貰っている。

遠目に見えてきた町はある程度栄えているのが確認でき、宿泊にも困らなそうだ。久々に羽を伸ばすしよう。

確かに先はまだ不安が多い、でも自分達は一步一步進んでいる。それは決して大きくないかも知れないがいつかは長い距離となる。今出来る事を確実に言い積み重ねていこう。

鏝鴉のカー助からも任務に関しての命令も無く、休養は確定的だ。思えば鬼殺隊に入ってから棍を詰めすぎていたかも知れない。たまには肩の荷を下ろし、のんびりする事にしよう。

初めての鬼の遭遇から一年と数ヶ月、現階級丙、鬼の討伐数計六十を数え間もないある日の事。

八雲唯は十二鬼月下弦の壺と交戦する。

## 第13話 疑惑

「おばちゃん餡団子おかわりー！」

私の声に茶屋の奥で団子を焼く老夫婦が応える。

店内には甘い香りが漂い、辺りを見渡せば私と同じような歳の頃の少女、若い夫婦、老人など多種多様な人が団子や抹茶、汁粉等に舌鼓を打っている。

時はまだ昼頃、私達は件の団子屋んの席に座り、街を行き交う人々を眺めながらのんびりと団子を頂いていた。

（うん！やっぱ餡団子は美味しいなあ。お抹茶も質の良い葉を使ってるみたいだしこれなら幾らでも食べれるよ。）

（確かに美味しいが、自分で食べてないのに味を感じるのはやっぱ変な感じだな。ってかそろそろ代わってくれ、みたらしが食べたいんだみたらしを。）

人格は二つ、身体は一つ、それが今の私達だ。

初めは確かに思う事もあったけど彼が居なければどうに私は殺されてる。

両親を殺され、あの時何も出来なかった私に彼は救いの手を差し伸べてくれた。

お陰で仇を打つ事ができ、今もこうして美味しい物を食べる事が出来る。感謝すれども恨む事など無い。

この鬼殺の道に進む事だって私自身望んだものだし、今の生活にもそこそこ満足している。鬼との戦いは厳しくとも彼と共になら戦い続けていける気がする。

でも私は良くとも彼はどうかだろうか？

あの時、二人が一人となったその瞬間に彼から流れてきたものは未だに信じ難いものばかりだった。

此処によく似た、でも此処とは違う世界。そのおよそ百年先の未来は遠くの人との会話を可能にし、空を飛び他の国へと渡る事も出来る、そして天使の存在。

その言葉が正しければ近い未来この世界そのものが滅ぶということ。

恐らく鬼の存在による所が大きいと私は感じている。私自身夢物語と思っていたし、彼の世界にも存在しなかった事から多分この予想は間違っていない。

天使が言っていたこの世界のズレ。それを正さなければ私に未来は訪れない。だから鬼という存在を消す。その一心で私は鬼殺隊になった。

そして彼はそんな私に力を貸してくれると言った。

記憶の中の彼は常に闘いの日々だった。病気だったらしく、床に伏せながらも必死に抗う彼の姿が私の頭から離れない。

此方の世界に来る時、彼はどう思ったのだろうか。元の世界には二度と戻れず、見知らぬ人、しかも異性の身体に精神を宿す。移動した先も危険があり、想像も予想もつかない環境に身を置く事になる。

それでも、誰かの身体を得ても成し得たい事があったのか、ただ純粹に死を待つ自身から遠ざけたかったのか。今でもそれは分からない。

私は未だに彼に聞けずについて、恐らく今後も聞く事は無い。

聞いたら今までの関係が変わる。そんなムズムズとした確信めいたものを感じながら、けれども私はそれで良いと思った。

誰もが心には人に言えないものを抱え生きている。私だってそう。この一つの身体を共有し、ある程度の感情さえ相互理解できる状態であってもそれは変わらない。相手の心の中に手を伸ばす必要は無く、薄皮の様な、膜の様な物で互いを区切る。私達にはそれくらいで十分だ。

今は全力で楽しみ、壁を乗り越えていこう。鬼との闘いは大変だけど彼と二人一緒なら問題ない。そしていつか彼の心の中で整理が付いたら言える範囲で言ってくれば良い。たがら今は……。

(…だから今は私が餡団子をお腹いっぱい食べる事にする。それで良いよね。)

(…えい!? まるで意味分からん! みたらしは?)

(また今度!!)

(……理不尽すぎるだろ。)

彼は拗ねて一時間口を聞いてくれなかった。



(…夕飯はこっちが選ぶぞ。良いな?)

(あはは、ごめんごめん。好きに選んで。)

先程彼女がたらふく団子を食べたお陰で当分腹は持つ。

なのでそれまでの間は腹ごなしに街を散策しつつ夕飯をとる店を探すこととなった。

(それにしても凄い人混みだね。こんなに人がいるなんて)

(確かに、久しくこの人数は見てなかったな。)

前世と比べると大したことない規模。だがこの世界の中ではある程度発展している街を歩きながら目ぼしい飲食店を探していく。

寿司、蕎麦、焼魚、鶏飯、等百年前という事で余り期待してなかったが思いの他良い店が並んでいる。和食が好きな自分としては昔の店という非日常も相まって徐々に気分が高揚していくのを感じる。

(…やっぱ肉が食べたいよなあ)

(はんばあぐとか言うあれ?確かに貴方の記憶の中で見たものは美味しそうだったね)

(まあ確かにそうだがこの時代にはまだ西洋の食事文化はまだ少ないからその辺は期待出来ないな)

彼女が見た記憶と言うのは恐らく幼少期に母が作ってくれたあの時のものかも知れない。

まだ自分が健康で普通に暮らす事が出来ていた時、母は自分が好きな事もあって良く作ってくれていた。その後は病が発覚し、食事にも制限があったから好きな物を食べる頻度も減ってしまった。だからある意味好きな物を食べれるというこの状況は初めての経験でなかなか興奮する状況なのだ。

「さあ何処に決めておこうかなつと……痛ッ」

左右に広がる店に気を取られて前方に立ち止まる人にぶつかってしまう。慌てて謝るがその人は大して気にもせず正面を見続けている。

(ん、なんだろう？人混みが出来てるみたいだね。)

十数人程の人がある店の前で立ち止まっていた。人の隙間から覗くとどうやら揉め事のように三人の大人の男が一組の夫婦に言い寄っていた。

どうやら店の主らしい旦那は妻を庇う様に正面に立っているが体格には乏しく争い事には向いてなさそうだ。逆に相手の三人の男達は周辺の街人と比較しても頭一つ大きく体格にも優れていて荒事向けに見えた。

初めは話だけであつたそれは旦那の言葉に業を煮やした男により手が振るわれ店の入口の看板を巻き込みながら旦那が吹き飛ばされた。

旦那は額から血を流し、妻はそんな旦那に駆け寄る。そんな光景に周囲の街人の数人からくぐもつた声が洩れた。だが、誰もが助けに行くことは無い、そんな周囲を見てにやけた男達が再び旦那に詰め寄り襟首を掴んだ。

「止めてくださいッ！」

妻が駆け寄る。必死なのだろう、膝の震えは此方からも確認出来る程でそれでも旦那の為に己を鼓舞して男に言い寄る。

「しっけえな!!お前らは聞く事だけに応えてれば良いんだよ!!」

(……ッ!)

バチン、と同時に頬を叩かれる嫌な音が響き、周囲の街人が目線を逸らす。叩かれた妻は痛みか己の無力感か蹲まり、嗚咽を溢すだけとなつてしまった。

(…酷い)

彼女からの心の声が流れた。

「顔の形が変わる前にさっさと吐いちゃまった方がお前達の為だぞ。

まあ直ぐに言っても何発かは食れてやるがなあ」

男達は顔をにやけさせ、街人達はこの後に起こる悲惨な光景を思い、顔を歪ませた。

「ツツツ!!」

旦那がこの後に来る痛みには耐える為身構えるのを横目に自分は拳を振り下ろす男の腕を寸前の所で掴み、止める。

「昼間っから大の大人が数人がかりでこんなこと、恥ずかしくないのかお前達。」

ある程度距離があり、人混みを縫う形となつたので技を使って近迫する。移動の余波で風が巻き上がり、砂煙が上がった。

「何だ!? てめえ…!」

いきなり現れた事に驚く男だが自分が彼らより背丈の小さな少女だと分かると腕力に物を言わせ振り払おうとする。

「ツ痛え!」

生憎こちらの力は特別で鬼ならともかく人の身では並大抵の事では外せない。腕を掴む力を少し上げると男は顔を歪め、後方に仰け反る。それに合わせて手を離してやった。

男三人に対し、夫婦に近付けさせないよう間に立つ。今ので自分が只の少女では無いと分かった様で男三人が気を張り身構え、此方を睨んだ。

(ん……?)

街人のチンピラと思つたけど、やけに動き、構えに無駄が無い。羽織を着けているのも見た目だけでは無い様に見える。

「お前達もしかして『同業者』か?」

自分の声に男達が反応する。どうやら凶星らしい、目眩に似たものを感じながらも怒りが沸々と湧いてくる。

「…人々を守る為の隊士がなんでこんな所で恐喝なんて事をしてるんだ。」

確かに隊の中では己の利の為に手段を問わない隊士が居る話を聞いた事はあるがここまでとは思わなかった。表に出てないだけでこんな輩はまだ存在するのだろうか。

「てめえに言う筋合いは無え。ってか人様の仕事にケチつけるとは

何様だ？事と次第によつちやあ只じゃおかねえぞ！」

男はジロリ、と自分を舐め回す様に見える。その仕草、行動に生理的嫌悪感が募る。

「見た所新人の癩くらいだろうなあ。俺は階級戊。部隊を率いてる者だ。お前の顔立ちは悪くねえな。俺達に先程の行為を詫びて頭を下げ、献身するなら今後生き抜く為の指導を……」

男は反省する素振りすら無く、続きを聞きたくも無かったので懐に潜り込み腹に一撃を食らわせる。男は後方の二人を巻き込みながら吹き飛び道路に大の字で倒れた。

「生憎あんた等みたいなの連中とは会話をするのも御免だ。此方は階級丙、立場としても人としてもあんた等を認める訳にはいかない。」

男は驚愕の顔で此方を見た後、痛みの為そのまま失神する。それらの一連を見ていた街民は暫しの沈黙の後、ざわざわと声を上げ、そしてそれは安堵と歓喜の声に変わった。

「よっ！姉ちゃんなかなかの大立ち回りだね！」

「お姉さん格好良い!!」

(只同業者があんなだったから飛び込んだけど結構面倒な事になったかもな。)

拍手を浴びる中、膝を着く夫婦に駆け寄る。二人とも外傷は少なく、それ程問題は無さそうだ。

「ありがとうございます！何とお礼を言ったら良いか……」

「いえいえ、先程の行いは流石に目に余るものがあつたので。…所あの三人は貴方達に何の目的が合つたのですか？」

「それは……」と話そうとする旦那を妻が静止させる。会話の中の囁かな動作。だがそれが寧ろ自分の意識を傾けさせた、その時。

ドクン！

(ツツツ！)

自分の身体がそれに反応する。彼女も気付いた様だ。

今までの流れで自分自身意識する間も無かつたし、このまま普通に会話が終われば分かる事も無かつた。

元々この感覚に対してはそこまで鋭いと言う訳でも無く、一つと器

官として補助程度に使っていたくらいだ。ただ、今の何気無い夫婦のやり取りに緊張が解け、感覚が鋭くなった時に近付いた事で『それ』に気付いた。

出来れば気のせいであって欲しかったが改めて感じても『それ』に変わりはない。

「抗争があつたのは何処ですか！」

遠くて警邏中であろう警察の近付く声が聞こえる。誰かが通報したのだろうか。

どのみち今は此処に居て得は無い。自分は「夫婦に今後も気をつけるように」と伝え、夫婦は再度お礼を言った。

警察が来る前に人混みを使ってその場から立ち去る。先程の隊士はある程度警察から罰があるだろうが自分には関係ない。しかも上着で隠してるとは言え現在帯刀の身だ。厄介事にしなければならない。だが……

「……結。気付いたか？」

(…うん。間違いないね。)

夫婦から感じたのは鬼の匂い。それも昨日今日の付いたものだ。

「夜に再度向かおう。」

どうか何かの間違いであって欲しい。そんなモヤモヤとした物を抱えながら昼間の街を歩き続けた。

## 第14話 鬼と人

「…今回は嫌な仕事になりそうだな。」  
(…うん。)

時は夕暮。自分達は昼間の夫婦の事について聞き込みを行ったが内容をまとめて二人で出した答えはあの夫婦は『黒の可能性が高い』という事だった。

噂については下の通り、関係あるものをまとめて時系列順に並べると…

① 二人の間には幼い子供がいたがその子は病弱で外に出る事さえ厳しいものだった。

② 二週間程前、その子の体調が悪化した時の夫婦の顔色はそれは酷いものだったらしく周囲の人も夫婦の様子からももう長くないと感じていた。

③ 一週間前にその子が亡くなったと噂が流れた。墓は街外れの墓地に建てられたという。

④ 夫婦の様子はそれまでの様子と打って変わり明るいものとなった。周囲はギョとしたが店を見るにいつも通りの様子。

⑤ 最近夜の墓で人の叫び声が聞こえるという。街の子供達は怯えていたが大人達は良い機会と捉え、夜に出ると亡者に攫われる。と都合の良い噂で子供達を教育しているらしい

といった所だろうか。

先が短い子供の前に鬼の関係者が現れ子供を鬼にした。夫婦はそれを隠す為、子供を死んだ事にして街外れに墓を建て、そこに子供を匿ったとみるのが普通だろう。

鬼を狩った回数も増え、自分もそれなりの経験を積んできたがその中でもやりにく仕事というのも少なからず存在した。

強い鬼は純粹に闘い辛いし、逃げる鬼はそもそも闘い自体が成立しない。闇夜の中を追い掛け続けるのは骨が折れ、反撃を考えると気を抜く事も許されない。自分の見の丈を知らず無鉄砲に攻めてくる鬼

なら楽なのだが鬼狩りは基本高い頻度で泥臭い闘いになる。

そしてその中でも心に負担が掛かるのは身内が鬼で庇っている場合や鬼が子供の場合だ。

前者は相手に人間が居るだけに事後処理や遺恨が残らない様に立ち回る必要があるし、後者は印象最悪だ。泣き叫ぶ鬼を追い詰め首を斬るなどやらなければならぬ事とはいえ精神衛生上非常によろしく無い。

そして今回予想されるのがその二つが重複したパターンだ。当然嫌な気にもなる。溜息の数は増え、夕食は喉を通らなかつた。

今の夫婦と子の関係はいずれ破綻する。まだ消息不明者が出ていない事から恐らく両親は自分の血肉を子に与えているのだろう。子供の意識がどの程度傾いているのか分からないが人の血肉の味を覚えた段階で空腹により街人を襲うのは時間の問題と見る。

子供は近い内に理性を失い、両親を手にかける。そんな結末にしない為にも自分達は刀を振るおう。両親に恨まれ憎まれてもそれで負の連鎖を断ち切れるのなら喜んで嫌われ役に徹しよう。

両親の経営する店を見張ること数刻、日の変わる頃に動きはあった。

店の裏手口から提灯を手には夫婦は現れ、周囲を計画しながら人気の無い道を使い街の都心部から離れていく。そして半刻の時間を用いて夫婦は街外れの墓地の一角へと辿り着いた。

自分はそこから数百は離れた藪の中から観察する。夜目は効くので気配を殺せば鬼殺の隊員さえ尾行に気付くことは難しいだろう。

両親は子供の墓であろう場所まで来ると墓石を二人がかりで動かした。下には小さな空間があるようで中から両手両足を縛られ猿轡をされた子供が現れた。既に意識は鬼に傾いている様で両親は必死に呼び掛けて正気に戻そうとしている。

「ぐうううあああ!!」

猿轡を外した子供が叫び出す。両親の声には無反応で拘束されている事に怒りを現し抵抗している。父親は制しているのがやつこの様で後ろから羽交い締めにして呼び掛けて続いていた。

「お願い目を覚まして！……これならッ！」

母親が自身の手には包丁を当て血を流す。その雫を子供に口に落とし飲ませていた。子供は一度静かにその血を飲むが口が乾かぬ内にまた叫び声をあげた。

「……ごめん。ごめんなあ、こんなはずじゃなかったのに……」

両親が涙を流す光景に胸が痛む。最早子供に人としての意識は無く拘束を解けば人を襲う事は目に見えていた。

「……結。準備はいいか？」

(………)

彼女の無言を肯定とし、鬼を狩るべく腰の刀を露わにしようとした瞬間それは起きた。昼間の鬼殺隊の三人が両親の側に現れ、二人の腹部に蹴りを放った。

「な、何を!?ぐああ!!」

相当な威力なものを受けたようで蹴られた二人はその場で疼くまじり動けなる。

(………ッ!!)

彼女の動揺が伝わってくる。

確かに鬼殺にあたってあの二人は弊害となるが一般人に対してはあの威力は過剰過ぎる。鬼殺隊士はその後二人を数度足蹴にしなから唾を吐きかけた。

「鬼を匿うとはとんだイカれ野郎だな。こいつを殺した後でお前達にもたつぷり罪を償わせてやるからな。」

隊士は動けなくなった二人を横目に三人で子供の鬼を囲んだ。それぞれが刀を抜き、今にも首を切り捨てる勢いである。

「結。落ち着け、奴らはやる事さえ鬼畜な下衆の類だが両親にも非が無かった訳ではない。流石に後に残る怪我さえ無ければ奴らの所業はある意味正しい所もある。」

(……分かってる。わかってるよ……けど)

「このままで良いの?」と彼女は言った。思う所はある、だがどうすれば良いのかその具体的な答えが出せない。

「ぐぎやああああ!!」

鬼の子の悲鳴で我に返る。

「……嘘だろ。」

三人が子供に拘束があるのを良い事に両手足、腹、腰、肩、顔に至るまで刀で傷を与えてその反応を見て楽しんでいた。

どう見ても鬼殺には関係無い。全く。

剥き出しの頸を斬らず、敢えて痛みの多い身体の部位を裂き、斬り、突き刺し、その度に上げる悲鳴を聞きながら隊士は愉悦に口元を歪めていた。

「ッ……。止めて下さい！ぐあ!!？」

「うるせえんだよ!!」

身体を地面に引きずりながらも止めようとした両親を再度隊士が蹴りを放つ。父親の方は顔面に受けた様で白い歯が数本コロン、と抜け落ちるのが見えた。

「鬼なんてこの世にいやいやいけねえ存在なんだよ！こいつ等は居るだけで周囲に害を成す。俺達は全員家族や友人を鬼によって失った。だから今度は俺達が鬼から奪いとるんだ。尊厳も命もだ。力がある者が全てなんだよ！」

男の瞳からは何も感じる事は無かった。喜びも悲しみも怒りも。彼らは復讐心に取り込まれ最早狂気にも似た何かを自分は感じた。

「反撃しないなら好都合、俺達の気分が晴れるまでこの鬼には的になってもらう。お前達もだ、命は取らないまでも鬼に味方したその罪は身体を以って払って貰う。五体満足で日の元を歩けると思うなよ？」

最早母親に関しては抵抗も出来ず成すが儘になっている。父親は子を守れず抵抗も出来ない現実の声を上上げて泣いていた。

「があうう……。お、お父さん。…お母さん。」

両親の悲鳴が心に届いたのか人としての意識が戻り鬼の子供が言葉を話した。だが彼も縛られており、現実が変わる事は無い。それでも意識を取り戻した事に両親は痛みの中安堵し、子に手を伸ばす。

「こいつ。生意気に人の言葉を話すぞ！口と舌を切り刻め!!」

父親の手を踏みつけながら隊士の男が刀を振る。断末魔の叫びが

数秒、自分の耳に流れ込んで来た。

鬼は人を襲う。それは変えようの無い事実だ。容姿は醜く、残忍で卑劣、人の血肉を好み、人の悲鳴に歓喜する。

「……これじゃどちらが鬼なのかさえ分からない。」

刀を抜き、現場に駆け付けたのはそれから数秒後の事、胸の中に酷くベタベタした、居心地の悪い靄の様な物を抱えながら自分は夜の山道を現場を鎮めるべく滑走していった。



鬼の悲鳴を全身に浴びながら恍惚めいたものを男は感じていた。

彼は以前人の為に笑い、泣ける善良な市民であったが五年前に最愛の妻と娘を鬼によって失ってから生活は一変した。

酒に溺れ、家族の遺品を抱き、嘗ての生活を思い出す日々。そんな時に鬼殺隊の存在を知り、刀を握った事は幸だったのか不幸だったのか今となつては分からない。

鬼を狩る日々は荒んだ心を繋ぎ止め。仲間と呼べる者達も増えた、階級が上がり自分を慕ってくれる者達も表れ、幾ばくかの心平穏を手に入れた男は気が付けば小部隊ながらも部隊を率いるまでになっていた。

そして、とある鬼と闘った。

下弦の鬼だった。闇夜で気付くのが遅れ部下数人の命が散った。必死に態勢を立て直し、男は闘った。相手は十二鬼月だが肉体強化程度の血鬼術で討伐は可能な筈だったのだ。明暗を分けたのは部下数人が作ってくれた隙に自分が乗じようとした時であった。

このままいけば鬼の頸が斬れる。だがその後自分にも僅かな隙が出来てしまう。そこをこの鬼が見逃す筈が無く、自分は死ぬ。仲間も大部分が負傷していて同じ好機は二度は訪れそうもない。

残った仲間の命か、自分の命のどちらか。

気が付けば男は仲間を捨て置き逃げていた。遠い噂で自分を失った部隊はあれからも闘い自分を除いた全員が殉職したと聞いた。

男はその後も鬼を狩り続けた。

心は荒み、罪悪感に支配され心は泥々であったが鬼と闘う為に身を捧げている間は気が休まるというある種の破滅願望に似た何かを感じていた。

その日闘ったのは相手は若い女の鬼だった。鬼に成りたてなのか力は弱く直ぐに無力化出来た。涙を流し、美しい顔を歪めて自分に懇願する鬼に男のとある感情が支配される。

ヒュンと、白くて玉の様な足に刀を振るう。鬼の悲鳴が響き渡り、真紅の鮮血が飛び散る。

ゾクリ

もう一度肩に振るえば嗚咽も漏らし、泣き叫び、鬼は震える体で三指を着いて男に頭を下げた。

ゾクリ、ゾクリ

恍惚の感情が男の脳を支配する。あの鬼が自分に頭を垂れている。家族を奪い、部隊を奪ったあの鬼がだ。力関係は明白であり、鬼は若く、美しい。自分の一挙手一投足で鬼は意のままに好き放題だ。奴は俺の手の上に命を握られている。なんて…

なんて気持ちが良いのだろう。

彼女の命、尊厳の全ての尽くを卑下し、彼女が遂に己の消滅を願ったからもそれは数刻続き、男の暴虐は朝の日の光によつて鬼が焼け死ぬまで続いた。

結局は復讐に心支配され鬼を狩り続け、仲間を捨てた段階で人としての心は失ってしまったのであろう。

だが最早どうでも良い、この時この瞬間にも自分の心はこんなにも満たされているのだから。

日の光に照らされた男は自身に訪れた福音めいたものを感じながらも自分の本性を知れた喜びに打ち震えた。

## 第15話 下弦の壱

地獄の惨劇は一人の少女によって止められた。

瞬きもせぬ内に彼女は現れ、手に持つ一振りの刀で鬼殺隊士三人の持つ刀を弾き飛ばした。峰打ちによる打撃だが威力、打撃箇所は的確であり暫くは刀を握る事さえ厳しいだろう。

「ツツ！痛え!!」

「…ぐっ、腕が！」

他の二名が腕を抑えて呻く中。リーダー格の男はまだ戦意を喪失せずに少女を睨み付ける。

「お前昼間の小娘だな。何をしに来た!?!」

「別に…。お前達のやる事に文句があるだけだ。」

「文句だあ？俺達は鬼殺隊だぞ？鬼を斬る事に何の異議が…ツ痛!?!」

言葉を言い切らぬ内に男の顔に小さな袋が投げつけられる。小銭入れ。音を見るにそれなりの額が入っているようで男は走る痛み顔に顔を歪めた。

「この鬼は俺が狩る。その中には今回の討伐報酬以上の金が入っている。討伐はお前達がやった事にして良い。…良いな？」

「良い訳あるか！俺達が追い詰めた獲物だぞ。俺達に倒させ…ツがあ!!」

またも続く言葉を少女は腹部への掌底により黙らせた。男は胃の中を撒き散らしながら側にあつた墓石に手を付くことで姿勢を保つ。

「生憎お前達と話す事は何も無い。お前は先程言ったな。「力がある者が全て」と、今回は俺に従ってもらおうぞ。」

男は憤怒に顔を歪めながら手にした小袋に目を移す。少額に見えるが中には最高の価値がある金貨が数枚。予想を上回る金、それも相当な額が入っており、男の溜飲が僅かに下がった。

(これだけあれば相当遊んで暮らせる。飯も女も住む場所も当分思いのままで。)

「おい、お前ら此処は下がるぞ。」

男二人は不満を口にするが強引に黙らせる。相手は一見小娘にしか見えないが一連の動きを見るにかなりと使い手と見る。何故こんな馬鹿な事をするかも不明だが、目の前に大量の金があり、彼女の気分が変わらぬ内に下がろうとする。

「此処は下がる事にする。たがお前：覚えていろよ。」

「……………」

脅し言葉にも何一つの変化も見せぬ少女に男は苛立ちながらも後方へ下がる。そしてある程度移動し、少女の警戒から抜けたと感じた瞬間。

（素直に聞く訳ねえだろ！お前もいたぶって残りの金も俺の物だ！！）

痛みで痺れていない方の手で腰に差した脇差を少女に投げつける。背中目掛けての投擲であり、回避は不能の筈であった。

「…馬鹿な奴等。」

少女は僅かに身を捻ると空いている片方の手で脇差を苦も無く掴む。そして元の場所へと軽い動作で投擲した。

「へ……………？ぐわあ！！」

瞬間。凄まじい速度で脇差は飛来し寸分変わらず男の左手に突き刺さる。男のは悲鳴を上げながらも二人の補助を受けながら森の中へと逃げ帰っていった。

そして残った鬼を横目に夫婦へと視線を移す。

「大丈夫ですか。」

先程とは違う優しい声に夫婦は戸惑うが暫くすると彼女の手を借りながら夫婦は何とか立つ事が出来た。

「一体何とお礼を申したら良いか…。」

「いえ、お構い無く。」

夫婦の礼に少女は歯切れ悪く答え。少々戸惑う様に考えながらそれを口に来た。

「息子さん。鬼ですよね？残念ですが彼はこの場にて殺さなければなりません。最後の挨拶をお願いします。」



「…くそお。痛え、痛えよ！」

「大丈夫ですか隊長？もうすぐ森は抜けませぬ。」

男は左手の傷を庇いながら夜の道を歩いていた。止血と呼吸により大事には至らなかつたがその痛みは男の神経を逆撫でする。

久々の獲物であつたが昼間の少女によりお楽しみ時間がぶち壊され、ある程度の小金は手に入ったものの男のプライドはズタズタだつた。

（ちくしょう。あの小娘覚えていやがれ…。）

少女の事を思い出す度に男はギリギリと歯を軋ませその顔を歪めた。

（この二人も使えねえ。あんな奴にやられた後もヘラヘラと…。金を分けるのも面倒だ。此処で切り捨てるか。）

男は利き手の握り具合を確認する。少女の顔は覚えた。今は無理だが人数を揃えれば勝てない相手では無い。顔は整っているから復讐した後は好きにして良いともなればそれなりの数は揃う筈。

まずはこの二人を始末しよう。そう考えた時だつた。

「…ガッ!？」

「ぐえ…」

前方の二人が歩みを止めた。その時発した二人の声に疑問を持ちつつも男は疑問に思いながらも歩みを止める。

「枝にでもぶつかつたのか？こんなところで巫山戯てる場合じゃ…」

ゴロン。と遅れて来た音に男は顔を下に向ける。闇夜で見にくい丁度毬の様な大きさの玉が二つ。

「…へ？」

それは何時も見慣れた部下二人の顔だつた。気付いた瞬間前に立っていた身体は音を立てて崩れる。

「なんじやこりゃああ!!」

男は絶叫を上げながらも原因があると予想される正面を見る。鬼

の可能性を考え刀を抜刀し、正面に構える。

それは正面に『居た』。正面三間程の距離に存在した『それ』は初めは木と見間違う程の巨体で逆に鬼だと認識出来なかった。

それがドスン、地響きと共に近付いてくる。大きい、自分より遙かに。高さは八尺はあるだろうか、全身に甲冑を纏った巨体な鬼が自身へと向かって来ている。

「お前か、よくも俺の部下をやつて………へ？」

言葉が続く前に男の両腕が同時に切り捨てられる。鮮血が舞い、男が絶叫する。腕は刀を掴んだまま地面に無造作に転がっていた。

「ぎゃあああ!!腕!俺の腕がああ!!」

疼くまり必死に腕を拾おうとする男。鬼はそんな男を見下しながら煩わしそうに腕を一度振るつた。

ピタリ、と悲鳴は止み、静寂が訪れる。

鬼は男達が来た方を見ると何かを感じた様にまたドスン、と地響きを立てながらその方向へと進んでいった。



「…冗談ですよね？」

「いえ、言葉の通りです。お子さんは鬼であり人の血の味を覚えた、最早一刻の猶予もありません。ご覚悟お願い致します。」

夫婦は顔面蒼白になり、わなわなと震える。いたたまれないが今回の様な最後を迎えるのなら相互に別れを告げさせ楽にさせた方が良いに決まっている。

「そんな…。もう少し時間を頂けませんか？」

「生憎ですが無理です。その子は心は最早鬼に傾いている。何時人を襲うか分からない状態です。」

「大丈夫です。拘束も今より増やしますし、血だつて夫婦で与えます。今よりも多く与えれば先程のような…」

夫の胸倉を掴み、片手で持ち上げる。

自分の所業にギリギリと心が締め付けられるが表情に出さず淡々と言葉を告げる。

「自分の子供を人殺しにするつもりですか!」

「いえ…それは…」

「何故鬼の言葉に耳を傾けたんです? どうして子供を人として死なせてやれなかったんですか? その選択が今の結末を迎えている。貴方達の選択で何より苦しんでいるのがあの子だ。今はまだ人としての心が残り制御している様だが真正銘鬼になったら貴方達二人の力ではどうにもならない。…覚悟を決めて下さい。」

手を放すと力無く項垂れ、夫婦は涙を流した。

刀を構え、鬼を見据える。先程からその子は大人しく此方を伺っており、大粒の涙を流していた。問題無いと判断し、拘束を斬り捨てる。

子はよたよたと親へと歩き涙ながら話す。

「お父さん、お母さんごめんなさい。丈夫な身体で生まれなくて。沢山迷惑かけちゃったね。」

感謝では無く、謝罪の言葉。それが何より夫婦を正気へと戻させていた。

「うあ…。ごめん、ごめんなあ。俺達は何にもお前にしてやれなかったな。」

「お母さんこそごめんなさい。丈夫な身体に産んであげられなくて…。」

「そんなことないよ。お父さんとお母さんは僕を沢山愛してくれた。一生懸命僕の為に働いてたことも知ってるよ?」

「そんな事良いんだよ。子供は親の生き甲斐なんだ。それがこんな事になるなんて…。お父さんとお母さんはお前に少しでも生きて貰いたかっただけなのにもう少しでお前を人殺しにさせてしまう所だった…」

「ありがとう…。ずっと暗闇の中だったけどお父さんとお母さんの声が聞こえて戻ってこれたんだ。でも次は駄目かも知れない。…ねえお父さん、お母さん。」

「何だい？」

「僕が死んだ後に子供が出来たら、僕はその子に生まれ代われるかな？」

夫婦は共に目を合わせて。慈しみを込めた目で子に答えた。

「…うん。きつと生まれ代われるよ。」

「…だとしたら凄く嬉しいな。今度は元気な身体で生まれて沢山遊ぶんだ。お父さんとお母さんとも沢山お出かけしてまた色んな思い出を作るんだ。親孝行だっと思っていた、だっつて沢山迷惑かけちゃったから…。」

「俺達の所に生まれてくれてありがとう。これからもずっと一緒だからなあ…。」

「大丈夫。お母さんも着いてるわ。これからもずっと一緒よ…。」

親子三人で抱き合い涙を流す。互いの思いの丈を隠す事なく曝け出し、親は子へ、子は親へと感謝、愛する思いを告げていた。

暫く待った後、親は子と手を繋ぎ涙ながらも決意の籠もった瞳で此方を見た。

「それではよろしいですか？鬼に対する慈悲として痛みを感じる事が無い技があり、今回はそれを使用します。」

「お願い致します。」

夫婦の言葉を聞き、刀を構え、正面の子を見据える。

「それでは良いね？大丈夫、痛みは無いよ。少し目を瞑って貰えるかな？」

鬼の子は素直に目を閉じた後、優しく話す。

「お姉ちゃんありがとう。お陰でお父さんとお母さんにお別れが出来たよ。これで安らかにお空の世界へ行けるね。皆を助けてくれて本当にありがとう。」

「ぐ…。」

頬に涙が伝う。両親も子も自分も、この場にいる全て者が涙を流していた。

これが鬼になること。負の連鎖を断ち切るということだ。

水の呼吸 伍ノ型 干天の慈雨の為に刀を構える。

そんな時、声が聞こえた。

「鬼の分際で人に与する等、嘲笑わせてくれる。お前にはこの一撃がお似合いだ。力無き自分を恨むと良い。」

「…え。」

自分が技を放つ前に鬼に子の頸が斬られ地を軽がる。身体はその場で崩れ、頸は両親の足元へと乱雑に転がっていった。

「痛い、痛いよお。お父さん、お母さん。」

苦痛に顔を歪める子の顔に両親が寄り添い必死に慰めの言葉をかける。それは子供の顔が崩れる十秒間程続いた。

自分の全神経がビリビリと反応する。今までの鬼の格段に違う気配、殺気に刀を持つ手が震えるのを感じた。

見た目は二メートルを超えた巨体。全身に朱の甲冑を装備し、顔は黒の総面を着けており表情を伺う事は出来ない。

「カー。カー。鬼殺隊、階級戊、旬彩率イル部隊全滅」

「交戦開始。階級丙、八雲結交戦。応援求ム！」

先程の男達の鎧鴉が三羽鬼の上空を飛んでいる。全滅？先程の男達か？

「カー。カー。下弦の壺。下弦の壺…ツギヤ!!」

上空の鴉三羽が同時に切り捨てられ黒い羽が上空より飛来してくる。

降り注ぐ羽の中、総面の奥の双眸がギラリ、と光った気がした。

## 第16話 雲の呼吸

(来る…!!)

狙いは斜め後方の夫婦。刀を両手で構え、合間に割り込む形で上段からの攻撃に備えた。

ガギンツ!!

「……ぐツ」

(受け流す事が出来なかった…!)

有無を言わせない力と技量により両足が地面にめり込む程の衝撃を全身に受ける。人並み越える力を持つ自分だがこの攻撃はそう何度も受けられるものではない。それに…

刀に目をやると先程刃を交えた部分が一部欠けているのが分かる。本来刀は力と力で拮抗する様には作られておらず、先程のやり取りをもう二、三度もすれば先に刀自体が駄目になる。

(結イ! 水の呼吸だ! 肆ノ型でいくぞ!!)

(うん!)

水の呼吸 肆ノ型 打ち潮

追撃を行おうとする鬼の胴体を下から斬り上げ後方へと押し下げる。斬撃を受けた鬼はその身体を僅かに浮かせた後己の身体と刀に視線を向けていた。

「早く逃げて下さい! お子さんの犠牲を無駄にしないで!」

私が叫ぶと夫婦は泣きながらも街の方へと駆けて行く。

(結) 下弦の壺だ! 今までの鬼の中で最強だ。手加減無しでいくぞ!  
!

(わかってるよツ!)

十二鬼月の中でも上弦の鬼は数百年討伐した記録が無いと聞く。相手は下弦だが数字は壺。現段階で鬼殺隊が打倒しえる最強の敵に他ならない。負けは即ち死を意味するのだ、正真正銘全力で挑む必要がある。

(相手は人型。全身の甲冑は血鬼術? 甲冑の隙間は黒い霧で良く見

えない。鬼を斬った事から手に持つのは日輪刀？さっきの男達の物？ それとも： うん。：試してみよう。）

水の呼吸 参ノ型 流流舞い

私は流れる様な斬撃と足運びにより回避と攻撃を同時に行う。身長差により下からでは頸までの距離があるので姿勢を下げるべく攻撃が届く関節部位を中心的に攻撃を与えていく。

ぐわん、と鬼の全体が揺らいだ。

（いけるッー）

水の呼吸 式ノ型 水車

隙に乘じ私は技を繰り出す。攻撃は見事に決まり、鬼の左手腕を斬り飛ばした。

このままいけば鬼の頸を斬れる位置まで届く、誰か見てもそうだとこのままいければ…。

だが私は攻撃の瞬間身体を翻し、後方へと下がる。

ザンツ!!!

そして、それと同時に先程まで私の胸があつた場所を刀が通過した。

「それが貴方の血鬼術ね…？」

鬼の斬った筈の左手は靄の結合と共に繋がりに元通りとなっていた。二本目の日輪刀は胴体部分の靄が一瞬濃くなつた際に出現した様だ。

「ククク…」

鎧がカタカタと動き、声は何処から出しているのが分からない程甲冑の中で低く反響していた。

「クク…フハハ!!見事だ小娘。全くもって見事!!攻撃を避けるどころか私の血鬼術を見破るとは大したものよ。先程の男達とは比較にならない。良い感と腕を持っておるな。」

「敵に言われても嬉しくないよ。それよりも何故日輪刀を持つてるの？先程の子供を斬った理由は何故？」

「おかしな事を聞くな小娘。鬼だからと言って仲間意識など無い。弱い鬼なら尚更だ。我はただ強さを求めて闘争に走る。その為なら

相手が人だろうが鬼だろうが些細なもの。日輪刀は私の趣味に他ならぬ。こうして倒した者の刀を収集し、用いる事で闘争無き日も使い手を思い出し暇を潰す事が出来る。それにしてもこれは面白い刀だな。鬼の命を経つ事ができ、使い手により色を変えるとは実に興味深い。」

鬼はくぐもった声で嬉々として話す。その鬼としては実に人臭い理由に顔を歪めながら私は構えを解く事なく隙を伺い続ける。

「フム…。久々の強者について無駄口を効いてしまった。主を殺した後でその刀も私の貯蔵に加えておこう。小娘、何か言い残す事はあるか？」

「生憎死ぬつもりは毛頭無いよ。貴方は此処で『私』に斬られる、絶対に。」

「その心意気や良し…。では行くぞ！」

水の呼吸 玖の型 水流飛沫

無駄が無い素早い足運びにより、鬼の両腕による攻撃を掻い潜りながらもその身体に攻撃を加えていく。だが先程と同じ様に攻撃された箇所は靄と共に有耶無耶となり効果が出てるのかさえ分からない。

(やはり頸を斬らないと駄目か…。)

「小癩な。…ならこれならどうだ!!」

ズザンツ!!!

鬼がその巨体を生かし全力で刀を振るう。周囲の墓を幾つもなぎ倒す程の衝撃が生まれ、私は回避の為にある程度下がる羽目となった。

(…なんて力、受けたらひとたまりもない。)

「使い手がなまくらなら刀もか。私の攻撃に十も耐えれぬとは…。」  
パキリ、と攻撃と同時に折れた刀を見て鬼が呟く。そして新たな日輪刀を手にして鬼は構え直した。

(アイツ…一体幾つの刀を所持してるんだ?)

(分からない。もしかしたら私達の技の手の内もバレてるのかも知れない。気をつけて闘おう。)

「水の呼吸と聞いたか。無駄の無い良い動きだ。同じ流派の者の中でもお前の動きは別格だな。」

「そんなのツ…嬉しく無いよ!」

水の呼吸 捌ノ型 滝壺

滝壺は隙も多いけど威力の高い技だ。高い勁力により繰り出されたそれは鬼の凶体を揺らがせ足元を危うくさせる。

「…ヌツ!?!」

「今だツ!!」

鬼の片脚を全力で払い。顎を下ろさせる。刀を持たない手で拳を握り私はそこを全力で振り抜いた。鉄と鉄をぶつけ合う様な鈍い音が響き、それは鎧を通して反響する。

(これで脳が揺れた筈。今が好機!)

刀を構え、頸を斬るべく腕を振るう。彼と精神を入れ替え、技を放つ。

「ツ! 疾い!!」

雷の呼吸 壺ノ型 霹靂一閃

ザンツ!!

確かな手応えと共に鬼の頸が甲冑ごと斬られた事を確認する。頭部は重い音立てながら地面を転がった。

「ふうー。結構やばい敵だったな。」

胸元をパタパタさせながら周囲を確認する。胴体は数歩歩いて立ち止まり、全身が黒い靄に覆われていた。

(あれ…おかしいな。)

(ん、どうした?)

(鬼の身体の消滅が始まらない…。身体もそのまま。どうして?)

(確かに…。こんな事は今まで無かったな。…あれ、頸は?)

先程の場所に転がったいた頸が消えている…。嫌な汗がつう、と額を流れるのを感じた。

「…体術も使えるのか。ますます興味深い。だが、これまでだ。」  
(いつの間に後ろに。間に合わな…ッ!!)

ザンツ!!

刀を構えようとしたその刹那。凄まじい激痛を脇腹に感じながら全身が強く打ち付けられる。視界と意識が揺れ、受け身すらままたない。

「グ…。ウウ…。」

勢いのままにいたる所に身体を打ち付けながら転がり。遅れて自身が斬られ、墓石へと叩き付けられた事を痛みで霞む視界で認識した。

「鎖帷子か。装備に救われたな小娘。たがお主本当に人間か？」

(ぐう…。大丈夫か結!!起きろッ!)

痛みで彼女の人格が沈み。意思疎通が出来ない。呼吸を続けようとしても吐血が邪魔をして空気の巡回を阻む。

(両方意識が沈んだら終わっていた。俺は以前の生活で痛み耐性があったから何とか意識を保てた。けど結の人格が無い以上水の呼吸に頼れない。雷の呼吸のみで戦うしかない。)

血を少しでも吐き出し、攻撃の為の呼吸を始める。

「先程のは上半身と下半身が泣き分かれる威力だった筈。鬼ならともかく人の身のお前に耐えられるとは思えんが…。」

「だったら何だっただよ!!」

雷の呼吸 漆ノ型 紫電一閃

「ツヌ!?!」

閃光が敵を切り刻み、甲冑は両手、両足を吹き飛ばしながらも後方へと仰け反った。

「はあ…はあ…。」

紫電一閃は壱ノ型を基礎に独自の改良を加えた型だ。霹靂一閃を超えた速度に複数の斬撃を加えて切り刻む。多少の消耗はするが最早形振り構ってられない。

傷は思った以上に深い。全身が打撲、裂傷塗れの上に直撃を受けた脇腹は感覚が無い。額の血が左目を伝い視界は悪く、気分は最悪だ。

「今のは『漆ノ型』か。前の鬼殺隊士とは違う型だな。」

胴部分の甲冑が宙に浮き、それに引き寄せよせられる様に手足の甲冑が靄と共に元に戻っていく。

(くそッ!!効いてる様子すら無しか。)

「…他にも『漆ノ型』を使う者が居たつてののか?」

「ああ、『拾壱の型』を使う者もいたな。」

「これはもう使えんな。」と言い。鬼は無造作に手元の二刀を投げ捨て、懐の靄から新たな刀を取り出した。

鬼の手元にある二刀、一刀は青みががり、一刀は黄色に染まってる。

「なかなかの手練だった。たが誇って良い、お前はこの二人より我に善戦しておる。」

「…マジかよ。」

鬼の持つ刀はその色、特徴こそ違うがその二刀にはある共通点があった。

「柱と言うのだろう。この刀の持ち主は…。」

刀に刻まれた文字は即ち『悪鬼滅殺』の四文字。

(うう…。ごめん意識飛んてた。)

(結!大丈夫か!?)

(大丈夫じゃ無い。うう…。そこから中痛いよ。)

(俺もだから大丈夫だ。)

(それ全然大丈夫じゃ無いよ！)

(んな事はどうでも良い。大ピンチだ。結：『あれ』を使うぞ)

(え!?…でも『あれ』はまだ完成して無いよ。)

(使わなければ此処で死ぬだけだ。駄目で元々、可能性は五分五分と見た。…やっつけてくれるよな?)

(…はあ。分かった、やろう！何処まで貴方に着いてくよ！)

ハアアアア!!

武道でも用いる息吹の呼吸により強制的に呼吸を通常に戻す。それはこれからの呼吸が少しでも長続きさせざる為の苦肉の策だ。

「…何かする様だがそれがお前の出す最後の技となるだろう。全力を出せ、そしてそれを我は叩き潰し、至上の贄としよう。」

全身に力が巡る。だがこれは力を前借りしてるに過ぎない残された時間は体感で『五分』それ以上は闘えない。

(この強敵を何としても五分で倒す。俺(私)達の編み出したこの呼吸法、この技で!!)

「お前はここ先俺の姿を捉える事は出来ない。」

「…ほう。」

「……いくぞー！」

『雲の呼吸』

## 第17話 願望

「ねえ、あれは何なの?」

幼い少女は日頃の疑問を母へ溢す。

「あれは甲冑と言つてね。私達のご先祖様はこれを着けて闘つていたの。」

それは家の一室に飾つてある嘗ての一族の栄華の名残。

武家から離れて久しいが子孫はその功績を誇りとして今でもこうして残していた。

「格好良いね!朱色でとってもきれい!」

「うふふ、そうね。私達の自慢の品よ。」

「ねえ、お母さん。私も大きくなったらこれを着けられる様になれるかな?」

「うん、貴方も大きくなったら着けられるかもね。」

それは幼い子供の他愛ない疑問でしかなかった。ただ綺麗なだけで子供にとっては何に使うのかも分からない品。母親もそれを承知で返答に深く考える事も無かった。

ただ純粹にこの子が大きくなって欲しい。その目標の一つでもなれば、そう考えての一言。

その母親の予想は大きく外れる事になる。

「えいつ、やあっ!」

幼い少女は成長と共に木の枝を刀に見立てて素振りを始めた。甲冑が武士の道具だと気付きそれに見合う腕を身に着けようとしたのだ。

両親も初めは遊びと樂觀的捉えていたがその行動が一週間、一ヶ月、一年と続くにつれ、その顔は険しいものとなった。

「私、将来この甲冑に見合った人になるんだ!」

背の伸びた少女は笑顔で答える。

両親は頭を悩ませ、あらゆる手段で少女を素振りから遠ざけようとした。歳は十を数え、同世代の少女達は歳相応の遊びをしている。朝

から晩まで木刀を振る娘は何かと周囲から浮く存在となっていた。

「お願い。もうあんな真似やめてちょうだい。」

「どうして!? お父さんもお母さんもあれが私達の誇りって言ってたよね? あれに見合う人になるのが何故いけないの!」

家族と反対を他所に刀を振り続ける日々。

やがてそれは少女の年齢が十五を越えた所で実りを迎え並の男性より剣術、胆力に優れるまでになっていた。

周囲から特別な目で見られる事に娘は喜び。だが両親はその事に深い溜息をついた。

「お願いお父さん! 売らないで! 一族の誇りなんですよ!?! どうして!!」

「煩い! 仕方が無いんだ! 我が家はもう裕福では無い。お前も良い歳だ! 何時までもそんな物を振ってないで見合いの一つや二つ引き受けたらどうなんだ!」

その年。両親は娘の為、家の為に甲冑を手放す決断をした。

娘は良い歳となり懇談の話も幾つかあったが一向に聞かず木刀を振る毎日。父親はついに嫌気が差し、強行手段に出たのだ。

「……………」

嘗ての目標。ただ両親が自慢だと言ったそれを自身が見に纏える様になれば喜んで貰えるはず、誇りと思つて貰えるはず、そう考えての行動だった。

自分が目指していたものはなんだったのだろう。

甲冑があつた場所には何も無い。私にはもう何も無いのだ。

もはや目指す場所に向かう為の過程が目標となっている矛盾に少女は最後まで気が付かなかつた。

甲冑が無くなった部屋で毎日佇む娘。彼女から今までの熱意や元気が無くなり、食事も取らずひたすら何かに耐える様に拳を握り甲冑のある場所を見つめていた。

両親は暫くすれば元に戻ると思ったが娘はある日を境に姿を消す事になる。

その後遠い噂で甲冑を売却した店の店主が何者かにより斬殺される事件が街に流れた。店の品は『幾つか』が盗難されたという。

両親はその噂を境に娘を捜す事を諦め、残りの人生を慎ましく過ごした。

今から百年程前、とある少女の話である。



雲の呼吸 壺ノ型 叢雲

「……ム。」

鬼の視線から鬼狩りの少女の姿が消える。

ゆったりとした動作だが次第に速くなっていく動きに身体の輪郭は振れ、やがて自身の視界から完全に消えた。

水の呼吸とは違うその異なる歩法。音も気配も無く、まるで雲に巻かれた様な錯覚に鬼も動揺を顕にする。

雲の呼吸 式ノ型 雲雀

「ッ!!」

瞬間。全周囲から細かな斬撃が襲い。鬼の身体に夥しい数の傷を作る。鬼は堪らず横薙ぎに手に持つ刀を振るうが周囲の墓石を破壊するのみで彼女の姿を捉える事が出来ない。

(砂埃が立てば動いている以上何かしらの兆候は見える筈。何時までもこの様な動きが出来る程の体力が残されていとも思えない。なら…。)

「ッ！そこだ!!」

空気の揺れを感じとり、攻撃を振るう。砂煙の中移動する少女と一瞬視線が交わった。

水の呼吸 拾壺ノ型 鏡花水月

(何ッ!?)

幻の様に自身の攻撃は少女の実体をすり抜ける。同時に背中に威力の高い斬撃を貰いたまらずたたらを踏んだ。

(攻撃がすり抜けた。それに今のは水の呼吸か?どうなっている、小娘は一体何をした?)

「ふう…。こんな攻撃じゃ貴方の『本体』には傷一つ付かないみたいだね。やっぱりその鎧を剥がす事からしないとね。」

雲が暗れ少女が現れる。その両手には二つの刀を携えていた。今は平静を装ってはいるがその額には玉の様な汗が見える。やはり先程の技は消耗が激しい事が伺えた。

「ほう…。やれるものならやって見るが良い!」

「言ったね。その鎧を剥がして貧相な中身曝け出してあげるから!」

「…何?」

鬼の甲冑がガチン、と音を立てる。

「…貧相だと。言ってくれたな小娘。名残惜しいが此処で終わらせてくれる。我を追い詰めた事をあの世で誇るが良い!」

血鬼術 黒影装

鎧の中に内包された靄が甲冑の隙間から溢れ出し、その姿を二回りも大きくさせる。腕を地に着け四足で大地に立つ。その姿はさながら獣の様であった。

「うげッ!そんなのあり?けど上等。こっちは上弦の鬼を倒そうとしている身だし下弦の壱なんかで止まってられないよ!」

「最早言葉は不要だ…。参るぞ!!」

雲の呼吸 壱ノ型 叢雲

全身の靄が鞭となり自身へ降り注ぐ前に少女は呼吸により姿を消す。攻撃が着弾した地面は深く抉れており今までとは桁違いの威力の高さを物語っていた。

(一撃でも受ければ次は無い。気を引き締めろ結。)

(うん。攻撃出来る回数も後僅か。集中して少しでも精度の高い技を繰り出そう。)

全集中！ 雲の呼吸 陸ノ型 雲烟万里

少女から放たれた広範囲域の斬撃が鬼の全身を切り刻む。地面を巻き込んだそれは土煙を起こし、鬼の視界を奪う。

雲の呼吸 竜の型 竜躍雲津

歯を食いしばり、地に足が沈む程の経力で構える。呼吸で全身の酸素を集約させ次の技の威力を少しでも高める。

「はあああああ!!!」

「馬鹿な。その小さな身体で我を浮かせるだど!?!」

敵の攻撃を紙一重でかわし、今持てる全ての力で斬り上げる。鬼は木よりも高い位置へと持ち上げられ、その急激な変化に身体の靄は追いついておらず剥き出しの甲冑が頭になる。

「けほッー」

咳き込むと大量の血が掌に広がる。最早残された時間は僅か、失敗は許されない。

同時に跳躍して先に上空へと先回りし、強力な一撃を放つべく構えをとる。

「空中ではこの技は躲せんぞー!」

血鬼術 刀葬黒装

鬼は貯蔵していた刀をその身体全体に出現させ攻撃を行う。その数は百を優に越え、靄と共に身体に纏うそれは鬼の今までの闘争の歴史を感じさせるものだった。

雲の呼吸 雨の型 小夜時雨

身体に複数と刀傷を負い、左肩、右足に刀が突き刺さった状態ながらも空中で一回転し、全身のバネを生かし技を放つ。鬼は靄の護りが無い胴体に攻撃を受けた事で全身に衝撃が走り甲冑の大部分を損傷させた。

「グオオオオオオ!!!」

大地へと落下し、その衝撃を全身に受ける。甲冑は全て崩れ落ちその大部分は周囲へと弾け飛んでいった。

## 第18話 敗北

落下の衝撃で砂煙が舞う。周囲には甲冑の破片が散乱しており、鬼が相当の衝撃を受けた事を物語っていた。

「はあ…はあはあ…」

負傷した右足を庇い左足で着地する。呼吸の反動で息は荒れ、目元は霞む。限界はとづくに越えていて大地に身を投げ出したい気分だが身体を奮い立たせ、止めを刺すべく鬼へと向かう。

鬼は頸を斬らなければ死なない。いくら与えたダメージが大きくても時間と共に回復してしまう。渾身の一撃を加えて弱った今しかチャンスは無い。

「…よくもやってくれたな小娘。」

「ツツ!!」

(…嘘だろ!?)

先程より濃密な死の気配が背中にのしかかり意識が朦朧とする。

甲冑の胴に当たる部分から本体と思われる鬼が現れる。見た目は自分と同じぐらいの少女の姿、片手に長い刀を携え黒い着流しを身に纏っている。見た目が全てでは無い事は今までの経験で分かっているが今回はそうである事を願わずにはいらなかった。

「全く対したものだ、この姿を晒す事になるとはな。痛みを感じるなんて久方ぶりだ。鬼となつてからというものの表面の甲冑と術のみで事足りた。今までであった柱共もここまで我を追い詰める事は無かった。」

声は先程の鎧を通したくぐもったものでは無く、見た目通りの少女のもの。長い髪は纏める事なくはらり、と背中に垂らし、前髪から覗く瞳は驚く程赤く、笑みを浮かべる口には牙が見える。

(…まずい。この手の輩は外装が主で中身が弱点となる場合が多いがこいつは別格だ。何のつもりかは分からんがこの殺気と闘気を見るに断然中身の方が強い。完全に見誤った。この傷と消耗じゃ目の前のこいつを前に幾許も持たない。)

これが十二鬼月。下弦の壺の実力。

(もう駄目だよ！早く逃げよう!!)

(わかってる！そうは言ってもこの怪我じゃ…ツツ!?)

痛みで動きが鈍った隙をつかれ、鬼の刀身が右肩を貫く。以前の鎧とは比べものにならない早い動きに痛みが走ってから自身が刺された事に遅れて気付く。

刀身はをやすやすと自分の貫き、後方の墓石へと縫い留められた。

「ぐあああ!!」

痛みで右手の刀を手放しかけるが歯を食いしばり何とか踏みとどまる。刀を手放す事は即ち確実な死を意味する。死んでも離す訳にはいかない。

水の呼吸 壺ノ型 水面斬り

左肩は先程の血鬼術により刀が深々と刺さった状態だが最早形振り構っていられない。右腕よりはマシだ。ぶちぶちと嫌な音が身体から出るのを無視し、持てる力で刀を振るう。

「この状況を前に闘志を失わないとはな、全く痛快な女よ。」

鬼は二刀目を出現させ自身の刀身が届く前に左手を貫き、同じ様に墓石へと突き刺さる。手にあつた藍色の刀が地へと落ちた。

「生憎敗者をいたぶる趣味は無い。だがお主は特別だ。念を入れさせてもらう。」

ズブリ、と左肩の刀を押し込まれた。その激痛に意識とは裏腹に白銀の刀も手から離れてしまう。

「ぐう!!」

足は他から離れ、左右の肩と左手に刺さる刀で墓石から動く事が出来ない。この間も自重により刀傷は開き夥しい量の血が流れ足を伝って血の水溜りを作っていく。

まだだ。まだ死ぬ訳にはいかない。

戦闘開始と同時にカー助に伝言を頼んだ。付近の鎧烏に伝達して近い部隊ならば一刻と待たず援軍が来る。相手は十二鬼月だ。援軍もそれ相応の実力者が駆けつける筈、後半刻とかからない、それまでの時間を稼げば良いだけだ。

吐血を吐き、鬼の視界を潰す。身体で唯一満足に動く左足で鬼の頸に蹴りを放つ。

命潰えるその時まで一瞬一秒を生ききる。この命は最早自分だけの物では無い、彼女の、この世界全てに関わる物だからだ。恥や外聞を捨て全力で足掻かせて貰う。

本来の威力の三割にも満たない蹴りは鬼の右腕によって止められる。その瞳は今までに無い色を含んでいた。

「…もう良い。お主は良くやった。」

「…ゴホツ…まだ…だ。」

いよいよ出血量が許容範囲を越えかける。視力を失い、身体感覚が無い。呼吸は苦しい筈なのにそれを行う為の呼吸自体が次第に浅くなっている。

「先程の負傷もあらかた治癒した。仲間の援軍を待っている様だが最早お主は助からん。時間的にも我の実力的にも…な。」

先程の朱の甲冑が鬼の背後に現れる。その外観、威圧感とも最初と相違無い様子であった。

どうやら遠隔で動かせるらしい。初めから2体で挑まれたら一溜りも無かった。闘いだと思っていた物は終始目の前の鬼の掌の上にあったと言うだ。

(…回復の呼吸だ。血の巡りを一時的に遅らせる事で出血量を致死量ギリギリで抑える。

「女という身で我とここまで闘うその力量、精神力、並大抵の事では無い。」

「お前も…女…だろ。」

鬼は自分の話に一瞬間の空いた表情になり、その後何かあってか優しく微笑んだ。

「…ああ、そうだったな。久しく忘れていたよ、小娘最後に言い残す事はあるか？」

「生憎死ぬつもりは…無い。」

「…見事。」

鬼が新たな刀を生み出し、その剣先を静かに此方の胸へと沈めた。

胸に冷たい感覚が宿る。それは余りにも呆気無く、そして他人事の様な錯覚さえ覚えた。

不思議と痛みは無い。あれだけ激しかった自身の心音がそれだけで水を打ったかのようにピタリと止まった。

口から吐く息は最早呼吸とは呼べず、肺の中の空気をただ出すだけの無機質な物であった。

最早彼女の声さえも聞こえない。

以前の物とは違い、ただ暗く、深い、

これが死。人としての死。

俺は何か間違えたのだろうか。

何か出来る事は無かったのだろうか。

彼女の生を借りてまで生きた意味は何だったのだろうか。

そんな全ての思考を闇は優しく強く飲み込んでいった。

## 第19話 死の先に

それは白い世界だった。

上も下も、近いも遠いも無い。暖かくも寒いも無く。見回しても何も見える事は無かった。

(…俺はどうなったんだ?)

この空間の中では全てが曖昧な物に思える。それは自身の存在すらも例に洩れないようで身体を意識し続けなければ希薄となり消えていく、そんな予感すらあった。

立つ事も、座る事も出来ず、かと言って浮いている訳でも無い。

俺はこの空間に対し漠然とした焦りを募らせるながらも何もする事が出来ずただこの空間に有り続けた。

そして暫くの時間が流れる。

どれだけの時間が経ったのだろう。一瞬にも永遠にも感じる中で俺は意識していても自身の存在が消えかけていた。

水溶かした粘土の様に手足の先からグズグズにほぐれ、溶けていく。不思議と痛みは無い。

この時には記憶も薄れ、自分がどんな存在であったかも忘れていた。ただ何か使命感の様な物を感じ、この場に抗い存在していた。

異変は些細なものだった。

初めは目の前に光の泡が現れる。それは次第に輪郭と成し、やがて一人の女性の形を象った。

特徴的なのは彼女の背中に生える二対の羽、頭部で輝く光の輪。

美しい女性だった。だが初めてあった気はしない。俺は何処かで彼女と会って居ただろうか?

彼女が口を開いて話すが声は聞こえなかった。

一言、二言此方に何かを伝えようとするも聞こえる事は無く、意図も伝わらない。だが、その仕草から必死に何かを伝えようとする事だ

けが理解出来る。

「

彼女に対し話そうとするが声は出ない。そもそも話す為の口が存在しなかった。そうだ、口は大分前に消えてしまっていた。

彼女を前にしたまま再度時は流れた。

今度はとても長いものだった。最早俺の意識は消えかけ、存在しているかも分からない。たが目の前に存在する彼女を見つめる。それ為だけの意思が辛うじて残っていた。

ふと、自分という概念の中から五つの光が溢れ出た。

それが何かかけがえの無いものだと感じた俺は無い手を動かしその光を行かせまいと必死に手繰り寄せる。

一つ、二つ、三つ、四つまで集めたが一つはゆらゆらと自身の手から離れてやがて遠くて消えてしまった。

「……………い。」

目の前の女性と視線が合う。気が付けば聴力が僅かながら戻り、彼女の声が途切れ途切れ聞こえる。自身の身体もある程度の形を成していた。

「……………い。」

そうだ。俺はあの世界に帰らなくてはいけない。あの救いの無い世界を自分が元居た世界のように変えなくては、その為に俺は世界を渡って来たのだ。

記憶が少しずつ戻り始める。それと同時に身体の細部もハッキリとし手足の感覚も分かってきた。

目の前の彼女の事を思い出す。彼女は俺がこの世界に来る切っ掛けとなった方だ。人を思う優しき心を持つ天使。

「ごめんなさい。」

正面を見た時、彼女は泣いていた。

その顔にハツとする。以前見た慈しみを帯びたものとは違う。確かな絶望の影がその瞳にはあった。

意識が覚醒する。



「ふむ。」

絶命した少女の前で十二鬼月である下弦の壺は手に持つ二刀の刀を見比べていた。

見事な刀だ。刀身の色もさることながら打ち手が良いのだろう、見事に鍛え上げている。此度の戦闘で僅かながら摩耗があるがこの程度ならばすぐ直せる。

この刀に対し持ち主は存分に応えていた。相当に武に励んだのであろう、刀の柄は使い込んであり行き届いた整備は彼女の闘いへの強い意志を感じる。

今まで集めた中でもこれ以上の品は無い。

鬼は満足気に目の前へ靄を生み出し、その空間へ手に持つ二刀を入れようとする。

この血鬼術は彼女の得意とする技だ。この靄は敵の視界を欺く事にも使え、身に纏えば武器となる。甲冑を通して物体の操作にも用いる事ができ、こうして物を出し入れする事さえ可能とする。

そしてこれだけが己の全てでは無い。

鬼として生きる為の最低限しか食べる事が無い自分にとってこの血鬼術を得るまでは剣技のみで生き抜いてきた。

初めは自己流だったそれは数多の鬼殺隊士との死闘を経て一種の流派として昇華し、そしてそれを今でも弛まぬ努力で磨き続けている。

ただ快樂により人を殺し喰らう周囲の鬼とは訳が違うのだ。

全ては己の理想とする侍へ近付く為、この朱の甲冑に相応しい者となる為に。

現在の下弦の壺と言う階位に特に思う事は無い。これは所詮他人が決めた順位付けでしかない。上弦の鬼は確かな実力者が揃っている事は理解出来るが別段気にする程では無い。自ずと有るべき位置に落ち着く筈だ。

だが気になるのは以前垣間見た上弦の壺。

刀を持つているからには剣士なのであろう。奴には大変興味が芽生えた。殺気は近付くだけで皮膚が裂ける錯覚を起こし、奴の射程距離内は鳥肌が立つ様で大変心地良い物であった。

それに何処か己と似た空気を持っている。奴と今の私には一体どれだけの差があるのだろうか。

上弦の階位に興味がある訳では無いがあの上弦の壺との闘いが挑めるのであれば入れ替わりの決戦を申し込むのも吝かではない。

もしかしたら己が欲して叶わなかった物が埋まるかも知れない。

侍としての頂。ただその為だけに百年もの間刀を振るってきた。そしてその答えが間近に来ている事を長年の経験で感じ取る。

(…いよいよだ。私の待望は間もなく叶う。)

先の戦闘で娘は使いを出し仲間を呼んだと見えた。これからの決戦の前にその相手で再度腕を慣らすとしよう。

自身が十二鬼月である事は向こうも承知している筈。恐らくそれなりの強者が来るだろう、この小娘より心躍る死闘が出来るかこの場にて楽しみに待つとしよう。

二刀の剣先は飲み込まれ、もうほんのひと押しで靄へと収納出来るそんな時だった。

「…ま…だ。」

声の主は意識から外れていた娘だった。

素早く距離を取り、遠目から見れば先程と何も変化した所は見受けられない、心臓に突き刺さる刀も含めて。

「…いや、それはおかしいぞ小娘。お主は死んだ。これは紛れもない事実だ。主の心臓の鼓動を止めたことは我が確認している。」

「…ぐ…う…」

此方の声には反応せず、娘は右手で深々と刺さった刀を身体から抜いていく。夥しい量の血が流れ落ちるも彼女は意に解さぬ様子でその全てを抜ききった。

「…はあ…はあ。」

力無くその場に佇む娘だが様子が妙だ。項垂れ前髪で表情は隠れ

ているがおおよそそこに意識があるすら分からない。右手には先程自身に刺さった我の一刀を所持しているがこれも力の無き様子で両腕をだらり、と投げ打っている。

「…ツ！」

（先程貫いた筈の左手の傷が塞がっている…？出血も3箇所を貫いたにしては今の出血は驚く程少ない。）

「面妖な。貴様、魑魅魍魎の類いか。鬼と言う訳でも無くその回復力どうなっている？」

「…の呼…吸。…型」

此方の問いに反応は無く。ボソボソと何かを呟く。

「まあ良い。頸を切れば良いこと。確実な死をくれてやろう。」

血鬼術 黒影装

甲冑を操作し、止めを与えるべく攻撃を加える。

「」

娘が何か言ったその直後だった。

対峙していた甲冑は原型が残らぬ程の衝撃を受け吹き飛ばされる。何らかの攻撃を受けた様だが此方からでは何も視認する事は出来なかった。

「…何だと？」

黒影操で操られた物は靄による強化を施してある。人の手で軽くあしらわれる様な代物では無い。攻撃の挙動も見えなかった。

（ツツ!!）

素早く自身が攻めに転じようと娘から奪った二刀を構えようとす  
るが刀が見当たらない。それどころか両手の先が肘から綺麗に両断  
されていた。

「…ぐ、ぬうう。」

（まさか今の攻撃で同時に斬られたというのか？あり得ぬ、奴との  
間合いは二息も離れていたのだぞ！）

娘の位置は変わらない。鬼は考える前に後方へと跳躍し、再度血鬼  
術により甲冑を操作し自身との間に挟む様に出現させる。

ガチガチと動く甲冑を前になお娘の姿勢は変わらない。

だが甲冑の攻撃がその身体に届く刹那、娘に動きが見られた。注視しなければ見えない程の刹那、娘が行った事はただ一つのみ。

刀を持つ右手を横に風ぐ。ただそれだけ動作。

後は先の再現であった。一瞬で甲冑は散り散りとなり血鬼術と共に掻き消される。そして甲冑の存在等無かったと言わんばかりに斬撃が此方へと伸び鬼の身体に裂傷を作った。

「ぐおおおお!!」

攻撃の余波により血が後方へと吹き飛ばされる中。鬼は娘を見る。

風で前髪が舞う中彼女の瞳は銀色へと変化し、淡く光を放っていた。

## 第20話 欠月

### 血鬼術 黒衣影装

自身の身体を影が包み、弱所を甲冑の部位が保護する。

真正正銘これが下弦の壺の鬼である【朱里】の至高にして最強の奥義であった。今までの凶体だけの物とは違う。鬼としての身体能力を損なう事なく血鬼術の力の上乗せ、防御力の向上を図っている。

柱から得た二刀を保持し、朱里は目の前の未知と対峙する。

先程のやり取りで奴との間合いは無いに等しい事は理解した。狙うは接近戦による頸の切断。心臓を止めても動くのであればその身体を細切れにし再起不能にするしかない。

一息で奴へと接近。足と影を用いての移動は今までの比では無く瞬く間に懐へ潜り込んだ。

一撃、二撃と刀を振るう。

「ツツ!?!」

重く鋭い斬撃を奴は羽でも撫でるかのように防いでいく。銀に光るその瞳を合わせる事もなく右手だけの動作で磨きあげた我の剣技その全てを無効化している。

「馬鹿なツ!!」

ならば力と、影を地へと固定し、刀を影で覆う。己が用いる最高威力を与えよう。重さを用いれば体重が軽い人間、ましては小娘など一溜りもない筈。

ズザンツ!

上段からの斬撃。真正正銘全力の一撃を奴は正面から受け止めた。体重差を感じないその事実には朱里は冷静な目で敵を観察する。

(…奴の背後の景色が歪んでいる?この妙な力場が原因なのか。)

この間にも蜃気楼の様に奴の背後は歪み続け、やがてそれは一つの形を現す。

光の環。丁度後頭部にあたる付近に長さ一尺程の光のそれが現れ淡い光が奴の全身を照らしていた。

「おおお!!」

鏢迫り合う刀に加える力を強めても奴に効果は無く。逆に力を入れるほど此方がジリジリと後方へ下がって行く。

ここまで来て奴はちらりと視線を向ける。無機質な瞳、まるで初めから自分等相手にしてなかったかのように。

キンツ

奴が右手を振るう。たったそれだけの動作で我の二刀は半ばから両断され、傾く視界により頸が斬られた事を理解した。

敗北。自身の脳裏にその二文字がよぎる。

これが百年間闘争を求めて日々を過ごし、力の探求を目指した道の末路。その終着点…。

「まだだッ!」

(こんな所で終われぬ。我は何も得ていない。家を捨て、家族を捨て、人を捨てて今此処にいる。一体何の為に外道の道へ落ちたと思っ  
ている!理不尽への抵抗、己が欲望の開放。全てはこの時の為だろう  
!!)

左手で切断された頸を支え、折れた刀を奴に向ける。末端から身体が崩れている中、目の前の敵に一矢報いる為にも刀を振るった。それはまるで抗う様に、祈る様に。

最後に見た斬撃は最早己の目で終えぬ程の剣技。

「……見事。」

瞬間身体に幾数の斬撃を受け、今度こそその身体を地へ着ける。切断面に痛みは無く、脱力にも似た浮遊感が身体を支配し、だかそれが不思議と心地良くも感じた。

(完敗か。ここまでの差なら寧ろ清々しい。あれだけ感じていた未練や焦燥感が嘘の様に消えていく。)

私は何処で間違えたのであろう。女である事を悔い、この道を進んでるなお、頭を過るのはあの幼少期の思い出ばかり。

剣を持ち、剣士としての腕を磨いていけば満たされると思っていた。しかし、力を着け、成果を積み上げていても欲望は終ぞ満たされる事は無かった。

ああ：そうか。

私は認めて貰いたかったのだ。父に母に、あの栄華の品より目の前の私の方が大切なのだと。

幼い頃の間違いを何時まで棄てきれず子供の様に反抗し維持を張り。本当に大切な物は常に側にあった筈なのに…。

もう手に入る事が無い事実に思いを焦がし下弦の壺〔朱里〕は静かに消滅した。後に残されたのは鬪争に明け暮れた歴史を物語る刀の数々と長きに渡る戦闘で傷付き補修する事さえ叶わない朱の甲冑、その一部だけであつた。

間もなくして柱率いる援軍が駆け付け下弦の壺討伐の報は鬼殺隊中に流れる。

討伐者である八雲結は意識が無く疲弊していたがこれといった外傷も無く。実質単独で十二鬼月と交戦し成果を挙げたものの中では最高とも言われ鬼殺隊当主より甲の階級が授けられた。

多くの者は下弦の月を欠けさせたその成果に喜び。既存の柱達は新たな実力者の誕生に期待を寄せた。



そこは人里離れた名家の家。有名では無いものの無名では無い。当主の趣味か家の作りは端正なものであり庭に至っては植木一つ、堀一片に渡つても整備が行き届いている。

小さな池にはこれまた選別したのであろう立派な鯉が泳いでいた。こんな辺境に家を構えたのも自然を好み人と関わる事を煩いと感じる当主の色がより濃く出た結果なのであろう。

しかし、今現在この家の当主、家族、使用人に至る全ての人間は消えその痕跡まで残されては居なかった。

昼間にも関わらず全ての戸が閉められている異常。効く人が効けばその屋敷周囲の全てが濃密な死の匂いで包まれている事を嫌でも

感じる事になる。

「朱里が死んだ。下弦の月がまた欠けた。」

鬼の首魁である鬼舞辻無惨はそんな屋敷の一室に構え、己が見た結末を淡々と答えた。

「誠に御座いますか！…しかし、朱里…。誰で御座いましたかな？」

「…下弦の…壺。剣士の女だ。」

「ああ！そういえば！申し訳無い、下弦の鬼はいまいち記憶が薄いもので。」

上弦の式童磨の疑問に対し同じくである十二月鬼上弦の壺 黒死牟が答える。

「別に良い。百年も十二鬼月でありながら上弦に上る事の出来ぬ奴の事など。人間を喰らう事もせず人の時の記憶を何時までも引きずりおって。くだらん、やはり人間の部分を多く残した者から負けていくのだ。」

然もどうでも良いと言った様子で鬼舞辻は答える。

「だが、少々興味深いものを見つけた。」

珍しく主の上機嫌な様子にその場に居た上弦の鬼の一部が反応する。

「今回の朱里を倒した鬼狩りだ。少し気になる事がある。童磨、お前の目で見極めて来い。何も無ければ喰って構わん。」

真紅に染まった双眸を見開き、笑みを浮かべた。

## 第21話 蝶屋敷

「生きてる…。」

目が覚めたら病室のベッドの上だった。

意識が覚醒するまで暫しの間ボーっとしていたが下弦の壺との戦闘を思い出し俺は飛び起きる。

誰かが着換えさせてくれたのか服は入院患者のそれとなっており、白を基本とした服は自身が血に塗れた事がまるで嘘だったかの様にさえ思える。

「傷が無い。」

今が女の身であるにも関わらず上の着物を解き自身の肌を確認する。

以前の自分よりも白く、しかしそれは病的なもので無い、健康的な白磁の様な肌が変わらずそこにあった。

鬼狩りとなってから少々の生傷は幾度と無く負ってたがこの身体はたちまちにも回復し、傷さえも残らなかった。

今回もそうだと思いたいが記憶を辿れば死闘の末、俺は敗れた。しかも確実に心臓を貫く一撃を受けた記憶が最後となっている。

あの時の戦闘を思い出すと額から嫌な汗が流れ、僅かに呼吸が乱れた。

思えば今まで闘っていた鬼は自身より力量が劣る者ばかりであった。勿論相手は本気であり、気を抜けばどの戦闘でも命を落としていた可能性はある。

だが今回の鬼は当初から実力差は大きく、敗北は濃厚であった。雲の呼吸で一時敵を上回る事は出来たが相手にもそれ以上があると予想していなかった。自身の力を過大評価して後先を考えず闘った結果がこのザマだ。

しかし、こうして生きてる意味が分からない。助けが入ったにしても間に合うかどうかのレベル。しかも夥しい傷を受けている。この回復力でも無傷は流石に異様だ。

力を与えられ人並み以上の力を振るう事に浮かれていた訳では無い。しかし、命のやり取りをする上で大事な何かが無かった事は否めない。

下弦の壺という今までに無い目標に近付いた事で功を焦って居たのかも知れない。

(…けど俺は彼女の、【結】の命を握って居るも同然だ。自分の死が彼女の死である事をもっと強く、深く自覚するべきだった。)

俯き、握り締めた拳がギリリと音を立てる。いつの間に強く噛んでいた唇から血がつうと流れ、それがまた彼女の身体を傷付けていると認識し、あわてて手で拭った。

「……あの、良かったら。」

自身に差し出された手ぬぐいを見て、目の前に人が居た事に今更ながら認識する。どうやら予想以上に敗北の結果は自分を盲目にしていたらしい。

目の前には自身より少し下であろう年の少女が居た。髪をサイドに結っており、良く見れば使われている髪留めはカナエさんやしのぶさんの物とお揃いだ。姉妹なのだろうか？

「ありがとう。君は？」

「…栗花落カナヲ。」

淡々とした様子で答えるとカナヲは踵を返して出て行ってしまった。

(可愛い子だったね！カナエさんの妹かな?)

(起きたか、寝坊助。)

いつもと変わらない屈託の無い様子で結が答え、返答する。

寝起き早々に可愛い子に食い付く様子を見てひとまず安心すると共に闘いの後にも関わらず自身を崩さないその精神力は天晴と言う他が無く。それが俺には有難かった。

◇

「うん、何処も異常は無し。良かったわね！」

あの後にカナヲに呼ばれたカナエさんとしのぶさんに診療を受け、良好であると診断を受ける。今日はあの夜から三日目の朝、健康的にも問題は無く、リハビリも兼ね一週間程の滞在で事後の任務に出る事が出来るらしい。

「食欲はある？果物とカステラどつちが良い？」

「カステラ！食べたい!!」

「カステラね。しのぶちゃん持ってきてー。」

（おい、結！）

（えへへ、だってカステラ食べたいんだもん。）

結が瞬間的にも身体の主となり己が欲望を吐き出す。

「何で私が…。」とぶつきらぼうに言いながらもしのぶさんは部屋を出てトコトコと歩いていく。

そんな後姿を見ながらカナエさんはニヤニヤした笑みを浮かべた。

「何だかんだであの子が一番貴方の事を心配していたのよ。あの夜だって…「もう！姉さん!!」」

続く話を遠くから聞いていたのであろう。廊下からしのぶさんの静止が響く「あらあら…。」と言いながらカナエさんは意地悪そうな笑みを浮かべた。

「でも本当に良かったわ。貴方が下弦の壱と遭遇した知らせを受けた時は気が気では無かった。貴方を助けるのはこれで二度目、次はこんな無茶をしないで貰いたいものだけわ。」

妹を叱り付ける様な優しさを交えながらやんわりと釘を刺される。

「すいません、ご迷惑をお掛けして。」

「良いのよ。迷惑なんかじゃ無い、此処は蝶屋敷、傷付いた者が身体を休める場所よ。そして私が此処の主。その私が言うんだから何も気にする必要も無し！それに貴方は可愛いしずっと此処に居て欲しいくらいだよ。」

全くカナエさんには頭が上がらない。何から何までお世話になりっぱなしだ。でも恥を偲んで今回はお願いしてみるのもありかも知れない。前回の戦闘で力不足を感じたし、少しの間お世話になりながらこの付近で修行するのも妙案だ。

あ、しまった。金の持ち合わせが無い。財布はあの時の鬼殺隊員に投げつけてしまったし、下弦の壱の討伐も不可能だった。正真正銘の一文無しだ。

「では少しの間だけ…と言いたいんですが生憎持ち合わせが無くて。今回の下弦の壱との戦闘間財布を失くしたんです。次に鬼を討伐してからの支払いでよろしいですか？」

「お金なんてとんでも無い。柱として使い切れない程貰ってるからそんな事気にしなくて良いわよ。」

「この屋敷が何件も建つくらいにね！」という冗談の様な話をするカナエさん。

「それに貴方は一文無しではないわ。貴方の財布は戦闘後部隊の子が見つけてくれて今は私が掌握してるの。それに貴方は下弦の壱を討伐したんだもの。それなりのお金が報酬として出る筈だわ。」

「……え？」

下弦の壱を討伐？俺が？

「俺…いや、私が下弦の壱を討伐したんですか？自分はてっきりカナエさん達がやったものだ…。」

カナエさんは俺の真剣な様子を見てか顎に手を当て真剣な面持ちになる。何かを言おうと口を開いたが、それを飲み込み此方に問いかける。

「いいえ、私が来た時には下弦の壱は討伐貴方によって討伐されていたわ。貴方は気を失って居ただけその闘いは貴方の鎧鴉がその目で見ていた。それに嘘偽りはありません。」

カー助が…。だがどういう事だろう？余りにも自分の認識と結果が乖離している。

「どうやら下弦の壱との戦闘の記憶が一部欠如している様です。戦闘の最後が思い出せません。」

「…可能性としては戦闘の間の負傷や事後の疲労によって一時的に記憶が失われたのかも知れないわね。でも大丈夫！此処で暫く休んで行けば記憶も戻ってくるわ」

「気にしないで！」と励ます様にカナエさんは私の背中をバンバン

と叩く。

「姉さん病人に対して何してるの！」

しのぶさんがカステラとお茶が乗った御盆を片手にやれやれといった様子で姉を制する。カナエさんは舌を出してはにかみながらしのぶさんの横から御盆をかすめ取り自分の前にゆっくりと置く。

「このカステラね。この間お得意さんから貰ったんだけどとても美味しいの。良かったら食べて、きつと気に入ると思うわ。」

(交代ね！)

(ツな!?)

「やったー！カステラだ！良い匂い。頂きます！」

流れる動作で身体の主導権を取り大口でカステラを頬張る結。俺とカナエさんに対して遠慮も全く無い様子だがその明るさ天真爛漫故に憎めず自分も表に出る事はしなかった。

「……………あれ?」

「どうしたの?…もしかしてお口に合わなかった?」

その様子にカナエさんとしてのぶさんが心配気に様子を伺ってくる。

「いや…めっちゃめっちゃ美味しいなと！私こんなに美味しい物食べたの初めてです!!」

口に頬張り、お茶を飲み、また口へ運び、お茶を飲む。「美味い！美味い！」と叫びながらあつという間に皿上のカステラを全て平らげた。そしてそんな戯けた様子に二人はクスクスと笑みを浮かべる。

(……………)

些細な一瞬だったが外見とは裏腹な彼女の心的動揺は酷く俺の心を揺さぶった。

何かが少しずつ、だが確実にあの下弦の壺の戦闘から変化して行くのをこの時の俺は漠然としたもので感じていた。

## 第22話 思い

闇夜の中、花柱胡蝶カナエ率いる部隊が疾走する。光無く、足場も悪い林内にも関わらず柱を中心とし一糸乱れず駆ける様子はその部隊が並々ならぬ練度である事が伺えた。

「姉さん！急いで!!」

「待ちなさい胡蝶しのぶ！隊列を乱さず前進しなさい。」

焦りにより速度を上げる妹を柱である姉が制する。隊列の乱れは部隊の戦力、索敵能力を大幅に減少させる。気持ちは確かに分かるがそれでは本末転倒、有事の際こそ冷静な思考が求められる。その点柱である胡蝶カナエは理解していた。

花柱胡蝶カナエ、継子胡蝶しのぶ、そして階級甲の隊士含む総勢二十名。これが現在出動し急行する事の出来る最大戦力である。

半刻前、現場近くである蝶屋敷内は蜘蛛の子を散らす騒ぎとなった。

十二鬼月である下弦の壺の出現、鬼殺隊隊士三名を殺害し今もなお戦闘中、唯一生存し交戦しているのは階級丙である八雲結唯一人。

連絡を受けた胡蝶カナエは即応できる隊士全てを収集し、事の全てを伝える間もなく部隊を率いて駆け出した。細部の指示は移動しながらでも出来る。最短で目標に到着する為に削れる時間は少しでも削っていく。

下弦の壺。近年では現在の風柱である不死川実弥が柱になる際に討伐された階位である。その際は不死川は同格の隊士と二名で闘ったがその者は戦死し、不死川も軽くは無い怪我を負った。現状の下弦の壺がどの程度かは不明だがこれに準ずる実力を持っている事は確かだ。

八雲結。驚異的なまでの回復力、経力を有している彼女だが年齢、経験、実力共に未成熟。飛躍の速度で成長し、階級を上げているがそ

れでも十二鬼月に立ち向かうには荷が重いと感じる。

「お願いどうか間に合って…。」

彼女の顔が脳裏を過る。妹であるしのぶと同年齢であり、あの日の稽古を通じて彼女の存在はしのぶの中でも大きくなった。八雲結の評判が広がるとしてのぶも負けじと稽古に勤しむ。年相応に笑い、泣く。まだ若い身でありながらも自分達と同様に鬼殺隊として目指した彼女は二人の中で唯の鬼殺隊士以上の存在となりつつあった。

「カナエ様！あれを!!」

「ツツ!？」

部隊の隊士に言われるがままその方向を見ると目的地周辺が白く発光するのが遠目ながら確認できた。光は瞬間的なものであったが都市化が進む街灯りよりも強く林の中を昼間の様に照らし出す。

「ツ！何か来ます！総員衝撃に備えて!!」

柱としての経験によるものか胡蝶カナエは直感のままに部隊に注意を促した。瞬間凄まじい風が木々の合間を縫う様に自分達の方へ吹き荒れ足場を木を大きく揺らす。

「これは一体…?」

「分かりませんが目的の場所からの様です。敵の攻撃かも知れませんが、総員気を付けて前進して下さい。」

木々を通り抜けた先の光景は凡そ自分達の理解を越えたものであった。元は墓地であったであろうその場所は闘争により跡形もない。地面の所々は大きく抉れ、墓地に沿うように隣接していた木々は纏めてなぎ倒されていた。

これが十二鬼月。下弦とはいえ最強の壺の数字を冠する者の力。

彼女は、八雲結はどうなってしまったのだろうか。

最悪の事態が頭を過る。まだ周囲に鬼が居る可能性を考慮し、何時でも抜刀出来る体勢で構える。

「カ、カー！下弦ノ壺討伐！下弦ノ壺討伐！討伐隊士八雲結、大キク負傷セリ、支援コウ！支援コウ！」

「姉さん!!」

「えええ！」

彼女の鏖鳥の声を聞くや否や己の出せる全速で旋回している場所へ向かう。

周囲に無数の刀が散らばる中に彼女は居た。仰向けで寝るその顔は少し成長が感じられたが嘗ての彼女と何も変わらない。

それは一見すれば穏やかにも見える表情であつた。背に彼女の血溜まり、身体に無数の傷による出血跡さえなければ。

「ああ…」

しのぶが自身が血に濡れる事も気にせず彼女の傍らで膝を付く。涙さえ無いもののその声は悲しみに満ち、蹲る様に彼女の顔へと手を伸ばした。

「しのぶ…。」

下弦の壱討伐。確かに素晴らしい快挙だ。上弦にも近い實力を持つ今回の鬼は生きていればこの先多くの人を、隊士を殺していた。

だが未来ある彼女を失つたこの結果は果たして本当に釣り合うのだろうか。

「起きなさい。胡蝶しのぶ、彼女は命を以て下弦の鬼を倒した。それ以上悲観する事は彼女も望んでいません。」

それでもきつと彼女は笑顔で笑うのだろう。八雲結はそういう子だ。ならば彼女が遺した道を進む為にも此処で立ち止まってはいけない。

頬に一筋流れたそれを拭いながらもそれを気取られぬ様依然としてした様子でしのぶを鼓舞する。しのぶは変わらず彼女の傍らに居たがもう暫くはそのままにしてあげようと感じた。

「ツツツ!?!」

しのぶが一瞬何かに反応する。横から見るとその瞳は信じられない物を見ているかの様に大きく開いていた。

「しのぶ…。」

私の声に反応する事なく集中した様子で彼女の口元に耳を近づける。

(…口元。…耳。まさか!)

「…姉さん。この子まだ生きてる。」

間髪入れずに周囲の医療班を呼び付ける。私も滑り込む様な形で彼女の側へと移動し、夥しい量の血で染まった着衣を手で弄る。

(あった。胸元に切れ込み、この一撃が他を見ても一番出血が多い。)

男性隊士の視線を逸らさせ無理矢理に胸元を頭にする。血だらけのそれを丁寧に拭いて負傷部位の特定、止血を図ろうとする。

「…傷が無い。」

「ツまさか!？」

その現実にしのがが困惑の表情となる。傷が無い現実、柱であり、姉である胡蝶カナエで視診で初手を間違えた事実。

今まで沢山の医療を行って来た私の技量は一定の水準を越えていると自負している。治療技術もさることながら負傷した隊員のどの傷が深く致命傷になり得るか、何処まで治療すべきかといった戦闘間における第一線救護も抜かりは無い。でなければ今までこうして多くの人を救う事など出来なかった。

いや、今はそんな事はどうでも良い。一分一秒が今は惜しい。

「他の部位を!しのが貴方は右を私は左を確認しましょう。」

「了解しました。」

しのがの力を借りて彼女の身体の傷を手分けして探していく。次いで出血が多い両肩、大腿部に至るまで様々な所を探していくが怪我らしい怪我は見つからなかった。

「嘘。こんなことって…。」

「…姉さん。」

姉の同様もしのがには理解出来た。今まで散々治療を行ってきたがこんな事例は一つも無かった。服は敵の攻撃によるものだろう数々の刀傷を受け、身体も傷に合わせて出血、服もその血で染まっている。この一面に滴る血は彼女のもので無くて何だというのだ。

この出血量、どう見積もっても死亡する量に達している。

「カナエ様。道具一式持って参りました。ご指示を!」

部隊の医療班の主力が到着する。傍らには大掛かりな医療器具が木箱に所狭しと並べられている。これは本来蝶屋敷でしか行えない

大きな施術を外で簡易的に行う為に用意した物品であった。

周りの隊士が施術に掛かろうと準備をする中、私は自分に言い聞かせるかの様に周囲へと話し出す。

「皆さん。彼女、八雲結は軽傷です。周囲や彼女に付着した血は敵の何らかの血鬼術によるものでしょう。身体を診ましたが傷は見当たりませんでした。この状態は恐らく戦闘での極度の消耗により気を失っていると思われます。数日もすれば目も覚めるでしょう。」

私の声で周囲の隊士から安堵の声が出る。通夜のようなだった空気が打って変わり、十二鬼を月を倒した事実の色めき立った。

「皆さんにはこれからこの事後処理をお願い致します。私としぶ、あと一部の勢力を持って彼女を蝶屋敷まで搬送致します。残りは現場の復旧と鬼が遺したと思われる残留物の収集、あと…この血に関しても採取をお願いします。」

その後は早かった。八雲結は無事目を覚まし、十二鬼月の討伐も確実となり比較的少ない犠牲で今回の事件は幕を閉じた。

今日はその日から一週間の夜。彼女、八雲結も問題無く回復、明日にでも任務に望む心積もりであろう。

私は手元の資料に視線を向ける。何度目かの葛藤の末、封を切り中の紙に見を通した。

紙には【完全に一致】のたった一行だけの文字。

あの日、あの場、彼女の服に付着した血液、その彼女との関係を現す結果だ。

確実に致命傷となる出血量、無傷な彼女。もう私では、【花柱】としての私では手に余る事態となっている。

(こうなったらお館様に伺うしかありませんね。)

あの子に裏があるとは思えない。彼女は妹の様に愛おしく、同様に隊士としての在り方は逞しく周囲に良い影響を与えている。

だがこのままで行けばいつか誤解が生まれそれはとても大きな溝になってしまいかも知れない。

それはいけない。彼女は大切に欠かせない存在だ

ならば鉄は熱い内に。この事件過去のものにならない内に手を出す必要がある。

鬼殺隊に彼女を認めさせる為に。お館様になら彼女を収める所に収めて頂ける。

やはり手を出す好機は今しかない。

蠟燭の僅かな灯りの中胡蝶カナエは書をしたためる。それは鬼殺隊、妹達の未来を案じての思いからであった。

## 第23話 柱合会議

(身体能力が上がってる…?)

水の型、雷の型を一通り行った自分達は頭を悩ませた。

空が白み始めた朝、自分達はリハビリを兼ねて蝶屋敷の屋外修練場で型の鍛錬を行っていた。刀は先の戦いで齒こぼれ中なので今は木刀を使用している。鋌鳥を用いて文を送り鋼鐵塚さんに修理を頼んでいるが刀を貰った時の様子を見るに何を言われるか分からず非常に恐い。素直に直してくれるとは思わない方が良いかも知れない。

あれから一週間。療養期間も終えたので今日から修練に励もうと型を一通り流してみたが違和感を覚えた。

技の精度が落ちた訳でも体力が低下した訳でも無い。寧ろその逆、身体は疲れを感じる事も無く、手に持つ木刀は羽を持つかの様に軽かったのだ。

元々の力を全集中の呼吸で底上げしているとはいえ、身体能力の意識と動きの連動は呼吸を学ぶ段階で相違無い段階まで高めている。しかし、今は技を繰り出す毎に違和感は募る一方であった。

(原因としては下弦の壺での戦闘か…?身体になんらかの変化が起きたと見るべきかな。)

(これじゃ当分は任務に就くのも難しいかもね。)  
確かに刀身や身体の上がっているがこれでは厳しい。身体の全てを掌握していたからこそ今まで生き残ってこれたと言っても良い。身体能力は上がっているがこの技の精度では今後の任務に影響も出るだろう。

何が原因かは分からないがこの身体の違和感が消える域まで再度修練する必要がある。面倒だがこれも生き残る為、実力は増している。この身体で極めれば以前より格段に強くなる事が出来る。前は使用出来なかった大技も今後の練習次第では可能となる事もある。

(でも今の状態じゃ雲の呼吸は難しいかな…。)

雲の呼吸は水の呼吸と雷の呼吸を元に自分達が新たに編み出した型だ。水の呼吸の歩法、雷の速度と複数の要素を取り入れる事により技は緩急合わせた独特な物となっている。眼や感が良い者程この技は感覚を感わせ、防御のタイミングさえ掴めなくさせる。

自分と結の呼吸の違いによる利点、欠点は以前から自分達の中にあつた。精神の入替えの時間的ラグに関しては問題無い域まで達した。しかし、呼吸の変化による消耗は僅かに止めるのが精々で互いに水と雷の呼吸を極めていけばいくほど対称的に切り替えの消耗は無視出来ないものとなつた。

その為編み出した雲の呼吸。この呼吸の最大の特徴は水と雷の間と言える型なので呼吸の入替えに挟む事により身体的負荷を減らす事にある。

水↓雷 雷↓水 では複数回までの制限があつたのが 水↓雲↓雷↓雲↓水 と間に雲の呼吸を入れる事により実質呼吸変化による反動は限りなく低くなる。

威力、範囲共に自分達の身体能力を元に考え出されていて威力、範囲共になかなかの物となっている。

現状の雲の呼吸は全八つ。それと威力を追求した竜の型、水と雷の呼吸より派生した雨の型と雷の型がある。雲という名前を元に天候を意識した名前だ。技の種類は非常に幅広く、応用力に関しては他の呼吸より抜き出た物を持っていると自負している。

呼吸を新たに生み出すのは並大抵の事では無い。水と雷の双方の特性を残したまま融合させる。互いに使いこなす為に自分は水の呼吸を、結に至つては雷の呼吸を一から学ばなくてはならなかった。

呼吸を融合させる事でさえ、こんなに難しいのに基本の五代流派を作つた人は本当に並大抵の苦労では無かつただろう。それかそれを可能にするだけの才能の塊であつたかだ。

雲の呼吸の基礎を二人で固めていき技の練度が煮詰まる寸前での下弦の壺との対敵であつた。完成していればあの鬼とももう少し張り合えていたのだろうか。

考えても仕方が無い事だがあの時の死に際の光景、感覚が脳裏から離れる事は無かった。下弦の壺との戦闘は未だ私達の中で完結しておらず私達の中で共通の影として心に留まっていた。

このままではいけない。そんな漠然とした不安を抱えながらもその解決策が出ない事が非常にもどかしくいる。

ただでさえ下弦の鬼相手にあの結果だ。この先の上弦を相手にしていく為には更に力を高めなくてはいけない。

このまま鍛錬を続けていけばその強さまで辿り着けるのだろうか。敵は強くなる一方、数は途方もなく倒しても倒しても終わる気配すら見えない。

(いけない。こんな事考えてばかりじゃ駄目だ。もっと心を冷静に且つ強く在らなくてはいけない。)

庭にある井戸水を汲み火照った身体を冷やす。頭からかけた冷水はそれだけで意識を研ぎ澄ませ。自身という存在を確かな物にする実感があつた。

「修行熱心なんですね。もう少し休まれてからでよろしかったのでは無いですか？」

ふと、後ろに視線を向けるとしのぶさんが寝間着の状態で縁側からこちらを覗いていた。まだ起きたばかりの様子で眠そうに目を擦っている。

「療養とはいえ、数日も身体を動かしてなかったのは落ち着かなくて。リハビリを兼ねて身体を動かしました。」

「余り無理をなさらぬ様にお願ひしますよ。何かあつたら貴女だけでなく私も姉さんにどやされる事になりますからね。」

姉さんつたら普段はあんなですけど怒ると怖いんですよ。としのぶさんはクスクス笑っている。

「気を付けます。幸いにも身体は鈍ってる訳ではありませんでしたので今日はこれで終わりにしようと思います。」

濡れた上着を脱いで準備していた服に着替える。外ではあるが早朝であるし胸にはさらしを巻いている。中身が男の自分としては何も気負うことは無い。下は流石に不味いので後で部屋で着替える事

にしよう。

ふと、視線を感じ、見るとしのぶさんが自分の身体を神妙な面持ちで覗いていた。

「あの…何か？」

「あ、いえ、すいません。ちよつと意外に思いました。」

自身でも無意識なものだった様で見ていた事に謝罪をしながらもしのぶさんは歯切れ悪く話す。

「下弦の壺を討伐した割には余りにも普通な身体だと思ひまして。てつきり男性並みの筋力を有しているのかと」

「あーなるほど。でも自分は例外の中の例外ですので余り参考にしない方が良くと思います」

素手で鬼と渡り合い、かける速度は馬を超える。我ながら人並みを大きく外れているが肉体的には周囲と差異は無い。無駄な肉も無いが筋肉も無し。細くしなやかな身体はその辺の町娘と相違ないものだ。

話を聞しながらもしのぶさんは何処か心此処に在らずの状態だ。いつもはシャキシヤキシヤしている様子なのでこんなしのぶさんは大変珍しい。

「例外ですか。そうですね、本当に些細な事ですが一つ質問します。唯さん貴女は鬼の頸を斬れない隊士をどう思いますか？」

「頸を斬れない隊士…ですか。それはどういう？」

鬼を前にすると怖気づくといった心理的な物だろうか。当たり障り無く話すのは簡単だがしのぶさんからは真剣味を感じる。

「そのままの意味です。技能や精神以前に純粹な筋肉量が足らず鬼の頸を切断する事が叶わない。」

「それは…」

無理と判断するのが賢明であろう。鬼を殺す為に日輪刀による頸の切断が最も有効だ。日の光でも死ぬが鬼が行動するのは深夜、それまで拘束するのも手間がかかる。第一朝まで拘束する必要が無いのだ、各々が携帯する日輪刀で鬼の頸を断れば良いだけの話なのだから。

だがそんな事は今する話では無い。つまりはそういう事なのであろう。

「しのぶさん貴女は…」

「カー！柱合会議！柱合会議！」

カー助では無い親方様の使いであろう鏝鴉が屋根裏の瓦から下を覗く様に叫んでいた。

「八雲唯！明日行ワレル柱合会議ニ参加サレタシ！細部ハ隠ヲ以テ伝エル！心シテマテ！」

柱合会議。柱と呼ばれる者達が定期的な報告会として鬼殺隊の当主の元に集まると聞いた事はある。しかし、自分に何の関係があるのだろうか？思い当たるとすれば先日の下弦の壺との戦闘だが。

「凡そ察しは付きます。そろそろ連絡が来る頃だと思っていましたがい思いの外早いものでしたね」

先程の会話から切り替え自分を見ながら話すしのぶさん。花柱の継子としてかその表情は真剣なものだ。

「しのぶさん。これはどういう事でしょう？下弦の壺戦での事情聴取ですかね？それにしても柱合会議とは些か大掛かりではありませんか？」

「いえ、これは当然の計らいだと思います。下弦とはいえ上位である壺の数字。それに現在の状況も相まつている。逆に言えば私には貴女以外思い浮かびません。」

未だに疑問を浮かべる自分にしのぶさんは苦笑する。その表情は和やかであり、少し悲しげにも感じられた。

「とうとう先を越されてしまいましたね。八雲さん本当におめでとうございます。」



あれから一日過ぎた朝。自分達は鬼殺隊の本部に赴いていた。

思いの外平凡。というのが鬼殺隊の当主である産屋敷邸へ抱いた感想だった。確かに平屋の建物は大きく庭園も綺麗に整えられていたがそれらは自分の思う権力者特有の華美なものでは無く。鬼殺隊当主として必要な最低限のものにも感じられる。

周囲は森林に囲まれており庭園に聞こえる音は風や小鳥の囀りといったものだけ。鬼殺隊を束ねる本部としては意外な程穏やかで自分分は外界とは隔絶した場所なのではないだろうか、という錯覚さえ覚えたと。

此処に至るまでの経路は一切分からない。この館は複雑な方法で隠されているらしく多くの隠によるリレー形式による運搬でここまで来た。一日もかからない時間であったが隠の背中を通して伝わる移動が複雑多岐なもので自分は凡その見当さえつかない。

(カナエさん以外の柱はどんな人なんだろうね?)

(さあ…でも鬼を狩る集団のトップだ。武闘派が多いんじゃないかな。逆にカナエさん見たいな人は少数派だと思う。)

本部と関わりと聞いて正直に言うと自分達の気分は良いものではない。個人で任務を行って来たのもやりやすさあつてのものであるし自分達が任務に取り組む姿勢が組織の枠に収まるとも思えない。それに先日の件もあつて同業の鬼殺隊士も多種多様な人間がいると知った。良い人、悪い人を含めて。

だからなるべく鬼殺隊との関わりは任務に関係することを除き必要最小限にしようと考えていた。下弦の壺との戦いで階級が甲という柱を除けば最高位になった事もあり階級故のトラブルも減るだろうなど思っていたので今回の様な事は余り気が進むものでは無かつた。

「この先の間がお館様並びに柱の方がいる場所です。くれぐれも失礼がないように。」

最後に案内してくれた女性の隠が言う。柱合会議の場所の手前であるが隠は額に僅かばかりの汗が見え緊張しているのが感じられた。

(……ッ)

(…大丈夫だ。落ち着け結。)

こんな整えられた舞台に立った経験が無い彼女からの動揺が伝わる。自分も闘病生活が長くその様な経験は一切なかったのだが一度死んだ影響か気がつけば自身の生死が関わる場以外に緊張というのが消えつつあったので比較的冷静である。

歩く事で下に引かれた玉砂利が鳴る。音をたてながら一歩、二歩、三歩。二十歩目に差し掛かった所で左に曲がると親方様の居る間が見えてきた。

(これは…なるほどな。)

自分達が歩く正面に七人の隊士がおり、恐らく親方様の現れるであろう建物内の広間に片膝を付いて構えていた。背格好は様々だが皆平均して体格に恵まれている。自分が来る事を気配で察知していたようで全員が姿勢を変える事なく視線のみを送ってくる。好奇心、疑惑、敵意。その真意は様々だが余り良いものではなさそうである。そしてそれ以上に自分が強く感じたのは各々が持つ気配の鋭さ。才ある者がその全てを鬼殺に費やし到達する事の出来る頂。そんな力が見える形となつて自身の感覚を通し感じた。

柱という存在。確かに今まで見てきた隊士とは一線を画す存在だ。「件の隊士。階級甲、八雲結ですね。どうぞこちらへ。」

自分から見て右翼一番近くにいた胡蝶カナエさんに促されるがまま柱の後ろ列の中間に自分は配置した。その言動、動作は最低限のもので自身と関わる事を極力避けていた。蝶屋敷では見たことが無い。花柱として本来の対応であるのだろう。自分もそれを理解し野暮な事は言わずそれに従う。

お館様と自分を挟む様に柱が配置している。当主と正面きつて会話出来る立場でも信頼を得ている訳でも無いのであろう。柱の二尺程後方の位置。力ある柱達が正面に七人並ぶ姿はそれだけで周辺の空間を歪めているかの様にも感じられる。

「お館様のお成りです」

幼い白髪の子が年に合わない覇気ある声で告げる。襖を開ける二人の子は当主が襖を跨ぐと同時にその両手に寄り添った。雰囲気を見るに娘なのであろう。

「お早う皆。今日とてもいい天気だね。顔ぶれが変わらずに柱合会議が迎えられたこと嬉しく思うよ。今日は臨時にも関わらず来てくれてありがとう。」

正面の柱が一齐に頭を下げると同時に自分もそれに習う。事前にしるぶさんから聞いていたお陰で無駄な騒ぎを起こさずにすんだようだ。

「お館様におかれましても御壮健で何よりです。益々の御多幸を切にお祈り申し上げます。」

中央にいた恐らく一番高齢であろう柱が告げる。年齢は恐らく50半ばほど。

「ありがとう巨影。本日君達に集まって貰ったのは他でも無い。八雲唯彼女の事についてなんだ。」

「彼女については我ら一同話は聞いていますお館様。単身にて下弦の壺を倒した隊士との事です。」

次いで中央付近に鎮座していた男が声を上げる。燃える様な炎の装飾を施し、髪もまた炎を彩る色をしている。年齢は40半ばで先に話した事からもこの二人が柱の中でも中枢を担う存在の様だ。

「その通りだ慎寿郎。私はね彼女に新たな柱になって貰いたいと考えている。唯前に来てくれるかい。」

お館様の一声で前に居た柱が自分を中心に一齐に道を開ける。柱達の視線に晒されながらも自分はお館様の正面。柱達の中央へ歩みを勧めた。先程の高齢の二人は視線を向けるものの表情は読み取れない。カナエさんは視線を伏せ、頭に装飾を施した男は「派手だなー」笑みを浮かべている。白髪の傷だらけの男が一番分かりやすく敵意を向けて来ており視線だけで殺して来そうな勢いだ。

「彼女が柱に相応しいかそれをこの場で決める為今回柱である君達を呼んだ次第だ。どうだろうか？君達から見て彼女は柱に相応しいだろうか？」

お館様は和やかに周りの柱へと問いかけた。

## 第24話 柱合会議2

「少々早計かと思えます。お館様の意見とはいえ私は賛同致しかねます。」

否定の言葉を述べたのは以外にもカナエさんであった。周囲の口が開く前に答えた事からこの場が自分の事で開かれたこと、そしてそれを否定する意思も事前に持ち合わせていたのかも知れない。

「胡蝶。お前はお館様の意見を否定するというのか。」

静かに話すのはこの場で一番体格に恵まれている男。大きな数珠を首から下げており、手に持つ数珠は己が持つ腕力で軋む程力を入れている様子。言葉は荒らげていないがその真意はお館様の意見を曲げた事に対しての怒りが籠もっていた。

「そうではありません悲鳴嶼さん。彼女は隊士になって二ヶ月程度です。まだ日が浅い。せめて半年様子を見てはいかがでしょうか？」

「ほう…二ヶ月で下弦の壺討伐とは派手な奴だな！となると今までの柱の中でも最短だ。派手だな！俺はこの娘を推すぜ！」

カナエさんの言葉に反応して頭に装飾を施した男が応える。どうやら人目に立つ事を花としている人種の様でその声、身振り手振りと言たら大きい。

「義勇。彼女は君の育手である鱗滝左近次から教えを受けている。兄弟子としてどう思うかな？」

「俺は何も…。彼女が柱になると言うことは次の水柱になるといった事でしょうか？」

どうやら兄弟子らしいその人は淡々と答える。半分で色が変わる稀有な着物を纏っている。感情は読みづらく自分が水柱の後釜になる事を気にしている様子であった。

「ならお前えはお役目御免だなあ。」と白髪の身体に多くの傷を持つ男が声を荒らげ周囲もざわつきかけるが年長である男の咳払いで静かになる。どうやらこの最年長の男が実質的な柱のまとめ約らしい。

「いや、そうでは無いよ。彼女は元鳴柱である桑島慈悟郎の教えも受けている。それに報告では水と雷から新たな型を生みしそれを武器にしている。そうだね結？」

お館様に質問され再度周囲からの視線を受ける。鬼の殺気とも違うそれに調子を崩されそうにもなるがどうせなる様にしかならない。強くないこう。

「はい。私が生み出した雲の呼吸を軸に水と雷の呼吸を使い分け戦闘を行っています。」

呼吸を生み出す隊士は少ない様で柱達は再度ざわつく。それと同じに最も自分に対する殺気が強い白髪の男が直立した。

「下弦の壺を単身討伐した事に関しては何も無い。第一討伐に関しては嘘や欺騙は無理な話だ。事実お前はあの壺に勝ったんだろう。だが経験や人徳以前に俺達はお前の実力が知りたい、それも明確な形で。それで反対派の意見が出るようなら俺が出る。お館様、巨影さん失礼仕る。」

(ツツ…！)

白髪の男が距離を詰め拳を放ってくる。目や急所を狙う攻撃。その一撃、二撃、三撃目をいなして次いで迫る足払いを後方への跳躍で回避し戦闘体制をとる。この間にも周囲から静止の声が掛かるが正面の男は無視し攻撃の手を緩める事は無い。

「隠！木刀を二つだ。急げ！」

「不死川やめろ!!」

どうやら模擬戦まで行うつもりらしい。不死川とは周囲の静止の声を聞くにこの男の名らしい。

「……やったなお前。階級が上だからと下手に出れば好き勝手やりやがって。自分は二刀流だ。隠、木刀なら二本だ。」

初めこそ新たな環境で周囲から目立つ事が無い様になっていた自分だがここまで来ると流石に気分を害してくる。急な呼び出し、本人そっちのけの会議に攻撃ときた。正直もう遠慮はしない。自分の好きにやらせて貰おう。

(私も思う所があるけどなるべく穏便にね。)

（大丈夫だ結。逆に考えると柱と戦う良い機会だ。現状技の精度には不満があるが彼等と自分達にどれだけの差があるか確かめて見ようじゃないか。）

「面白え！やれるもんならやってみろよ！力無い物が柱に着いた所で直ぐ任務で死ぬのが落ちだ。そんなんで部隊の士気が下がる様なら俺が今ここでお前を殺してやる。」

なるほど。正面に居るこの暴力が具現化した様な男は思いの他理性的だ。手段や方法はともかくその真意は的を射ている。命の駆け引きがある鬼殺隊にとって背中を預けるか否かを決めるして最も効率的なのはこれが一番だ。だがしかし、やり方が不器用過ぎるのではないだろうか相当歪んだ人生でも送ってきたのか。

手物に來た二本の木刀を構え呼吸を行う。ここまできると他の柱達も静観を決めた様で自分の力量を見定めようとしている様子だった。

風の呼吸 弐の型 爪々・科戸風

正面で振るう刀に合わせようと刀を構えると意外にも不死川は手前の虚空に木刀を振るう。一瞬疑問が沸くが迫る殺気に委ねて上に跳躍すると地面に三閃の斬撃が走った。

（風の呼吸を初めてみたが遠距離か！間合いが取りにくいな。）

「上空に跳んだって事は殺してくれと言ってる様なもんだぜ、おい！」

風の呼吸 肆ノ型 昇上砂塵嵐

雲の呼吸 肆ノ型 浮雲

着地までの隙に乗じて下から広範囲の攻撃を攻撃を放つ不死川。状況判断能力も高く上空に飛んでから攻撃までのタイムラグは零に等しい。その時に最適な一手を打つ事が出来る経験を詰んでいてそしてそれを可能にする鍛錬を重ねている。この数手でも彼が柱と呼ばれる存在で有ることを認識させられる。

だが自分もこの程度では無い。下弦の壺に遅れをとったもの自身もそれなりの鍛錬を重ねている。人の杵を大きく越えた脚力を呼吸で更に強化する。何も無い虚空を蹴ること数回。空を裂く音を残し何も無い空地で方向変換を行う。これが雲の呼吸の肆ノ型だ。

「ッ!?何だと!!」

再度虚空を蹴り二刀を構える。浮雲は空中での移動を可能にして  
いるがそれは一度に数回程度。つまり空中を移動し続ける事は出来  
ない。そんな人外な機動をするつもりも無いがこの数回空を走れる  
事は戦闘をより立体的に複雑なものにする事が出来る。技を外した  
と見るや直ぐ様こちらを迎撃しよう構える判断は良いが意表を突  
いた分枝の速さにはこちらに分がある。

雲の呼吸 雨の型 時雨

風の呼吸 参ノ型 晴嵐風樹

上から下へと連撃を行う雨の型を風の呼吸でも手数が多いのであ  
ろう参の型で向かい打ってくる。だが二刀による連撃を一刀で捌き  
きれず。僅かながら不死川に攻撃が通る。

「ッは!やるじゃねえかそうこなくっちゃな!」

風の呼吸 壺の型 塵旋風・削ぎ

雷の呼吸 漆ノ型 紫電一閃

構えから直接的な威力ある技と判断し、こちらも同系統の技を繰り  
出す。互いに衝突し地面には夥しい斬撃の跡が残ったが不死川は自  
身に迫る致命的なものを獣の様な感性で避けており身体の裂傷は最  
低限に留めている。こちらも僅かに掠るものを幾つか受けたが持ち  
前の頑丈さ故血を流すまでには至っていない。

「そこまでだな双方武器を収めよ。」

年長者の柱の一声で数珠を持つ柱と派手好きな柱が自分達二人の  
間に挟まる形で現れ中止となる。不死川もこれ以上は無理と悟った  
のか素直に木刀を投げ捨てお館様へ「申し訳ございませんでした。」と  
謝罪する。

「もう満足しただろう不死川よ。お前のその考えは間違っただけが少  
し度が過ぎる。我ら一同の疑惑を払拭してくれようと行動してくれ  
た事には感謝するが私の立場上今のを全て見逃す事は出来ん。まず  
はその若人に言うことがあるのでは無いか?」

「…試す様な真似をして申し訳無い。」

年長者の柱に諭され不死川から謝罪を受ける。こんな獣の様な男

を御する事が出来るなんてお館様とこの男はなかなかの器なのだろう。それ以前に不死川は謝罪という行動に比例して目が殺意剥き出しのままだ。異様に怖い。

だが手段も兎も角、不死川は本人なりの理を通した結果なのだろう。確かに彼の言い分は終始一貫しており頭では一応理解出来ている。だが散々言うが手段が最悪だ。学も考えるだけの頭もあるのに実行する為の方法が武闘派過ぎる。

そして現在の自分の力量が柱に対し何処まで通じるのかも臆げながら実感出来た。力量の差は圧倒的では無い。そして経験という面ではまだまだ成長の見込みがあると言うこと。今回の様な新たな技、増しては遠距離もこなせる風の呼吸と手合わせ出来た事は確かな経験として力になると感じる。

「ありがとうございます。」

素直に礼を言うと思わなかったのか不死川は「ハッ！」と一笑した後、元の場所へ戻る。周囲の柱からネチネチと言われている様だが比較的新しい柱だからか先程の件もあり大人しくしている様子であった。

「不死川が申し訳なかったな。彼奴なりに考えあつての行動だ。どうか許して欲しい。」

燃える様な髪色をした男が優しくに話しかける。

「お館様。私は彼女の柱入りを煉獄の名において賛成致します。若いのに対した実力者だ。うちの杏寿郎が後任した際は良き友となる事だろう。」

元氣潑刺と話すその姿は髪色、服装もあつて炎そのものだ。歴代の炎の呼吸の継承者は煉獄家から出ると言う話を聞いた事があるが彼がそれなのであろう。これ程炎という言葉が似合う人も他には無い。「それは良かった。後は巨影だね。鬼殺隊の歴史上最も長く柱を歴任し、未来を予見するとも言われたその眼で彼女が柱として相応しいか見てもらいたい。」

「過分なお言葉でありますお館様。数百年鬼殺隊を支えた貴方方一族の前には私程度の存在大した物でもありません。」

最年長である彼の見た目は他の柱と比べて肉体的に優れている訳でも無く年相応だ。薄茶色の着物を羽織っており袖から覗く腕は年老いてなお修練を重ねている事が窺える。衣服を纏わぬ部位、顔や首、腕に至るまで大小様々な傷跡が今までの鬼との戦いの歴史を物語っている。

「さて我ら一同彼女に挨拶もおらん。これから話す上で改めて紹介をしておきたい。柱云々はそれからでも良からう。私は小鳥遊巨影。少々柱を長く勤めてるだけの老いぼれだよ。」